新剣豪伝

秘剣鱗返し

早乙女 貢

時代小説文庫

秘剣鱗返し

甲斐府中にある清光寺の和尚に居合抜刀術の修業を申し入れる美しい娘がいた。修業の目的は上意の仕手役で逆に斬られた許婚の仇敵を討ち果たすためだった……。強行な修業の末、秘剣を会得する娘宇乃を描いた表題作『秘剣鱗返し』自分を捨てた母親とその情人を仇敵とする娘お葉を描いた『狂刀系図』など、女を捨て、ひたすら剣の道を究める女人剣士たちの怨念の刃は儚くもろい。

カバー装画　東啓三郎
カバーデザイン　熊谷博人

新剣豪伝

秘剣鱗返し

早乙女 貢

時代小説文庫

秘剣鱗返し　新剣豪伝

早乙女 貢

時代小説文庫 18—2

380

富士見書房
ISBN4-8291-1101-1 C0193 ¥380E 定価380円

—時代小説文庫—
早乙女貢作品集

忍法川中島
秘剣鱗返し
南海に叫ぶ

カバー　旭印刷

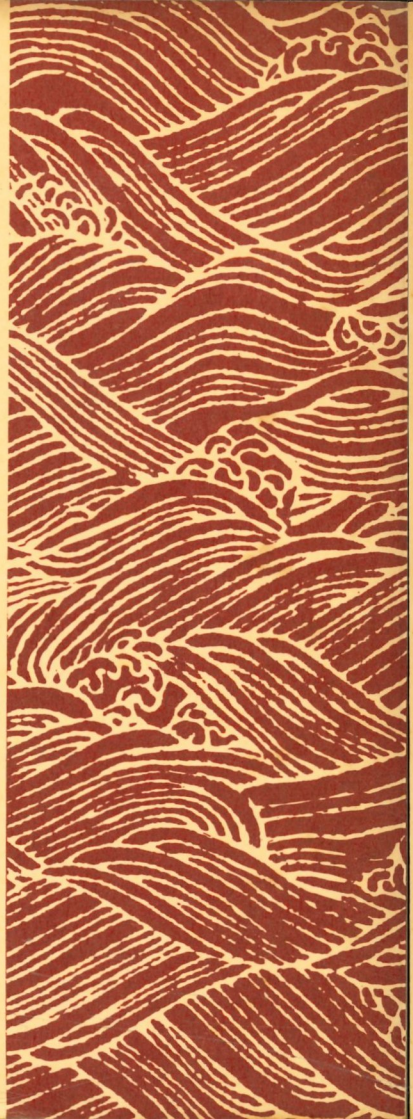
時代小説文庫　101

秘剣鱗返し

新剣豪伝

早乙女　貢

富士見書房



秘剣鱗返し

新剣豪伝

早乙女　貢

時代小説文庫　101

時代小説文庫　101

富士見書房

秘剣鱗返し

新剣豪伝

早乙女貢

目次

秘剣鱗返し　五
弦月、雲を斬る　三九
野ざらし鉄砲衆　七一
狂刃系図　一〇四
蟹眼の大事　一五〇
怨み兜の八幡座　一八六
秘伝闇の蜘蛛　二三四
解説　清原康正　二六五

秘剣鱗返し

1

侍は、その仕えた主君によって運命が左右されるといってよい。小南数馬が二十三歳という若さで、そうした場に立たされたのも、主君の発作的な癇癖の故だった。

「斬れ」

言葉短かに主君は言った。

理由は家臣の問うところではない。況や軽輩にあっては、下命も間接に受ける。

数馬に白羽の矢が立ったのは、かれが去年の御前試合に卓抜な技倆を示したからにほかならない。若手で数馬を制し得たのは小姓の本多弥左衛門正暉のみであった。

腕前によって下命あったとすれば、

（何故に本多を差し置いて）

と、疑問を抱くのは当然である。数馬の身分ではしかし、そうした反問も、もとより許されない。かれがその理由を知ったのは、事が畢ってからである。

「斬る……玉置勘解由どのを？　罪あれば切腹仰せ付けらるるのが筋と存じますが」

纔かに数馬は言った。これは上使が遠縁にあたるゆえの心安さからである。上使は降旗右衛門、六十を越していた。

「老職より切腹を勧められた。内意を伝えたのじゃ。主君の御勘気を蒙った以上、切腹すればわれらも口添えの余地がある。遺族はもとより一門類葉禍を免れよう。が、勘解由め肯じぬ。よって、かくの如き次第となったのじゃ、詮かたない」

数馬一人を伴ったのは、勘解由に油断させるためにほかならぬ。勘解由は神夢想林崎流の使い手として聞えていた。齢四十不惑を目前にしてはいたが、壮軀に衰えは見えない。

右衛門は上意の書を奉じて玉置邸を訪れた。予め意を通じてある。上へ招じると勘解由は肩衣をつけて平伏した。

右衛門が切腹の御沙汰を伝え、奉書紙を裏返して見せるのが合図である。数馬が飛びかかって斬る。こうした場合、普通、副使一人に仕手二人乃至三人というのが常識であった。数馬の身分は、副使でもなく、仕手というには若い。かれらを迎えた勘解由の眼に、疑惑はない。

数馬は、さらに放念させるために、故意と距離を置いた。二間を隔てた。

この距離も、しかし、若い体軀には、さしたることはない。膝を立てるや跳躍して、一歩着した刹那、抜刀して拝み討ちに斬り下げる。

自信はあった。人を斬るのは、はじめてである。罪囚の生胴試しなどやった者もいる。が、数馬は巻藁しか経験はない。寛永八年三月、すでに世間は泰平に馴れてきている。殺伐なことはうとまれはじめていた。

「抜かるなよ」

右衛門は老獪に笑みを湛えて、注意した。

上使は上意を伝えるだけだ。それも切腹の沙汰である。切腹する男ではない。だから、斬る。仕手の役目は重い。

勘解由の屋敷は地勢の都合でそうなったのだろうが、書院の間取りが控えの間がわきについている。したがって数馬が上意下達の間、控えたのは、下座に退った勘解由の右側。

閾を隔てたので、八畳間の中央下座に在る勘解由との距離は一間半余り、過不足なかった。

（討てる！）

と思った。

「――行跡宜しからず依って切腹申し付くる」

突っ立ったまま、右衛門は読みあげた。

勘解由がつと顔をあげる。何か言いたそうに唇を動かした。ひらりと奉書紙をその眼前に裏返して見せた。

（今だ）

数馬は刀を摑んで飛びあがった。一間を跳んだ。抜刀した。勘解由が咄嗟に身をひねる。その頭上に、

「上意！」

叩きつけた。次の瞬間、噴血がのぼる――その血を、たしかに、数馬は見た。

が、その血は、おのれのからだから噴出したものであることを知るのに、ひと呼吸の間があった。あまりに鮮やかな腕前だった。なぜ、そんな結果になったか。数馬には理解の外だった。勘解由の刀は下腹部から胸へ、ななめに掬い斬りに走った。その尖先がかれの血を眼前に噴きあげたのである。

勘解由はその場から逃走した。あまりにも鮮やかな腕前に上使の右衛門は刀を抜くことすら忘れた。抜いても、その脱走を食い止めることは出来なかったろう。数馬が、おのれの血の中でもがいているのを尻目に、勘解由は走り出て行方を晦ました。すでに家人は、内意を受けた直後に、ひそかに落してあったのである。

「数馬さまが!?」

急報を受けたとき宇乃は縫物をしていた。

数馬へ嫁ぐための白無垢であった。月が変ると早々に、式をあげることになっていた。十五歳という年齢は、この時代、婚期としては早くない。

屋敷は三町ほどしか離れていない。とるものも取りあえず駈けつけた宇乃を見て、数馬は微笑んで見せた。

「――大丈夫だ……死なぬ」

その言葉とはうらはらに、死の翳が微笑をこわばらせ、呼吸もすでに尋常ではなかった。応急の手当をした医者も、もう絶望だと首を振っていた。

「数馬さま、死なないで！　あなたさまに先立たれたらあたしはどうなるのでございます」

泣きじゃくる宇乃の言葉も、もう、数馬には聞えないようであった。色を失った唇が、無念げに歪み、最期の言葉を洩らした。

「い、居合だ……神夢想流……居合だ！」

それが最期だった。

女の宇乃には、居合といっても、すぐには兵法のそれとは、気がつかなかった。死の手につかまれた者の、無意味な冗言と聞いただけである。悲しみが彼女をとらえ、ひしとすがって、ただ泣いた。

数馬の死は不名誉なものだった。主命を完遂し得なかっただけでなく、おのれは死に至り、不埒者を逃亡させた。ただに数馬の恥辱というだけではない。家臣の統制を失敗った主人の恥辱になる。勘解由が他国へ走ってこの顚末を饒舌れば、恥は拡がる。

普通の大名でも、そのプライドがある。況や、この主君は、それが尋常ではなかった。

世に〝駿河大納言〟と称う。二代将軍秀忠の伜で、三代家光の弟である。

二歳違い。二年遅く生れてきたことが、この男を世にも不幸な生涯とした。

人生の運不運は、その星によるというが身近な戦争によっても左右される。なまじ天下の将軍の子に生れたのなら、かれのような気質は先に生れるべきであったかもしれない。

気質なり才能なりは、後天性もあるが、先天的に備っていたとすると、この幼名国松こと忠長は兄に生れたなら、家光を上廻る政治をしたかもしれない。その覇気と叛逆性の荒々しい血は、父の秀忠よりも、むしろ叔父の忠輝や頼宣に似ていた。従兄の忠直にも共通した面がある。

それはあながち似たような境遇からくる運命ではなく、やはり血であろう。

運命に柔順な者もいれば、叛逆せずにはおれない者もいるのだ。忠長はその後者だった。

あらゆる場合にそうであるように、人間の運命には、その周囲が影響を与える。大家族の場合、いやでもそれを免れない。

忠長の場合も、家光の乳母春日局と実母お江与ノ方の勢力争いに巻きこまれて、憎悪の渦の中で、揉まれたことが性格をひねくれさせたといわれる。

家長を絶対とする封建の制度が、実力如何こそ男の地位を決めるもの、と信じたい乱世の血が、忠長の五体に鬱勃たるものをあふれさせていた。

乳母たる春日局が竹千代と国松の差を大きくしたいと思うほど、お江与ノ方は国松に情愛をそそいだ。女心の狭さは、天下の政治よりも、身近な者の感情に左右される。

お江与ノ方が、国松を不憫と思う気持には春日局の勢力の伸長がある。すなわち、おのれの権威の衰退である。そうした母心は、愛情というより利己心といえる。それを子への愛情と錯覚しているところに、始末の悪さがあった。

甲、駿、遠三国で五十五万石という大守で従二位大納言の官位を得ても、天下の大将軍との開きは大きすぎた。忠長は日夜、鬱屈として、鷹狩鹿狩などに興をもとめていた。忠長が僅かのことで、家臣などを手討ちにし、婦女を凌辱したりするようになったのも、自負の裏返しであろう。

玉置勘解由の罪も、普通なら死に値するものではない。こうした主君を持ったことが、数馬にしても、宇乃にしても不幸というしかない。

2

宇乃はそれから十日ほどの後、駿府城下から姿を消した。

どこに行ったのか、誰もその行方を知らぬ。数馬の仇討ちに勘解由の後を追ったのであろうと、噂が流れたこともあったが、宇乃が兵法を習得していたとは誰も聞いていない。嫁ぐべき先を失って傷心の家出であろうと人々は語った。

駿府を後にした宇乃が行った先は甲斐の府中、甲府であった。

甲府は、もともと、忠長が駿府に移る前にいたところだ。信州小諸城十万石から従四位下左近衛権少将に任じられて甲斐一国を賜わって移り住んでいた。

宇乃も父母や一族とともに、忠長の駿府移封に従ってくるまで幼年期を甲斐で過している。小諸を発ったのが二歳のときで、信州のことはほとんど憶えていないが七歳まで住んだ甲府は、思い出が多い。

山々にとりかこまれた盆地の甲府は、人の往来のはげしい駿府から見れば、別天地のような静けさだった。笛吹川の流れにうつる雲のゆきき も、日ごとに違って見える山々のたたずまいも、幼い心に灼きついて懐かしい。

あるいは、ここで母を失ったせいかもしれなかった。いまの母は父半兵衛の後添いで駿府で

嫁してきた人だ。実母は、もともと蒲柳の質だったが、甲斐を離れる前に歿った。

知らない土地で死にたくない、と言い言いしていた母である。その意味では本望だったろう。あるいは傷心の宇乃は、母の霊に呼ばれたのかもしれなかった。母の墓があるということが、心を休ませるような気がしたのも事実である。甲斐のくには、宇乃の心を和めるものを持っていた。

だが、甲府に来て、久しぶりの山の空気を吸い懐かしい風物に浸ったとき、宇乃は、やはり、それだけの気持で来たのではないことをはっきりと知ったのである。

山麓の小高いところに、清光寺という臨済宗の寺がある。小諸から移住するとき、先祖の骨なども持って来て、以来、菩提寺になっている。母の骨もこの寺裏の墓地に埋めてある。

墓詣りを済ませて来た宇乃は、和尚を探した。小さな寺である。小坊主の姿も見えない。裏に竹藪が山の斜面を蔽っている。嵐気が竹の先端を緩慢に動かしていて、遠い潮騒のような音が伝わってくる。

その竹林の中に、白い法衣が動いていた。

「和尚さま？」

宇乃は竹林に入っていった。和尚に違いなかった。竹林の中をそぞろ歩いている。そのうろ姿には、俗塵から離れた入禅の老僧という感じはない。老武士の殺気がある。

そのような感じを受けたのも、帯に一刀の鐺が見えたからであろう。脇差だった。如何に乱世の余燼くすぶる時代とはいえ、僧侶の帯刀は異なものであった。

突然、裂帛の気合が奔った。殆ど、袖が動くとも見えなかったのである。

老師は歩いていた。あとに、ゆらりと太い竹が揺れて落ちた。

すでに還暦を越したはずの老僧である。まるで白昼夢を見るようであった。

「――来るがよい」

和尚は言った。宇乃が見ていたことを知っていたのである。

「ただ、母御の墓詣でに来たのではあるまいの」

「――はい」

「駿府のことは聞いた。そなたの嫁ぎ先であったとのう」

それだけで、意は通じた。和尚は、その話を聞いたとき、宇乃がくるであろうことを察していた、と言った。

物外和尚の過去を知る者はない。が、武士くずれであることは、そのからだでわかった。本人も語ったことはないが、兵法鍛錬の過去は、五体に隠せない特徴をきざんでいる。乱世の兵法修業は本刀か刃引の本身である。修業だけでも生傷は絶えない。だけでなく戦場往来の栄光が五体を大小の傷で彩っていた。

宇乃は憶えている。夏のことで和尚が下帯一すじになって、薪を割っていた。その胸や腕や太腿に、夥しい傷痕があるのを見て驚いたものだ。

物外和尚は、自らは語らなかったが、かれが居合の達人であることは、ある事件によって知れ渡った。

寛永元年のやはり三月、牢人者の五人連れが府中に来た。人目のないところなら追落し斬剝ぎも日常茶飯事とおぼしい牢人者たちであった。

「今宵の宿は、あの破れ寺にしようぞ」

かれらはひとり決めして、寺にくると、どかどかと庫裡に入ってきた。

庫裡では、物外和尚が子供たちを集めて習字を教えていた。その中に宇乃もいた。

「坊主、一夜の宿を頼むぞ、それと飯とな」

「般若湯もあるだろう、けちけちせずに出せ」

傍若無人にかれらは言った。

和尚は、断わる、と言った。子供らに怪我をさせては、と案じてのことであろう。牢人者たちが激昂したのはいうまでもない。

「生臭めが、ぶった斬るぞ」

「斬ってしまえ、とろくさい」

半数ほどが抜刀した。子供たちが泣き騒いだ。主だった男が、わけ知りぶった申し出をしたのが、かれらの命とりになった。

「いかにド腐れ坊主じゃとて、据え物斬りは後味がよろしくない。抜け」

脇差を鞘ごと投げ与えた。物外和尚が左手で摑んだ刹那、抜き討ちに斬りかかったのである。和尚がつと片膝たてるのが見えた。拝み討ちの刀は、虚しく炉端に切り込んでいた。その腹部から、どっと血が噴いて、灰を舞い立たせた。

そのとき和尚が、何か叫んだ。牢人者たちの怒号が庫裡をこめていた。罵声と悲鳴だった。和尚は二ノ太刀で右側の男の水月を刺し小薙刀をふるってきた男を股から斬り上げ、四人目の腕を斬り放した。

したがって無傷だったのは一人である。戸口の近くにいたのが幸いして、逃げだした。

血の中で和尚が刀を投げ捨てて、

「由ない殺生をさせてくれたわい」

と、呟いたのが、宇乃の記憶に残った。

これが後世だったら、何かと面倒になったろう。相手が無法者とはいえ、仏門にある身が、寺内でこれだけの殺生をしたのである。無事には済まない。

時代がよかった。未だ大坂の陣から十年。おのが身を守るのに、火ノ粉を打ち消すのは、疑いも抱かれなかった時代である。殺生戒もこの場合、論外とされる。物外和尚にお咎めはなく、むしろ、忠長は、これを褒めた。領主が荒い気性であったことも、幸いした。

宇乃をこの寺に引き寄せたのは、そのときの鮮烈な光景ではなかったろうか。

数馬は勘解由の居合のワザに破れたのである。居合のワザの精妙深遠なるを学び会得せざるに於ては、これに打ち克つことは叶わぬ。

和尚が駿府城下の話を聞き、宇乃を思いだしたときから、予期していたというのも、この師弟だけに通じる心であったろう。

「女子の身にて、容易ならざることはつくづく承知しておりまする」

宇乃は言った。眉宇に決意が窺えた。和尚はかぶりを振った。
「これが打ち刀をふるうとあれば、その腕にては、成るまい」
「……」
「尺八寸にて居合なれば、励み次第で、ものに成るじゃろ」
仏門にある身が、殺人刀を伝授するとは容易ならぬことである。況や、相手が女人ならば、尚更だった。
物外も、宇乃が手習い子のころからの縁由がなかったら、その気にはならなかったであろう。
宇乃は近所の農家納屋に起居することにした。
物外が毎日、教えにくる。
「山門を出れば、坊主ではない」
物外は勝手なことを言った。
宇乃の美貌と若いからだに惑うことの弁解ではない。枯れた身には、その懸念はないものの如くであった。
物外はまず、宇乃に坐禅を奨めた。女人は無念無想の境地に到達すること男の比ではなく、難い、といわれる。情感が複雑にして濃やかだからである。物外はそれを強調した。
「男の修業の倍はすると思え」
まず、おのれを虚しくすること。精神の動揺があっては、居合の神髄は会得し難い。
その抜刀斬撃の阿吽の呼吸は、手にして手にあらず、腕の動きの、意識して為すそれではない。一瞬にして抜き、斬り、納める。文字通り、間髪を入れぬ電光の素早さである。手は心に従い、心は抜かずして、すでに斬る。抜く前に、敵を斬るワザが居合の奥義である。為に、心の乱れ、心の揺れ、心の惑いがあれば、居合はものに成らぬ。
「如何なることでも、仰せの通りに」
宇乃は言い、そして、行った。

3

坐禅はいうまでもなく、股をひらく。着物の前がひらく。女性には耐え難い姿態である。羞恥を感じるとき、すでに坐禅の意味は喪われている。宇乃は、羞恥を忘れた。物外和尚を男と思わねばいい。
そこに居るのは影だと思う。影に人格はない。影は在るも、在ると思わず、我またここに在るも、在ると思わず——空と虚におのれを溶けこませた。
その境地に至るのに、宇乃は二か月を要した。
「こころみるぞよ」
物外和尚は、手を股間に差し入れた。
宇乃の表情は変らず、呼吸もまた乱れない。和尚は、陰毛に触れ、女の局部をなずった。緊張も弛緩もなく、やわやわとそこは若い娘の肉襞を示していた。
刀をとらしめたのは、その後である。

普通、居合には、刃引きのものを用いるが敢て物外はそれを避けた。

仇討ちは気を永くしていては、一生賭けても探し出せぬことがある。乱世から何ほども経ていない時代では、殊にそうである。人々に定着性が少ない。これが、何処の国侍とはっきりわかっているならまだしも、行方を突き止めるに容易でない相手である。

よしんば、住所生活がわかっていても、人間には病死のことがある。狙う相手が病死もしくは不慮の死を遂げてしまっては、苦心も水泡に帰するのである。

早きに越したことはない。一流の腕前には心技ともに完成を要求されるが、女性の身で剣の師表と仰がれる存在たる必要はなかった。

「斬る」

仇を討つための特技である。

「仆す」

目的のための、早い習練が望まれた。

多少の怪我を慮っていては、習得が遅れる。形より入って、実を得る。本道を辿ることこそ、真の意味の剣の技を得る近道であったが、

「相手を仆し得るならば、わたくしの身はどうなってもかまいませぬ」

必死の想いをあらわにしての宇乃の頼みに物外は、さらにその道程を短めたのである。

俗に〝居合十年〟という。十年にして、剣の意を得、これをよく抜く。二十年にして、おのれの心、剣に宿り、敵を仆して仆したを知らずと。

その〝神技〟まで究める必要はなかった。

二十年、この長年月を、敵は坐して待つか。

「居合のワザを会得するには、左の指を切り、あるいは右膝を切ることがあると聞きました、それでもかまいませぬ」

宇乃は、こう言いたかったにちがいない。練習中に負傷し、それが仇討ちを阻むことになるとすれば、止むを得ぬと。

数馬とは婚約の仲である。正式に輿入れした場合には、卑属としての仇討ちの義務も生じる。が、無垢の身では、ただの嫁かず後家にすぎない。

いうならば、宇乃の悲壮な決心も、所詮は恣意である。むしろ理由の正当を欠く。

（数馬さまが、あたしを守って下さる）

宇乃は信じた。

仇討ちをするのは数馬の恨みを霽らすためである。他意はない。そのこと一つにうら若い娘の青春を賭けようとする宇乃の行動が守られぬはずはない。宇乃は信じた。もしも、それが成らぬとあれば、それは数馬が欲しないときである。返り討ちとなれば、それも数馬が望んだ結果であろう。

他人から見れば、神がかりともとれる。それだけ必死なのだ。おのれを運命に委ねて宇乃は省みなかった。

「――抜け。ただ抜け」

物外和尚は、そう教えた。

抜いて納めるのが〝居合〟と思う者が多い。

抜けば納めなければならぬのは道理だが、抜くことの目的は〝斬る〟にある。斬ることに於て失敗すれば、納めることも出来ないのだ。

居合は、一名〝抜刀〟とも称うが、そのほうが事実に即している。抜刀すなわち抜き打ちである。居合とは、居ながらにして抜き合わせるという意であるが、これを居相と書くのは、居想にして、常住坐臥、備えを怠たらぬ念想を意味する。

物外和尚は、ある日、懐紙に一首の歌を書き流した。

抜かば斬れ、抜かずば斬るなこの刀
　たゞ斬ることに、大事こそあれ

「この歌の心を知るがよい。居合のワザは、すべてこの歌に尽きる」

「お師匠さまが、この歌を？」

「わしではない」

物外和尚はかぶりを振った。

誰が作ったにあれ、歌はそれが生れたときの心を他に伝えることで、生きる。宇乃は、ひまがあるとこの歌を口にした。

抜刀の遅速は肘を中心とし半円を描くことに尽きる。腕に加速せんとすれば、腰のひねりによるしかない。一瞬の呼吸である。

ひと月経った。

抜刀に明け、抜刀に暮れる毎日が、宇乃の相貌も変えた。

駿府では五指に入るといわれた甘い美貌は冷徹な冴えたものになった。意志の強さが、どちらかといえば厚ぼったく受け口だったのを冷たいほどうすく引き締め、双眸は黒曜石の煌きを持った。

抜くことを、教えられた宇乃は、鞘に納めることも自ら会得するようになっていた。これは水練に似ている。

泳法を知るには、水への恐怖を除くことが最初であり、水に潜ることを知れば、自ら泳ぐことを知る。

物外はさらに腕を磨かしめるに、雑木林を走ることを命じた。

縦横に枝葉が眼前を遮っている。走りながら抜討ちにこれを斬るのである。走る速度をゆるめれば、これは容易であった。斬る、納める。斬る、納める。その速度を増さしめた。

宇乃は音をあげなかった。

足も脛も腕も、掠り傷打ち身の痣でいっぱいだった。足や腕はしかたがない。が、顔の傷は恥じた。

「いまに、顔には触れさせませぬ」

真剣に言った。小枝に顔を打たれたとき、宇乃は、

（斬られた）

と、感じた。

これが敵の剣なら斬られているのだ。

若木の枝は弾力に富んでいる。物外は走り居合に馴れるや、

「二段斬り」

を、強いた。

峰で小枝を打つ。打ち落さぬ程度にである。小枝は一たんはねてから、強い勢いで叩きつけてくる。それを斬る。

むろん、この峰打ちした直後に鞘に納めねばならないのだ。打つ、納める、斬る——この間、一弾指のゆとりもない。

小枝は容赦なく顔を襲ってくる。女の顔にとっては、事実、剣にも匹敵する。真剣にならざるを得ないし、腕は日ごとに冴えた。

若い女の身には苛酷な二か月あまりが過ぎた日、宇乃は人を斬った。

五月の末で、甲斐の盆地は蒸し暑い夏を迎えていた。その日も、居合斬りに汗と埃りにまみれた宇乃は、井戸端で行水をつかっていた。

山々が紫紺に暮れて、残照が消えると、裏の小径を人が通っても、肌を見られることはない。竈で沸かした湯を盥にそそいで、手桶の水でほどよくうめる。

宇乃は腰のものも除って、盥にしゃがんだ。一日を男だてらの兵法修業に費して、湯でからだを拭くときが、一番、心の休まるときだった。

小肥りだった肌は、兵法のために贅肉がとれ、胴など蜂のようにくびれてきた。

宇乃には、それがうれしくもあり、恥しさも感じるのだった。人目がないと思いながら肌を洗うとき、腰をすべるおのれの手が、ふと、

（数馬さまの……）

手だったら——そう思うだけで胸が迫った。

胸乳は前より大きく、豊かになっている。自分でも、いいかたちだと思うのだ。肩や肘や腕の、肉のしこりも、湯で流していると、溶けてくるようであった。

ただ、掌だけは、固くなっている。指も大きくなっていたのではないか。そのことが宇乃を哀しませる。

そうした娘らしい感情も、しかし、裸身に触れている間のことだった。ほどよい疲れはぐっすりと熟睡するし、陽が昇ると、もはや兵法修業者たる宇乃でしかなかった。

その宵も湯に腰を浸して下半身を洗っていると、背後に人の気配を感じた。

「だれ!?」

振りかえった。

そのときまで、無花果の木の根かたに置いた刀は摑んでいない。

かさかさっと逃げる足音がした。村の若者などが戯れにのぞきに来たのかもしれない。逃げる足音はそう思わせたのである。

が、それは仕組まれたものだったようだ。

苦笑して、宇乃はまた盥の中に腰をおろした。とたんに、前面からおどり出た影があった。

「おんな！」

つかみかかった。巨きな男だった。咄嗟にぴしっと、手拭いで撲った。

濡れた手拭いは、一瞬、棒のようになり、したたかに男の耳から頬を撲っている。少し下だったら、頸を搏つと同時に、蛇のように巻きついて締めていたかもしれない。

濡れ手拭いだったことは、この痴漢を一時的に聾にした。痛みと、うつろになった感覚が、おのれの痴態を省みるよりも、怒りをかきたてたようである。

「こいつが、猪口才な」

閂に横たえた打ち太刀を抜こうとした。宇乃の左手が脇差を摑んだ。一糸まとわぬ裸身である。そうした動作はあまりにふさわしからぬ。この無法な男が嘲けりを浮べたのは当然であろう。

打ち太刀が抜き放たれたとき、濡れた裸身は片膝立てに、大きくあいた男の胸板を刺していた。

厚く大きな男のからだが、宇乃の眼には、巌のように見えた。が、刀は半ばまで刺さって、さっと引くや、巨体は、咆哮を宵闇の中に噴かせて、ばしゃっと盥の中に倒れていた。

4

大の男を倒したという実感は、夜が明けてから、宇乃の胸にこみあげてきた。

「慢心してはならぬ」

物外和尚は訓して言った。

「愚か者は酒を飲んでいたようじゃな。それに、そなたの肌を見たことで、心が浮いていた。そのような者を斬ったとて、腕がすぐれていたわけではない」

「心得ておりまする」

「はげめ」

だが、物外は内心、舌を巻いていたのである。

彼女の刺傷は、心臓を的確に刺し貫ぬいていた。一分の狂いもなかった。

灯もない宵闇のなかで、咄嗟に、よくやれたと思った。精進の結果が、こんなに早く出るとは思わなかったのだ。

むろんお咎めはなかった。死体は、辻に晒された。宇乃の噂は瞬く間に甲斐から信州にまで、ひろがった。

宇乃の顔をわざわざ見にくる者もいて、

「困ったことになったの」

と、物外は、かえって、その評判を懸念した。

「これ迄通り、平静ではげまねば、腕もそこで止りじゃぞ」

「御懸念下さいますな、慢心の気持はございませぬ」

「だが、邪魔になる。そなたの心が如何に固くとも、世間がそれを溶かしにかかる……」

しかし、噂というものは、新しい強力な事件があれば、容易に打ち消されるものだ。

この甲斐の府中にとっては、由々しい大事件が起こった。

駿府の殿様大納言忠長が甲斐に移ってくるというのである。

「大きな声ではいえんがの、大公儀よりお叱りを蒙っての御謹慎じゃそうな」

「御当代さまの御舎弟というのにのう」

人々は上下とも、同情的だった。甲斐にいる間は忠長の行状には、狂的なところがなかったからであろう。

忠長は駿府で家臣を手討ちにしたり、人妻、娘のきらいなく権力にものをいわして凌辱したり、行状の数々が、御用部屋に聞え、甲府にその蟄居を命じられたのである。

天下の将軍の弟であるだけに、幕閣でも世間ていには憂慮したようであった。まだ天下には倒幕の気持を抱いている外様大名が多いはずだった。将軍家一族間の内紛はかれらの思う壺であり、乗じる隙さえあれば再び、天下は大乱となる。

〝病癒るまで養生せよ〟

と大御所秀忠は言い、忠長の家老で甲府城を預っていた鳥居淡路守成信に忠長を移すように言ったのだ。

もっとも成信は江戸に在って、忠長の北ノ方を守り、忠長に付添うのは、三枝伊豆守、屋代越中守らであった。

――病癒るまで、と表向きは養生のかたちだが、これは癒ることのない病であることを、誰

よりも忠長は知っていた。

（父上は、おれを許して下さる気があろう、が、兄は……将軍は、許すまい）

駿府城を去って甲斐へ入ってくる忠長の胸には、複雑な思いが去来していたことであろう。おのれ自身でも、制御出来ぬほど、血がたけり狂うことがある。が、決して病気ではないことを、誰よりも忠長自身が一番よく知っていた。

（おれが病気であることが、父上にも、兄にも必要なのだ、病死することが、徳川家のためには望ましいのだ）

いっそ死んでやれ、と思うことがある。が、また逆に、

（死ぬものか、くそ、百までも生きていてやる！）

意地が頭を持ち上げる。

だが、結局は強大な幕府という力が、かれを圧殺することを、漠然と感じていた。この甲斐が、かれの骨を埋めることになるかもしれぬ。

世に伝えられるように、忠長が無思慮で狂暴だったとか、狂気だったとかするのは誤っている。

はじめ、噂が伝わったとき、秀忠は、忠長の保傅の役（付家老）につけた朝倉筑後守宣正（遠州掛川城主）を召して、かかるときにこそ行跡を諫める役ではないか、と叱って、汝の罪である、と酒井侯預けにした。忠長はこれを聞くと驚き悔んで、尾張、水戸の両卿並に天樹院（千姫）を動かして、秀忠に懇願した。

「忠長の非道全く宣正が罪にあらず、我身をいかにも罰せられ、宣正が御勘気を許し給え」両三度、願い出たので、宣正は許されて、忠長甲州蟄居のあとの駿府城を守ることになった。この忠長の態度からは、狂暴性や狂気さは全く見られない。ただ、その荒々しい血を、時として圧えかねたか、敢て、おのれを無明の淵へ落すことの自虐的な振舞いがあったのではなかろうか。

ともあれ、忠長の甲府入りは、宇乃の噂を消すことになったのは事実である。

「仇討ちの旅に出とうございます」

宇乃は物外和尚に申し出た。

「その腕でか」

「仇の居所を突きとめるだけでも」

討つのは、それからでもいい、住所がわかれば励みもつく。宇乃が仇を目前にして、我を忘れるような軽率な女でないことは、すでに物外は見抜いていた。

数馬の死の原因となったのは忠長の下命である。主君を恨むのは筋違いだが、宇乃は、心安からぬものがあるはずであった。

宇乃は駿府へ帰った。父母にも逢い、委細を告げている。すでに数馬の一族は四散していて、いまさら仇を討つことに世間的な意味はなかったが、宇乃には、充分すぎる理由があった。

「女子は一度び夫と決めた御方の為に操をたてるものでございます。宇乃は当家からすでに嫁に行ったとお考え下さいまし」

玉置勘解由は江戸にいるらしい、という情報を得ると、宇乃は、東へ向った。

旬日にして江戸へ入ったが、この広い都会で、一人の男を探すのは容易ではなかった。また、相手も、それが狙いで、江戸へ来たのであろう。

諸国の大名が集り、家臣らが雲集した江戸である。ただ居合の達者というだけでは、ごろごろしている。小諸、甲府、駿府と移ってお国訛りも固定していない。諸国の訛りがまざっていて、この線からも、探すのは難かしい。

居合の評判ある道場と聞けば訪ねて、解勘由のことを聞き合わしたが、確実らしい話はなかった。

路銀は幸い父から貰ったのが、かなりある。半歳は楽にすごせた。節約すれば一年近くは大丈夫と思われた。が、その余裕にまかせて、無意味な捜索はつづけておれない。半歳が過ぎたある日、宇乃は一計を案じた。常盤橋の橋袂に二尺四方の紙旗を立て、蓆を敷いて坐った。竹を立てて先端を割って趣意書をはさんだ。凧のように、四方を細竹で裏張りした紙旗である。

――元駿河大納言家来玉置勘解由儀、上使を害めて逐電行方知れず、依って仇討ち仕るべく出府候者也云々、と書いた。

たちまち評判になった。生馬の目を抜く江戸のもっとも目抜の場所である。宇乃は故意に鉢巻、襷がけに、刀を引きつけて終日、坐っていた。

三日もすれば反響があろうと思っていた。噂通り江戸に来ていれば、黙っていまい。かれを

知る者が通じるはずだし、返り討ちにするべく、何らかの行動に出るはずだった。

当った。

三日目の暮れ方、近づいて声をかけた者があった。

「玉置どのにお引合わせ致す」

武士が二人だった。一目で身分のある者と知れた。

「ええっ、御存知でございますか。いま何れに」

「お出で下さるか。乗物を用意してきた」

問いには答えず、駕籠を据えられた。

仇討ちするには、まだ腕は未熟だった。が、もう、こうなったら、退くことはできない。宇乃は刀をつかんで立ち上ると、

「御案内、願いまする」

蒼い顔で微笑した。

連れてゆかれた屋敷は麹町の屋敷町だが谷間のような窪地になったところだった。誰の屋敷かもわからない。このあたりびっしりと屋敷が塀を連ねているが、殆ど旗本だという。勘解由はこうした中に匿われていたのか。

書院に通されて暫し、誰か入ってきたと思うと、玉置勘解由その人だった。

「久しいな」

一間隔てて勘解由は坐った。宇乃は、仇と叫ぼうとしながら、なぜか声が出ず、手が刀にい

かないもどかしさを感じた。

「そなたの方では、わしを知らなんだであろう、あの事件が起るまではな」

「……」

「わしのほうは知っていた。容色の聞え高いゆえにな。誰かれと噂した。そなたがよく通る辻で一目、見ようと思い無駄な時間をおくったりしたものよ」

「左様な話を致しに参ったのではありませぬ」

「わしには嬉しい、と申しているのだ。そなたに似た女がいるというので、弥勒町に遊びに行ったこともある。いや、似もつかぬ女であったが……」

「けがらわしいことを」

「ははは、男とはかようなものじゃ。数馬も存命にてあれば、そなたを娶っても、いまごろは、わしとつるんで弥勒町通いしているやもしれぬ」

もう言葉を交す意味はなかった。

「玉置さま、お覚悟を」

一瞬、刀の柄に走った手が、動きを失った。目にも止らぬ早さだったのである。勘解由の抜刀が、ぴたりと宇乃の腕を圧えるように、突きつけられていた。

「未だしだのう。宇乃。話には聞いた。甲斐で修業しとるとな。物外和尚も罪なことをする」

表情も声の調子も変らぬ勘解由である。

宇乃は血の気が引いてゆくのをおぼえた。五体の関節が音をたてて外れるような虚脱感に襲われ、崩れ折れた。

5

あまりにも違いすぎる腕前に、絶望が宇乃のすべてを奪った。おとめに衝撃が大きすぎた。哀しいのは、やはり女であることの自覚だった。崩れたあと、宇乃は勘解由に抱き起されて、その男くさい唇を受けている。

「しっかりせぬか、女兵法者にしては、だらしないぞ」

勘解由は笑っていた。壮年の男の髭の剃り痕の濃い精力的な顔が、宇乃には圧倒的だった。いままで忘れていた〝男〟がそこにいた。

粘っこく厚い男の舌が口の中をそそろに動き、乳房をつかまれると、宇乃には、どうするすべもなく、ただ、からだを委ねているよりしかたがなかった。抗いかけた両手がいつか勘解由の腕をつかんでいた。

男の手は、裾に入っていた。内腿を撫であげ、秘所に触れた。触れたというより、掌がその部分を圧えたというほうがいい。宇乃は呼吸も出来なかった。嫌悪感とともに女のいのちが、いのちそのものが息づいているだけだった。

男の掌が何を感じ、指が何をまさぐったか。宇乃はその部分を仔細に眺めたことはない。ただおそれがあった。指がそこにあてがわれている間、宇乃の唇は唇で蓋をされ舌が歯肉を嬲り、

舌に戯れていたのである。

「――むすめか」

唇を離して勘解由は言った。いささかの失望が感じられたのである。手も離れていた。勘解由は指をおのれの鼻先に持ってゆきちょっと嗅いだ。それから、いたわりのこもった眼で、宇乃を見た。

「むすめの身で、仇討ちなど考えまい。駿府へ戻って、嫁にゆくことだ」

勘解由はそれきり、部屋を去った。

あと追いかけて、抜刀するには、宇乃は疲れていた。百里も走ったように疲れていた。木賃宿へ戻った夜、宇乃は十日も早い月のものを見た。三日間寝こんだ。何の病いか、医者の診立てでも判断つかなかった。疲れでござろうな、と藪医者は高熱をもて余したように言った。

宇乃は駿府へは帰らなかった。やはり、甲斐へ戻っている。抜刀を初歩からまた研鑽するつもりだった。

だが、彼女が江戸に在る間に、物外和尚はすでに歿っていた。ある嵐の日に、物外は半道ほど山奥の渓流の畔で死んでいたという。外傷はなく、心臓の発作だろうと医者は診立てた。

なぜ、そんな嵐の日に渓流に行ったのだろう。

宇乃には疑問が残った。彼女はその謎を解くために、閑があると、渓流の畔に行った。

そこは早瀬になっていて、奇岩怪石が乱雑に横たわり、清冽な流れが奔っている。流れは泡

立って歯をむき、岩を噛み、時折り、銀鱗が翻った。
朝、昼、晩、時刻を違えて、宇乃は行った。
（何かある、何かが……）
あの物外和尚が、何もなしに渓流に遊ぶはずはない。
宇乃は岩の上に立って、抜刀した。
濡れた岩は滑る。滑ることに気をとられては抜刀は成らぬ。抜刀に意をそそぎ過ぎては足元が危い。
〝己れを責めて、己れに克つ〟心身が一つになってはじめて、その身は岩上に在るも地上に在るの安定を得るに違いなかった。
連日、宇乃は岩上の居合を行なった。水飛沫が全身に降りかかり、手足を狂わせようとした。岩に打ちつける激流の飛沫に、宇乃は閃きを得た。朝日の中であった。眼前に銀鱗がはね上ったのを、殆ど無意識に斬った。朝日に光る鱗を見たとき、手が心に従い、白刃は鞘走っていたのである。
「――鱗返し」
宇乃は思わず呟いている。

宇乃が城中に呼ばれたのは、それから間もなくのことであった。謹慎の忠長を慰むるべく、時折り、兵法試合などを催されたが、宇乃の評判が聞えたのであろう。御前で披露した抜刀に

はとかくの事はない。彼女が数馬の〝嫁かず後家〟だということを誰か耳に入れた者があった。
忠長は、宇乃に興をおぼえた。
「数馬は不憫なことをした」
忠長はそれ以上は言わなかったが、大納言の身分にしては、精一杯の詫びの意がこもっている。
宇乃が望まれて、忠長の寝所に侍るようになったのは、それから間もなくである。忠長の意外な素顔を見たことが、宇乃の心を動かした。
世間の評判が、逆に忠長を自虐の道に追いこんでいったことを知ると、宇乃は、忠長を哀れにすら思った。
初夜、宇乃は忠長のためにからだをひらき、そして男との交りが、美しい夢幻のなかのように運ばれていったとき、女の喜びが急激に彼女を囚えた。いままで処女のままでいたことに、誇りと、最高の喜びを知った。
数馬の仇討ちという希いの代りに、人生の喜びを得られたのも、居合によって、おのれの心を見る眼を養ったからだと思った。
（――一生、お傍を離れまい。殿のお傍に一生お仕えしよう）
宇乃はひたすらに思った。
逞しい忠長のからだの中で、小鳩のように戦き、女の喜びにのぼりつめてゆく自分の可憐な姿を、鏡を見ているように、宇乃は愛しんだ。

忠長が甲府謹慎もついに家光の怒りを解くことが出来ずに、封地五十五万石没収、上州高崎へ配流されたのは、寛永九年十月のことである。

宇乃はもとより、忠長に従って高崎へ移った。

「そなたは甲斐へとどまらぬか」

と、忠長は、上使を受けたとき言った。

「高崎で、多分、余のいのちは縮められるであろう。そなたに死にざまは見せたくない」

「いいえ、いかようなことが起りましょうとも、最後までお伴させて下さいまし」

宇乃は微笑を浮べて言った。

忠長には家光の心のうちがわかっていたのであろう。家光には、忠長が恐ろしいのだ。忠長が生きてあるかぎり、家光は安心できないのであろう。

高崎の配所へ移ったとき忠長に従う武士はたった四人だったという。天下の将軍の弟の身としては悲惨きわまる姿である。

高崎に移って一年経った。寛永十年である。赤城嵐の空っ風に雪がまじる師走の初め、江戸から一人の武士が訪れた。

かれは忠長の寵愛の女の旧知としてやって来たのである。

「嗤いにまいったか、玉置」

きびしく鹿垣を結いわたされた屋敷の中で忠長は勘解由と対した。

「埒もないことを仰せられまする。それがしは前ノ大納言さまに、お借りしたものを返しに参りました」

「余に借りたものと？」

「はい、これにござる」

勘解由は、次の間に大小を置いて入ってきている。白布の包みは、何やら軸物のように見えた。

宇乃は少し離れたところに控えていて、凝っと見守っていた。勘解由に対して数馬の恨みはすでに消えている。ただ、その慇懃無礼な態度に、怒りを感じたくらいである。

「玉置さまは」と、宇乃は口をはさんだ。「大公儀に仕官なされましたのですね」

「ははは、軽い身分でござれば」

「御老中のどなたとやらと御昵懇とやら」

「左様なこともおざない……」

勘解由は白布を解いた。中から出てきたのは一振りの脇差だった。

「お預りしたものでござる」

「余が？」

憶えはなかった。忠長が眉をひそめたとき、勘解由が膝を起した。

「上意！」

たっと鞘走る白刃——刹那、宇乃の眼に渓流に翻える銀鱗に見えた。宇乃は躍りこんでいた。勘解由の刀は僅かに忠長の羽織の紐を切っただけである。宇乃の懐剣があざやかに、水月を貫

ぬいていた。

「――玉置」

ぬっと忠長が立ち上った。その無念の手から刀をもぎとった。

「借りだと申したな、左様じゃ、たしかに借りを作ったわ、その借り、いま返すぞ」

その次に起った光景は、宇乃には信じ難いことだった。忠長は仁王立ちになったまま、その刀を、おのれの左腹へ、むっ、と突き立てたのである。

「玉置、見ろ、眼をあいて見ろ、汝を寄越したのは誰じゃ、老中の堀田か、阿部か、それとも天下の将軍家たる兄か……見ろ、前ノ大納言忠長、魂魄をして江戸へ帰りたしと報ぜよ」

きりりっと、右へ引き廻して、ざっと吹き出す血汐に下半身を染めながら、忠長は自ら豪毅にも血刀をはねて、おのれの頸動脈を掻いた。

宇乃は夢を見ているような気がした。こんなことが、ほんとうにあるはずはない。これは夢なのだ、悪い夢なのだ、と思いながら、呆然と血の中に坐っていた。

弦月、雲を斬る

1

お喜乃がその男を連れてきたとき、嫌な感じがしたのは事実だった。嫉妬ではない、とのちに、お久は思ったが、この姉を好きだっただけに、そして、帰りを待ちわびていただけに、見も知らぬ男を帯同してきたことに不満があった。帰ってきたとき、とびついて、抱きあいたい、と思っていたのが、そんな第三者がいては、喜びをあらわすこともできなかった。

「紅屋の田六どの」

と、お喜乃は紹介した。

父母もあきらかに、仏頂面をしていたが、お喜乃はもう男の妻になったように、いろいろとすすぎをとってやったり、敷物を奨めたり、あれこれと気を遣って、気の置けない家族やよってに、ゆるゆる手足を伸ばしとくなはれ、と田六の機嫌をとっている。

たった一年堺にいっていただけで、そんなに変るものか、伊賀の御城下はずれに生れて育って、他国を知らないお久には、やはり妬ましいものが胸に沸いた。

（姉ちゃ、好かん……）

はっきりと嫌いになったのは、夜になって至極当然のように、お喜乃が男の蒲団に入って寝たからである。

父は病気で気が弱くなっていた。五十前でまだ死ぬ歳ではない。中気で櫛鋸が持てなくなったのだ。並の匠の仕事だったら、出来ないこともないが、櫛挽という仕事は、一厘一毛の狂いも目立つ。いい仕事が出来なくなるのは、櫛作りの万蔵の名前をけがすことになる、とすっかり意気地がなくなっていた。お喜乃を呼んだのも、そのせいである。

お喜乃は堺の紅屋白粉に奉公していた。万蔵櫛は堺でもよく売れたので、伝手があってお喜乃を奉公に出していたのだ。お喜乃が堺に行くときまったとき、お久は子供ごころにも、どれだけ羨ましかったかしれない。

お久は十一になったばかりだったから、他国へ行くことなど夢だった。また母のおたきも手放したがらなかった。

娘を奉公に出すことも、むろん、母親にしてみれば、気が進まなかったが、お喜乃が望んだある男との仲がこじれていたせいもある。いやな思いを振り捨てたかったのだろう。

紅屋での奉公が、どんな様子なのか、お久にはわかりようもない。異郷の淋しさが、男を作ったのか。もっとも、この時代、十七といえば、むしろ遅いくらいだ。お喜乃にも困ったもんや、と母親がなげいていたのを聞いたことがあるから、尻軽の方だったようだ。お喜乃が男と逢っているところを、お久も何度か見た。草むらで抱きあっているのを見たこともある。

夏のことで、蛍が飛んでいた。川の畔だった。蛍を追っていたお久は、草むらで呻き声がするので、誰か死にかけているのかと思い近づいていった。そこに男女が抱きあっていたのである。

おどろいて立ち上った男は顔見知りの木引だった。そして、お久やないか、と、叫んだ。月の光りが、仰向けになった女を蒼く照らした。お喜乃の肌は、蒼白く光って見えた。小袖の両肌脱ぎになり、裾前を大きくひらいて、奇妙なほど下肢は長く見えた。下腹部のつけねのあたりは蔭になって見えなかったが、お久の眼に、いつまでもその異様な姿が残っていた。

男好きでしょうのない子や、と、父親の万蔵もこぼしていた。堺にいって、それが治るはずはない。

堺は乱世でも、最も栄えた自由都市であった。南蛮交易の窓口だったし、大分限のいわゆる納屋衆の合議制で、市を運営している。度々、兵燹に逢ったが、焼けてもすぐに復興する。金があるから出来るのだが、また、その貿易港、経済都市としての重要性を、大名たちは利用して、保護を与えた。

そうしたことが、この港町に乱世にも関わらず、異常な発展と、殷賑をもたらしていたのだ。他国では土地を荒されて飢えに泣いていても、この町だけは、歓楽に酔い痴れていた。紅白粉もしたがってよく売れる。女は美しく、男は銭を儲けては女の歓心を買う。この町でお喜乃のような女が、男なしで過せるはずはない。田六であれ誰であれ、早晩男が出来ることはわかりきった話だった。

意外すぎたのは、その男を伴って伊賀へ戻って来たことだ。

「お喜乃と一緒になりたいよってに」

と、あらためて田六が切りだしたのは、翌日のことだった。

田六は紅屋のふれ売りだった。使用人ではない。紅屋と契約して、白粉や紅を売って歩く、紅粉解であった。もともと白粉は古くは奈良、それから京と伊勢で作られたが、京が応仁の大乱以来、焼け野原となったりして堺がこれにとって代った。もともと紅粉など中国から輸入していた。紅花は中国に多いが、原産地はエジプトで、いわゆる南蛮船で運ばれてくる。紅屋に出入りしているうちにお喜乃と好き合ったという。

「真似ごとでも祝言をあげたいと思いましてん、ほんで、親御はんに」

絹を一反と、南蛮更紗など珍しいものを贈り物に持ってきた。

実直そうだし、からだは小作りだが、小廻りの利くはしっこい感じだった。

（この男なら、働き者じゃろ）

と、万蔵は思った。

ちゃんと礼を尽くして言われると、断わる理由はない。

万蔵の病気が治るまで、暫く、伊賀にとどまって、お喜乃が看病し、自分は近隣を、売り歩くという。白粉は高価であったが、土豪や、社寺などでも売れる。社寺も荘園以来の知行地などを持ち、一般より裕福だった。

禁欲的浄地の社寺に紅白粉は不用だと思われがちだが、稚児や巫女などもいるし、若僧はおおむね男色の対象だから結構さばけるのだ。そのために、ちゃんと田六は、荷を仕入れてきて

いた。

用意周到な田六である。万蔵もおたきも急に掌をかえしたように、愛想よくなった。現金なものだ。

「よく気のつく聟どのや……」

万蔵はすっかり気をよくして、尻軽なお喜乃でも、あんないい男をつかまえることが出来たのは、やっぱり堺や、お久も早く堺へ奉公に出した方がええ、そうすりゃ私も眼ェつぶることができるさかいに、とほたほたした。

たしかに、田六はよく働いた。

万蔵から伊賀の国内の木地屋や木樵などの名前を聞いて、そこへ出かける。櫛作りだから、木地屋とは顔がつながっている。

木櫛といえば黄楊と相場がきまっているようだが、それは江戸時代に入ってからで、城主や夫人などの贅沢な連中は、それぞれ櫛の発注に木を指定する。柔らかいのや固いのや、好みがある。頭髪がうすくなると、柔らかい木でなければ、毛がいたんで抜けるという。真偽はともかく、そういう注文があるたびに、木地屋に探させるのだ。

田六は、精力的に動きまわった。遊んだり休んだりしない。ときには二、三日帰らないこともある。

戻ってくるときは、白粉が減っていて、小金を握ってきた。

「これは売上げでんね、堺に持って帰るまで、義父つぁんに預かって貰お」

と、差し出すのだ。

そんな律義さも、家族の信用を高めた。

だが、お久は田六をなぜか好きにはなれなかった。お喜乃をとられたせいばかりではない。お久は小さいときから、凝っと人の目を見つめるくせがあった。小さいときは、そんなくせを可愛いと言われたものだが六つ七つのころには、

「なんや、人の顔ばかり見よって、穴があくやないか」

と、怒鳴られた。

「まことに妙な子やなァ、じろじろ人の顔見んとき」

何度、母親に言われたことか。だが、相手の眼を見ていないと、お久は落着かない。

田六もそれを嫌った。

「可愛い子やけど、なんや、恐ろしいところもありまんな」

笑いにまぎらして言った。

来てから四、五日目だったか、田六がふいにお久を抱いたことがある。十二歳の女の児である。政略結婚では七つ八つから他国へやられるし、十三、四では実質的に交ることも多い。お久はしかし小柄だから、まだ男の性的欲望の対象にはならないはずだった。

田六がふざけて抱きすくめたのは、お久への戯れであったろうか。戯れることで、親しくなろうとしたのか。

「お久も四、五年したら姉ちゃんのように別嬪になるさかいに」

笑いながら、もがいて逃げようとするお久の下腹部をまさぐった。

「いや！」

「ふふふふ、いまに好きになるで」

田六の指は、正確に、花芯をとらえた。

それは一瞬にすぎなかった。お久が身をひねって、腕からすりぬけ、田六は後を追おうとしなかったからである。

一瞬の男の指が、異様にお久の肌に灼きついた。

それは快感ではもちろんなかったし、さりとて、悪寒でもない。

異様というしかなかった。それを思うと、お久は少女ながら、頬が上気し、目が眩むようだった。

おんなのそこに男の指を触れられたということが、強い衝撃として残った。それは半ば意識的なことだった。指頭の触れたところがどうなったというわけではない。意識がいつまでも、その部分の感覚を異常なほど鋭敏に感じさせたにすぎない。

ふた月ほどしてからだった。

お久は田六が絵図をひろげているのを見た。絵図は大人が転がっても手足がはみ出さないほど大きなもので朱や藍で線が引かれ、字が書き込んであった。

もとより、お久には読めもしないものである。田六は、ふいにさした影に、あわてて、絵図を隠そうとしたが、その影が、お久だと知ると、照れたように笑って、元通りにひろげて、

「お久も連れて行ってやろうか」
などと、何気ない調子で言った。
「伊賀は全く、道がないところやな、山だらけや……」
そんな言葉は、子供のお久にも、とってつけたように聞えたのである。
かれは、そう言いながら、およそ、そんな軽い気持とはうらはらな真剣な表情で、何やら熱心に書きこんでいたからだ。書きこみながら、寸法を計ったりしていた。かれの筆と矢立には、寸法のキザミがついていた。
そのときの田六の態度を、しかし、おかしいとは思っても、怪しいと思うほど、少女の頭ははたらかない。怪しかったと思ったのはのちのことだ。それも、そういえば妙だったというくらいのことなのだが。
その二日後、もともと月のない晦日の晩だったが、時雨が降った。明方まで降りつづいたが、その時雨に流されたかのように、田六は姿を消した。天正九年八月三十日のことである。

2

田六が消えたことで、お喜乃の運命は大きく変った。いや、お久も含めて一家の運命といったほうがいいだろう。前の晩、田六は、
「名張に行ってくるよってに」
と、言い置いて出かけた。

だが、その名張を通りすぎて、服部の庄に至り、大川と呼ばれている伊賀川を越えて、御斎峠から江州へ脱けた、というところまで足跡がわかった。
市部の辺で逢った者がいた。大川の畔でも夜釣の者が見ている。御斎峠には、ねずみ木戸があり服部の者が調べている。
ねずみ木戸とは、普通の木戸のように、矢来や柵で道をふさいだのではなく、馬一頭が漸く通れるほどにせばめられてあり、左右から巨岩が出っ張って、近接の大樹の梢に見張りが潜んでいて、胡乱な者が近づけば、なかまへ知らせる。その方法には、黒矢を射たり、鳥の啼声で通じる。
そのねずみ木戸の番に当った者が、人別改めをした。
「柏原の櫛引万蔵の家の者だというので通した」
と、見張りの者はいった。暫く、かれはここで足止めされている。乱世では常識である。
その間に早足の者が柏原に聞込みに走っている。いわゆる伊賀の忍びノ者である。かれらの足はけものじみて速い。
翌日いっぱい、お喜乃たちが気がつかなかったのは、服部の忍びノ者が、直接に、問い合わせずわきで聞込みをしたからにほかならない。
万蔵の家のお喜乃が堺から連れてきた聟だというのはもう知らぬ者はない。狭い土地なのである。
城下といっても、ここ南伊賀の名張の南方三キロほど赤目にある柏原城は、城というより砦

といった方が、後世の感覚から言うと正しいかもしれない。

城といえば、白亜の天守閣の華麗豪壮なものを連想するが、このあたりの城はそんな規模の大きなものではない。

東方に高善山からつづく丘陵地帯を背負って、北から南へ名張盆地の平原がひろがり、大和室生を経由しての出入りは一望に俯瞰できる枢要の地だ。

土塁を築き、三重に堀をめぐらし、矢倉を立て、土塁の上に胸壁を設けて矢狭間を切り、石落しや忍び返しを設け、濠には宇陀川から水を引き、空濠には、錆刀を立て、隠し堀、隠し矢倉など、さまざまの工夫を凝らしてあった。

したがって、城下といっても、ちょっと大きな寺の門前町という程度のものである。

この柏原砦ばかりでなく、大小数十の城砦を持った伊賀のくにの豪族たちは、当時天下を掌握した織田信長の伜信雄による支配をきらって、反抗していた。

さきに伊勢の国司北畠具教を謀略をもって威し、強引に養子になった信雄は、具教を殺して、伊勢伊賀を支配せんとした。

伊勢はおおむね、織田の勢いにひれ伏してしまったが、伊賀の郷士たちは、頑迷にこれを肯じない。

もともと、伊賀の丸山（下神戸郡）には、北畠氏の伊賀支配の砦があった。ここは、伊賀のくにのほぼ中央になるが、この砦を一大城砦に改築して、伊賀に武威を布こうとした。

派遣された武将は信雄三将の一人滝川三郎兵衛である。

だが、このこころみは失敗した。

嘗つては群雄乱立して、国人同士で、猫額の地を争い、流血をくりかえしていた伊賀侍たちも、この大勢力の進出弾圧は我慢ならずとして団結して、この丸山城の改築を阻み、攻撃した。

何しろ、伊賀の侍らは、郷侍といったほうがいいが、寒冷痩地のためと、政治的な要地でもあって、忍びノワザが発達し、伊賀四十九流といわれるほどであったのは周知の通りである。

もとより、大和、紀伊の山岳宗教による神示通力さらには跋渉術などが多様なかたちで、伊賀忍の鍛錬の母体をなしていることはいうまでもない。

その淵源を辿るのは、主題が違うので省くが、要するに、伊賀侍たちが、支配権力の侵入を拒んで、くにざかいを固めその忍びノワザを発揮して、一兵たりとも侵入を許すまいとしていたのである。

伊賀のくにの主たる出入口は、六か所ある。

ほかにも間道は十数か所あるが、険峻の細道で、他国者の容易に侵攻できるところではない。ことに軍勢となれば、馬や小荷駄が大変だから、この六道を固めさえすれば、およそ軍勢の侵入はできない。

六道には、木戸あるいは隠し木戸を整備し、間道にもむろん、夜闇にも明るい〝目〟を置いた。

伊賀勢の結束力や、侍たちの配置の状況などを極力隠蔽するために、他国者の出入りを厳重にチェックした。かれら忍びノ者たちの目をぬすんで潜入することは、まず不可能といってよ

かった。

「織田信長めが、捨てておくはずはない」

絶対に侵攻してくるであろう、とかれらは見ていた。

滝川三郎兵衛を伊勢へ追いかえしたことで激怒した信雄は、八千余騎を率いて伊賀を攻めた。三道から攻めたが、伊賀勢の猛烈な反撃にあって大将柘植三郎左衛門は討死、北畠勢は敗退した。これが二年前のことである。すなわち天正七年九月十八日。

必ずともに織田勢の再度の攻撃があろうとして、用意怠りなかったが、一年が無事に過ぎ、二年目も過ぎ去ろうとしている。

信長はしかし安土にあって、悠々としている。

信長公記によると、

七月十五日　安土御殿（天）守並惣見寺に挑（提）灯数多つらせられ、御馬迎え人々新道江之中に舟をうかべ手に手に続松（松明）とぼし申され山下かがやき水に移り言語道断面白き有様見物羣（群）集に候也。

また、八月朔日には、美々しい馬揃を安土の城下で行い、けばけばしく派手な容子で、信長は、お祭りを楽しんでいるようだった。

「くせ者じゃ、肚裡の中では何を企んでいるかしれぬ。ゆめ用心を怠るまいぞ」

伊賀侍たちは戒心した。紅粉解の田六が伊賀を脱けて、江州甲賀へ奔ったことの意味が判然したのは三日経ってからであった。

「田六は逃げよった、お喜乃は弄れたんや」

万蔵は激怒し、お喜乃は終日泣き濡れた。

その日、百地ノ藤市という者がやって来ていた。田六の始終をあらためて聴取したのである。

三日前に甲賀へ奔った田六が、その後、消息を絶った。実は、ある追跡の巧みな者をして、追わしめたという。その者の死体が、信楽川の四十苅の辺で発見されたという。四十苅という場所は、伊賀と栗太の郡境である。

「ただ者ではないぞ、田六と申す男」

藤市は言った。眼が片っ方白い。

「ただの紅粉解なれば、あのような……」

疑いが藤市の口調をするどくしていた。話すたびに唾が飛んだ。

（まさか、まさかに、田六さんが……）

お喜乃には信じられなかった。そんなことがあるかしら、あの堺の人が——堺でも京でも、忍びノ者は年月をかけて潜伏している。常人のような顔で信用をしている。忍びの話を、小さいときから耳にし、目にしているお喜乃にも、そういわれてみれば、まるきり、あり得ない話ではなかった。

（でも、あたしを瞞して……なぜ、そんな）

そこまで手のこんだことをする理由は？

女のお喜乃には、男たちの野望への深謀遠慮は理解の外だったのである。

（信じられない、とてもそんな）

お喜乃は、田六の笑顔を思いだした。

「そいじゃ、ま、行てくるで」

と、伊賀の訛りを早くもこなして、戸口でふりかえったのが最後の顔だった。

「もしもサグリだったとすると、お喜乃、きさまも同罪やぞ」

そのとき、するどい口笛が聞えた。二つ。

藤市は眉をあげ、ふいに身を転じた。会釈も何もない。風のように出ていった。

織田の大軍が、怒濤のように伊賀へ向って進んでくるという報告が入ったのである。

この動員令くらい、唐突で、果断に富んだものはない。信長が突如この指令を発したとき君側の者は、かれの狂気がぶりかえしたのかと思ったほどである。

総大将には三介信雄を推し、御先手は滝川左近、堀久太郎、滝川三郎兵衛、筒井順慶らが六道から攻めこんだのである。総数六万を数える大軍であった。

一昨年には八千余で、敗北したから、十倍近い大軍なら、いかに夜闇に跳梁する忍びノ衆と雖も歯が立つまいという、信長の計算であった。

もしもこの一戦に敗れれば、信長の権威は地におちる。

三介信雄の最初の失敗は、まだ若気の至りといえる。今度こそ、という意気込みが、信雄を兇暴にしていた。

「伊賀の魔性ども、一人も余さず誅戮すべし」

みだい河原に陣を張り、捕えられた者を一議もなく首を剔ね両手を手くびから斬り落した。

伊賀の忍者を人外の化性と観る信雄には、両手を切りとらねば、安心できなかったのであろう。

その信雄の前には、大きな絵図が拡げてあった。あの絵図であった。紅粉解田六が何やら書きこんでいた絵図。

信楽口からの侵入に力を添えたのは、甲賀の忍衆、多羅尾彦一とある。四郎兵衛光弘である。この甲賀忍衆の与力がなければ、おそらく、この第二次伊賀の乱と後に称われる伊賀攻めは成功しなかったに違いない。

もとより伊賀侍たちは、必死に抗戦した。が、如何に地ノ理に通じていても、忍びノワザを駆使しても、大軍に加えて甲賀衆まで相手ではたかだか四千ほどの味方に勝目はなかった。

惨憺たる敗北で、伊賀の山河は、血に染まった。闘うこと七日、大半が討たれ、生き残りの伊賀忍衆たちも、大和境、春日山へ逃げ散ったが、大和の領主筒井順慶の手で尋ね捜されて、大将分だけでも七十五人が斬られるという凄まじさであった。

むろん、家は焼かれ、田畑は荒されて女子供は逃げまどった。〝国中の伽藍一宮之社頭初として悉放火候〟というのだ。飛火の類焼だけでも、当時の粗末な茅屋は一たまりもない。

お久は、お喜乃に連れられて逃げた。混乱の中である。侵略者たちは、掠奪暴行を戦争のヨロクとしている。

武将たちには、戦勝が名誉になるし、加増という褒賞があるが、下級の兵士には、さしたることはない。僅かの銀子を得るくらいである。

かれらの褒賞は、侵略地における物資の掠奪と婦女の玩弄であった。これがないと、足軽や小者たち、いわゆる雑兵らはいのちがけにならない。陋劣な下司下郎を、いかに獲物で釣って働かせるかが、武将の手腕であればしかたはない。

秀吉などは掠奪暴行を禁ず、という軍令を発したこともあるが、これらは表面的なお題目にすぎない。世間ていのためでしかない。実際に、それを行っても、罰しない。特に今度のような場合は、信雄の憎しみがあるから、暴行勝手次第であった。

お喜乃は一体、何人の男に押しひしがれたろう。お久を草むらへ隠して、お喜乃は自分が犯された。狂った雑兵らは、お久のような年齢でも、仮借しないに違いないのだ。

勝利に酔い、美女を抱いて、呆けた笑い声をあげていた足軽が、突然、絶叫するや血を噴いて悶死した。

赤目四十八滝の滝音を近くに聞く、大蟇岩の傍であった。

気がついたとき、お喜乃はその男が死に、二、三人の顔見知りの伊賀者が、見下しているのを知った。その中に、百地ノ藤市もいた。

「――覚悟はいいな、お喜乃」

伊賀者たちは、傷ついていた。顔にも、手にも足にも、血があった。その痛みと無念さが、藤市たちを鬼のように見せた。お喜乃の助けられたのを知りながら、お久が草むらから飛びだせなかったのは、その恩人たちのあまりの凄まじさのゆえである。

3

私の怨みではない、と藤市は言った。伊賀の国人をかくも悲惨な目にあわせた罪じゃ、つぐなわねばならぬ。

お喜乃は四十八滝から山越えして、香落渓に拉致された。語らい平と呼ばれるところがある。伊賀忍衆がむかし談合に用いたといわれる聖なる場所であった。

ここでお喜乃は火焙りにされている。

通常、伊賀における処刑には火焙りはない。忍びノ衆は火を神聖視する。火を用いたのは、汚穢を払い、罪を浄めるためである。

救いのない処刑の場合は、火によらず、指を切ったり、咽喉を裂いたり、狼や鷹の餌食にしたり、あるいは熊蜂の大群に首を刺させたり、時間をかけて悶死させるのである。せめてもの救いは、点火すると同時に、手裏剣を以ってお喜乃の心ノ臓を貫かしめたことであろう。したがって浄火はお喜乃の死体を焼いたことになる。

たとえ、罪のつぐないにしろ、浄火にしろ、お喜乃が殺されたのは事実である。

お久は伊賀を離れた。

父母は混乱の中で、姉妹を逃がして雑兵に斬り殺されてしまい、天涯孤独の身となったお久は柏原にとどまる理由はなかった。

三介信雄は伊賀三郡を掌握し、一郡は織田上野守信兼に与えられて、残敵掃討と権勢の扶植が行われている。こんな土地に、お久は残りたくなかった。

（田六をいつか……）

田六の顔を忘れてはならない。

それだけは胆に銘じた。

お喜乃があまりにも哀れだった。戦争の犠牲になったというにはむごすぎる。

（田六を許せない）

子供心にも、お久はおもった。

お久は堺にいった。伊賀を逃げだした女たちとともに逃れたのだ。老人たちと子供と。戦さには関係なく、かれらは生き延びねばならなかった。

新しい領主がくれば、苛斂誅求がはじまる。そうでなくてさえ痩地なのに、酷税をとられてはやってゆけない。かれらは、京や、大坂や堺を目ざした。大坂はまだ後年の大都市ではない。石山本願寺の門前町でしかない。堺に流れる者が多かった。

お久は何度も道を聞いて、市小路の紅屋に着いた。紅屋白粉といえば知らぬ者はなかった。

「それは苦労したやろな、ま、家で働くがええ、お喜乃の妹なら、素姓もわかっとるさけ」

その素姓の糾明をどうして田六に行わなかったのか。お喜乃の被害も、田六の甲賀ノ忍びということが分明していたら、免れたのではないか。

悔やんでもあとのまつりであった。お久は幼な心に智慧をはたらかした。田六が甲賀ノ忍びであることを、口にしなかった。

お喜乃が伊賀者たち自身の手で火焙りにされたことも黙っていた。混乱の中で父母は死に、姉も田六も見失った、とだけ言った。

田六はもともと使用人ではない。紅屋のような大店ではふれ売りの男を百人ちかくも出入りさせている。

その素姓を糾明するのは難かしいことだった。

お久は暫く紅屋での奉公に打ち込むように見せた。

そして、先輩や朋輩たちの間にまじって雑談の端にさりげなく田六のことを聞くようにした。

白粉の製法はいろいろある。鉛を用い、あるいは水銀をつかう。当時は鉛毒などの害が知られていないので、かなりひどいものだった。水白粉はまだ発明されていない。

とにかく肌にのることばかりを心がけるから、鉛分が多くなる。紅は紅花の花片を絞って作ったものだ。これは作り方が白粉よりもやさしい。堺で水銀を用いるようになったのは、後年のことで銭屋や小西などが明国の製法をまねて作り出した。紅屋が作るのは、京式のほうである。

これはまず、酢の入った鍋の上に底をぬいた樽を重ねる。下の樽は蒸籠のように簀ノ子が敷いてある。そこに鉛板を巻いたやつを入れて、焚く。炭火で火加減を保ちながら二十日間から一か月ほど焚く。

この火加減にコツがあって、白粉作りでは、最も尊敬される。鉛板が腐蝕すると表面に鉛白

が出る。これが原料になるわけだ。

この火焚きの頭が高安という男だった。高安は六十を越していよう。火傷が半面をひっつれさせているが、眼は優しい。

「お久やな」

と、はじめから言った。

「田六の行方を探しとんのやろ」

ぎくりとした。幸いだったのは、聞く耳のないところであった。

「知っとる。わいに隠すことはねや。田六は前から、素振りが怪しいと思とったんやで」

いつも竈の前に坐っている。口数の少ない老人なのだ。黙々としているから、傍に居ても気にならない。人は平気で饒舌る。そんなせいもあって、意外に多くのことを知っているし、冷静だから、人を観る眼もある。

「江州辺の生れと思うたが、違うか」

お久は若い。頼る者が欲しい年齢だった。秘密を蔵していることは辛かったし、僅かでも手がかりのほしいところだった。

高安老人には、すべて打ち明けた。

そういう事情なら、なおのこと、手助けしたる、と老人は火傷の顔を歪めて、頷いた。

お喜乃もいい子だったのに、あの子を瞞して伊賀へ入りこむなどきたないやり口だと怒った。

「思いだしてみるよってに、ま、このことは他人には隠しとくのや、どこにどない奴が居る

かわからへん、あのなかまがな……壁に耳ありやさけ」

その通りだった。お久は紅屋の奉公に熱をこめた。

老人の態度は変らなかった。孫娘をいつくしんでくれるように、接したのである。

年があけ、翌年六月には京で大事件が起った。天下人の感が深かった織田信長が叛乱者によって弑逆されたのである。

「いくらか、胸の閊えがおりたかの」

老人は歯の欠けた口をあけて笑った。

「いいえ、田六を討たなければ」

お久のそういう表情を凝っと見て、ひとり頷いたのは、心中、考えるところがあったのだろう、ひと月あまりして、盆の休みに、お久を伴って、南へ歩きだした。

鉛が紀州で出たことがあり、それを見に、山へ行ったことがある、と、道々、老人は言った。京や堺で普通使っているのは対馬で産出の鉛である。同じ方法で鉛白をとっても、山によって品質が違う。対馬産のもので製すれば純白にして光沢があり、その艶が好まれるが、唐土からの舶載鉛は、たしかに純白だが光沢が少なかった。ほかにも豊後から採れるものも使ってみたが、これはまるっきり性も堅く粉も粗悪で上等品は作れなかった、などと話をした。

連れてゆかれたのは、紀州の根来寺近傍の谷である。

和歌山市を隔ること西北に三里あまり。那賀郡の三峰山麓に蟠踞した真言密教の修行場として知られている。正確には新義真言宗の大伝法院である。

根来寺には三千の僧坊があると称われている。いずれも密教の荒行に耐え念力修験の者。加持祈禱には常人の体軀では持ちこたえられない。壮軀、人に優れ、膂力三人前を備えるほどでなければ耐忍の修法を会得し難しといわれる。したがって、三千の僧兵、克く一万の軍勢に匹敵する、と。

この根来の僧兵の隠然たる勢力は、信長の紀州侵略をためらわせることになっていた。

紀伊大和の山峰は厳然として軍勢の侵入を阻み、残された西と東も、高野根来と、熊野新宮によって、遮られていたために、信長は南下を躊躇していたのであった。

その僧坊の一つ、千本杉の坊庵におりてきた高安老人は、

「南嶽坊よ、わしじゃ、紅屋の高安じゃ」

と、声をかけた。

中からすぐに返事があった。

「何や、いまごろ、取込中じゃわい」

「大事の用があって来たのや、あけてええか」

「――まあ、しゃアないわ」

ははははと豪快な笑い声がした。

庵は杉皮を葺いた丸太小屋で人間の棲むところとは思われない、ひどいところであった。板は腐っているし、戸前には蓆が二枚ぶら下っているだけであった。

その蓆戸をかかげて、奇怪な坊主が顔を出した。やあ、と、笑いかけてから、早く去ね、と、

言った。二人へではない。誰かいた。坊主の衣の袖をくぐるようにして、少年が飛びだした。袴を穿きながらである。女に見まほしい容姿の少年であった。御多分に洩れず、根来法師も、衆道にたけているのである。

「一寸、待ってくれ、手を洗うてくる」

一散に駈け去った少年に一瞥もくれず、

「後庭を愛でて修法を得る、菊座その花の散らんことを惜しむ、だ、ははは、女人が谷へ来たとは、根来谷開闢以来のことじゃ、いや待て、淫風を払わんといかん」

蓆の戸をばりばりっと、引き千切って、大仰に風を入れた。底知れぬ豪放な法師である。

谷川で手を洗ってくると、あらためて中へ招じ入れた。

「かような花を伴うてくるとは、愚僧を迷わせるが算段か、引っつれ目よ」

「ははは、左様な御坊ではあるまいゆえの」

ふしぎなのは、この老人の態度も変っていることであった。お久が、高安が嘗つて、戦場を馳駆した武士のなれの果てと知ったのは、この南嶽坊円乗から聞いてからだ。それは後のことになる。

4

僧兵はよく六角棒とか大懸矢とか大薙刀を使うと聞いたが、この南嶽坊は、一切そのようなものは使わなかった。

「あそこにある」
と、顎をしゃくった。
壁には一挺の鎌が掛かっていた。
それが、かれの武器であった。南嶽坊もまた高安老人と同じく過去を語りたがらなかった。が、言葉の端々から察すると、農家に生れ、戦乱の中で孤児になった生立ちだったらしい。一挺の鎌が、かれの飢えをしのがせた。野良犬の首を切って血をすすり、生肉を喰い、あるいは雉子や鳶に投げた。
生きることが自然に、鎌を使う術を会得させていったという。
乱世の恃なさから根来寺へやってきたが荒行に耐え、攻めてくる軍勢に抗して武器を持って蹶ったときも、かれの手には一挺の鎌があるだけだったという。
かれにとって鎌は、刀であり、槍であり、薙刀であり、そして時には矢でもあった。
「姉の仇を討つとなれば、教えてやる。鎌を使うか？」
鎌ならば小さい手に握って、稲刈りをしたこともある。半農だったからいつも手の届くところにあった。その意味では、親しみ易い。
高安が紅屋の方にはどう言い訳したのかしらない。お久はこの谷にとどまって、南嶽坊から、鎌使いを習うことになった。
鎌は刀と違い、まともな使い方では、敵を仆せない。もともと稲や草などを手一束に切るに易く作られているのである。

人体は大きく、鎌の刃に合わない。したがって、狙うのは、首。あるいは、腕、あるいは足である。
手でも足でも、太いところを狙うことはない、と南嶽坊は言った。手くび足くび、もっとも細いところでも、その機能は失われる。さらには指切りでもよい、と言う。松の木は松葉を切っても意味がないが人間は指を三本落されたら、手の役を為さぬ。
「汝は女じゃ」
と、南嶽坊は、お久の手をつかんで言った。
「この細い指で大の男を仆そうからには、細心にならねばならぬ。鎌は刃があれど短い、先刃鋭けれども、内にあり、刃を外に向くるとき、すなわち、逆打ちをせねばならぬ」
三月――お久は鎌をただ、弄ぶことのみを教わっている。鎌の重さ、大きさ、その刃とおのれの腕の長さとの相対関係も、熟知せねばならなかった。それは、弄ぶことによって、感覚的にわかるようになる。また、研ぐことも知らされた。
おのれの手で研ぐことによって、愛着が沸き、自在になる。即ち、鎌を持ったとき、それは、刃物でも、物でもなく、おのれの手の一部となるべきであった。
その三か月が過ぎると、跳ねること、走ることを強いた。
「女と思うな。鳥と思え、蛙と思え。おのれを狼と化して走れ」
毎日、毎夜、お久は走り、そして飛んだ。もともと山岳宗教から跋渉術はあみだされている。天狗が山伏の姿をして下山すると俗に言われるように、山伏は、飛翔のわざを識る。岩から岩

へ、梢から梢へ飛ぶ。

もとより、その習練の間、お久の手には鎌がある。右手を専ら用いたが左手でも使ったりした。片方の手を失っても、尚、残りの手が使えるようにである。

鎌で木の枝や、草や、竹を切るところまで入ったのは、一年以上経ってからであった。草を切る。刈りとるのではない。走って切る。草には、南嶽坊がしるしをつけておく。走り寄って切る。その束ねた太さは敵の足を意味し、そして、木の下枝は、向ってくる敵の腕を想定した。

敵は生きている。生きている人間が相手である。さらでだに敏捷な忍びである。これを討つのは容易ではない。風がある日は好機であった。嵐の夜こそ、枝の動き、すすきのざわめきもまた、敏捷な敵に見立てられた。

雨の日も、敵のつぶて打ちへの対応である。巨岩の上に数多の小枝を置く。風がそれをもろに、お久に吹きつける。お久の手の鎌はこれを打ちのけ、払い、切り、身を転じつつ、敵影へ切りつける。

そんなとき、お久の口から、裂帛の気合が奔った。お久は十四になっていた。密教では活力を何よりも大事にする。ことに僧兵たちである。体力と気力のために精進料理などは、摂らぬ。けものを喰う。山芋や牛蒡、葱、韮などはもとより、百合の根や葉や、蜂の子や蛭や蛙や蛇も馳走であった。

その上、草根木皮からの煎汁が、薬効を発揮し、弱々しかったお久は数年で背丈ものび、見

違えるばかり健やかになった。

こうした少女の匂うばかり若々しいからだに南嶽坊が欲情しないはずはなかった。が、かれは、通常の男のように、少女の下肢をひらこうとはしなかった。

「弟子よ」

と、南嶽坊はいう。

「はい」

「手を貸せや」

三日に一度、あるいは五日目くらいに必ずこう言う。お久はもう馴れた。師に尽くす礼儀である。

師がそれを望む以上、もとよりからだをひらくことも厭わない。が、南嶽坊はそれをもとめようとはしない。

「手でよい……柔らかい指でな」

そして前をひらく。

あの稚児の指が触れたであろうそこを、お久は軽く握る。その仕様も、はじめ教わったのである。南嶽坊のそれは奇妙なほど小さく、細かった。体軀は、岩をたたんだように逞しい。が、股間の一物は、細く、小さい。

お久の手がそれを弄ぶように、しばし、愛撫する。さすがに、放ち果てるときは、巨岩の揺らぐが如くに、南嶽坊は歓喜の声をあげて身悶えする。が、それが終ると、また、あの修験者

の相貌に戻るのであった。

なぜ、お久のそこを狙わないのか。女嫌いなのであろうか。女嫌いならば、その手を利用するのも、同じことではないか。

「汝はむすめじゃ。仇を討ったのちは、鎌を捨てよ」

そう言い言いしたところから察すると、かれは、女武芸者として育てるつもりはなく、目的を果したあとは、普通の暮しに戻ることを望んでいたのであろう。お久もすでにおのれの裡にうごめく情欲を知っている。抱かれたいとも思う。

だが、仇を討つまでは、とそれに耐えようとした。耐えることで、仇を討てるのだと思った。

十五の冬には、もうお久は、鎌を使うことでは、おそらく、誰にも負けないほどに上達していた。宙に一転しつつ、木の枝と、草を切ることをも会得した。走りながら、切る。栗の木の下を走り、南嶽坊が梢を打って栗の連続して落下する中を避けて走る。あるいは逆斬りもおぼえた。啄木の樹上にあるを、投げて仕止めることを得、さらに栗鼠の尻尾だけを切ることまで出来るようになった。

その暮あたりから、情勢が悪くなってきた。

山崎で信長の弔い合戦に光秀を討って天下人への道を歩みつつある羽柴秀吉が紀州を版図に収めんとして、野望の眼を向けて来たのである。居城として本願寺あとに大坂城を築いた秀吉は北畠信雄と和し、従三位権大納言となり、着々と天下取りの羽をひろげてきていた。

「来春あたりは、紀州へ来ようぞ」

根来寺と太田城など雑賀党との往来が繁くなっていた。

そうしたある日、お久は、からだを投げ出して言った。

「抱いて下さいまし、お師匠さま」

「……」

「わたくし、おかげさまで鎌の使い方を会得しました。でも、仇と会えば、必ず勝てるかどうかわかりませぬ。そのまま敗れれば、このからだを……」

お久の熱情は、むろん南嶽坊にもわかった。かれは、暫く沈黙した。凝っと空を見上げ、顔を戻したとき、あの磊落な笑いが甦っていた。

「否とよ。汝は勝つ」

「でも……」

「勝ったあとに、な……貰おうぞ」

そして、こう言った。菊の花をひらくがよいか。

それがどういう意味か、もうお久にはわかっている。あの稚児はそれか。男たちが同性に色をもとむるに、後庭を愛することは、お久の耳にも知識として入っていた。お久は、それにも耐えようと思った。

機会は向うから来た。根来の組織をつかって田六を探し出すことは、そう難くはないと踏んでいた南嶽坊であったが——甲賀信楽ノ某とだけしかわからぬ。田六という仮の名で書く——

田六があらわれたのは、翌二月の初めである。根来寺を抜かねば紀州攻めはならぬとして、秀吉は四年前にならって甲賀者にサグリ細作を命じたのであろう。田六は、行脚の山伏に扮していた。兜巾を頂き、錫杖を突き、笈を負うて、戒刀を横たえた姿である。この姿ならば誤魔化せると考えたのであろう。甲賀者にしては浅薄である。伊賀へ潜入したときほどの注意をはらわなかったのは、根来法師何ほどのことかと軽んじたのであろう。

明るい四日の月の下を谷へおりてきたのもそれである。皓々たる月の光りの中を悠々と歩く隠密などいるはずがない、という常識の裏をかくことで、看破されぬと思った。これも浅薄というしかない。南嶽坊はその男を月明に見たとき、お久から聞いた人相を思いだした。あまりにも酷似していたのである。

「田六か」

すれ違いざまに声をかけた。

愕然として、田六は飛び離れた。その面前に鎌が走った。鎌は僧衣の下に隠されていたのである。月下に凄絶な斬り合いのさまを述べる紙幅はない。田六は切り立てられ、いま一撃ちのとき、南嶽坊に一瞬の隙が出た。田六を殺しては、お久の仇討が出来なくなる。傷つけて捕えようと思った。それが隙となった。手裏剣を二本胸と腹にぶち込まれて、南嶽坊は昏倒した。

お久が駈けつけたのは、小半刻も経ってからである。

「田六じゃ、機会が来たぞ」

血の気を失くした唇が言った。

「お師匠さま……とうとう、あたしは」

からだで御礼をすることも出来なくなったと、お久は、身をもんで泣いた。彼女は夢中で、師の股間をまさぐった。が、それは、凋れて、すでに生気がなかった。

「無駄じゃよ……それより、研げ」

南嶽坊はいい、眼を空にむけた。指をあげて、弦月を指した。

「鎌を、研げ……」

「え？」

「げ、弦月、雲を斬る！」

それが最後だった。南嶽坊の指は、月を示したまま、息絶えていた。

月の表面に雲がかかっている。空に風がある。雲は月の表面を蔽うが如くに流れてゆく。月を弓にたとえるならば外竹の方から冒し弦のほうへと流れてゆく。

お久は焦った。師は何を伝えんとしたのか。秘伝がそこにある。弦月、雲を斬る——と。

三月に入ってさらに内大臣に陞った秀吉は大軍を動員して紀伊征伐の軍を進めてきた。根来寺の僧兵らは大軍の前に敗退し、大伽藍が炎上したのは下旬二十三日のことである。ついで、充分の余裕を以って雑賀攻めに移り太田城を水攻めにして勝利を得たのは丁度、ひと月後のことであった。

この勝利に酔った大軍が引き上げていったのち、根来谷に、田六の死体が転がっていた。かれの腹部には一挺の鎌が食いこんでいた。

人々は、その鎌を引き抜こうとして不審の眼を瞠った。

鎌は、逆に、腹部に食いこんでいる。それを抜いて謎がわかった。鎌の背に刃があったのである。湾曲した内側が刃になっているのは、通常のことだが、外側もまたよく研がれて刃になっていた。鎌と対したとき、被害者は、鼻で嗤ったに相違ない。鎌は、如何によく使うたとて、鎌だと。南嶽坊を仆した自信が、田六を軽んじさせたのであろうか。

弦月を、鎌と察したとき、お久は、極意を読みとったに違いない。この後お久が伊賀へ戻ったかどうか記録にはない。紅屋にも戻らなかったようである。高安老人のその後も、誰も知る者はない。

野ざらし鉄砲衆

1

半五郎に娘があるとは意外だった。そのときまで、おくびにも出したことがなかったのである。柿色の暖簾から白い化粧着が笑いかけたとき、驚かしゃがる、と十内を振りかえって、にやりと黄ろい歯を剝きだした。

おれの娘に似ていやがった、と、そのとき洩らしたので、藤次がそれを聞き咎めた。

「娘だって、おめえ、娘がいるのか」

「ああ、まだ十ばかりだけんどな、おれに似てな、美い女だアな」

嘘吐け、おめえに似ていたら、暖簾に顔かくして、手だけ出さにゃ、客は寄りつくめい、と藤次は嗤った。

三人とも酒が入っていた。そのせいばかりではない。長陣に倦んでいた。後世に所謂、小田原ノ役で、北条氏の拠点小田原を取り囲んだ京勢は、すでに三か月、守る方も疲れていたろうが、攻めるほうも倦んでいる。寄手は十数万の大軍である。これだけの男たちがお手当金をだぶつかせ、壮軀をもてあましているのだ。蜜が蟻を呼ぶように、各地から浮かれ女たちが集っ

てきていた。

酒匂の河原はいうまでもなく、丘陵の谷間や路傍や、早川の崖っぷちに、掘立小屋を立て、昼間から、男を招いていた。

籠城戦は、気を焦立てた方が負ける。水や兵粮が充分なら、時間を長引かして、疲れや倦怠が見えたところに、総攻めをかける。攻守とも、その方策を知っている。疲れても元気に見せ、飽いても、熱気と充実を誇示する。そのためにも、士気を養う女遊びには寛大であらねばならない。

京勢にしてみれば、この包囲では、九分通り勝ったようなものだから、酒も女も、充分に与える。総帥の豊臣秀吉にしてからが、淀君などを呼びよせて、陣中、連歌を催したり、歌舞伎おどりをさせたり、悠々とやっているのだ。

三人の鉄砲足軽たちは、この早川畔りの女は、粒が揃っていると聞いて、やってきたのである。

事実、どの女も、男のからだをふるいたたせずにはいない。

「少し高価いがな、ま、美い女だから」

藤次は獅子っ鼻をひろげた。

「半五郎、おぬし、あの女どうする」

十内が聞いた。

「娘に似ている女でも抱けるか」

「へえ、似ているっても、うちのは、まだ、九つか十か、十一か、そのへんじゃ、どうということはないで」

「なんだ、おのれが娘の年をよう知らんのか」

「戦さから戦さでな、あちこちいっとる間に生れよったのじゃ」

半五郎はけろりとしている。そう言いながらも、べつな女を選んだのは、やはり、虚心に遊べないからであろう。

十内は、その女を買った。瓜実型のつるりと、滑らかな頬が、うでた卵の剝き身のようだと思ったが、顔だけではなく、からだも汚れがなかった。

こうした商売をしているにしては、清潔な感じが、十内には好ましかった。

十内は半五郎や藤次とは違い、苗字もない足軽とは違う。代々一色家に仕えた家柄で、北見という苗字がある。牢人暮しが長かったせいもあるが、故あって、鉄砲足軽になった。三人のうちでは若い。十内は二十五歳になっていた。

「お前さまでよかった」

と、女は言った。

「あのお二人は朋友かえ」

「そうだ」

「ほんなら、悪口言えないけど、あの二人なら、断わるつもりだったのさ」

「なぜだ」

「なぜって……なぜでも」

ふふっと、含み笑いで、女は身をくねらし、手を伸ばしてきた。股間をさぐる手も柔らかい。女の名を、十内は聞こうとしなかった。

聞く意味もなかった。この肌なら、また抱きたいとは思ったが、特別なつながりを持つ気になれなかった。所詮は、戦さ場での一時の愉しみにすぎないという気が、十内にはある。

いや、やはり、女に絶望していたからであろう。女に心をもとめることの虚しさを、十内は知りすぎていた。

「ねえ……お前さま、お名前は」

「十内」

「……」

女ははだけた胸を揺すった。かたちのいい乳房に赤く充血した部分があった。十内はそこに、前の男の荒々しい指を感じた。

「あたしの名を聞かないの」

「聞いても詮ない」

「あら……冷たい。じゃア、これっきり?」

「また、くる」

「でも、名前を知らずに」

「ここへ来ればよかろう」

じゃア約束、と女は、拭い浄めたあとの男のものに手を伸ばした。時間が延びればまた一ト切をつける（代金を払う）のである。十内はふたたび盛り上るものを感じたが、女の手は、それを弄んだだけで、小さな痛みを感じさせた。指にからんでぴッとひいた。

「これが、お約束のしるし」

指にからんできた一筋を、女は左の薬指の根元に固くしばった。

片手なのに、きりっと小器用にしばったのである。

「お前さまがくるまで、これを解かないから」

それが口説だとは知らない年齢ではない。当時の二十五歳は、中年に入りかけた年齢である。あとから思うと、片手で一本のちぢれ毛を指に巻きつけ縛るという技術も、並大抵ではない。客に裏をかえさせるために、習練したことか。

（鉄砲衆の早撃ちと同じだ）

切火縄を五指にはさんで、火薬こめや銃身掃除を素早く操作するのは容易ではない。十内が三日目に、また早川畔りに行ったのはそのことを思ったからである。

「阿呆かいな、同じ女のとこへゆくのなら、嬶と同じじゃないか」

と、藤次が嘲った。

一人の女とは一度しか寝ない。それでこそ銭を出す意味がある。同じ女に何度も通うのは、未知なものを識る愉しみがない。ここでこうやったら、アノ声を出して、こういじくったら、鼻の穴をひろげよる。それだけわかっていて、どうして同じ女を抱く気になるのか、おらには

わからねい、と藤次は言った。

藤次は三十に手が届くが女房を持ったことがない。乱世では珍しいことではない。土地も家もなく、財もない雑兵には、女房子を持てるのがおかしいくらいだ。

藤次の言葉は、女房を持てない男の強がりのようなものであったが、明日知れぬ男たちのはかないいのちでは、また当然の気持ともいえる。

そうでなくても、商売女に情を移すくらい莫迦げたことはない、と半五郎も言った。

「いつ死ぬかしれんのに、未練が残るじゃろ、男らしい死にかたもでけんやないか」

「おれたちのような足軽に、なんの名誉か」

十内は笑った。自嘲の苦さが、頬に残った。

「それもそうやが、やっぱり、御扶持もろうてるで、それだけの働きはせんと」

「それだけのことはする」

「それだけも出来んちゃことや、弾丸の音がすると、胴ぶるいがくるよってに」

「……」

「日ごろは撃てるもンも撃てんようになる。引金ひく指に力がこもらんねん、見える敵も見えんようになる。そうやないか」

誰にも憶えのあることだった。

「それに……銭がかかって、かなわん」

銭はなければ、通えないのだからいいが、ほれたら、後悔する。イザというときに、弱気に

なる。

十内も藤次も、その点では、懸念はなかった。どうせ乱れた世の中の雑兵では、さして面白いこともない。出世できないなら、死んだ方がマシともいえる。

その勇気は、名誉とか、男らしいとかいうよりも、一かどの侍に出世という目的が伴っていた。

半五郎に娘があるとすれば、同じ目的でも危険に対しての行動にひらきが出てくるのはしかたがあるまい。

「あまり、娘々と吐かすな。おら、忘りょうとしてんのや」

忘れねば、戦さには出られない。鉄砲隊はまた鉄砲に狙われるのだ。

その女が、

〝お冬〟

と、わかったのは、半五郎が聞きだしてきたからである。

2

半五郎は、ほかの女に聞いたのだと言った。そのときは、言葉通りに受けとったのだが、藤次が宿酔がさめたような疲れた眼で、あの女の肌は、どうして、あんなに滑っこいのやろ、ぴたっと、肌が吸いつくようや、などと言うのを聞くと、かれらも、お冬を抱いたらしい。

十内は、それと知っても、格別の感情は動かなかった。動かないように、なっていた。女へ

の想いを、鉄砲に代えて、もう久しい。

お冬を抱いたときの快感も、それだけのものだ。二度、抱いている。一度でも三度でも変りはなかったろう。

藤次や半五郎が何度抱こうと、ほれようと、心を動かされるものは何もない。

よく、女の秘所の構造について、蘊蓄を傾ける者がいる。

小田原陣が、長期にわたって動きが少ないせいばかりではない。そういう下がかった話を好きな者が多い。

僅かな時間でも饒舌りたがる。戦さの恐怖がさせるのか。恐怖を逃れるための馬鹿笑いか。

十内には、さして興味はなかった。女体への興味ではない。女と男との肉体が、ただ構造の違いだけで、快感を云々するには十内は心の傷が深かった。

藤次や半五郎のように、深い想もなく、刹那的な、単純な生き方をしている者には、そうしたことが大きな問題なのか。

そうした男たちを相手にする浮かれ女が、その技巧を練るのも当然といえる。十内に抱かれたお冬の行為は、たしかにあとを引かずにはいないものだったが、心のない浅薄さが、十内を強いて三度の行為に誘わなかった。

半五郎や藤次には、性感を甘美にさせてくれる道具でありさえすればいいようであった。

「妙な女だな、ありゃ、朝起きに行っては、あまり、味がよくないでの、二番目が丁度よいのや」

「ほうやな。最初は、なかなかに、潤わんて。最初にやるやつは、露払いというところかいの、いや、露を呼ぶ役だあな。丁度、いいおしめりが二番手三番手だ」

「そのころには、ええ工合に、よくぴくぴくしての、締るところは締るしな。よくまああんなに生き物のように締めたり緩めたりできるものだわな」

二人は思い出し笑いで、涎を垂らさんばかりだった。

どうせ、女のからだは借り物、銭を払って愉しむだけだから、あとでも先でも関係ない、と言っているうちは、無事太平だったが、そこまで惚れこんでは、いつか衝突がくる。

二人の仲が険悪になったのは、小田原の旗色が急速に悪くなった五月の半ばだった。

枝葉を刈りとれば、自然、根は腐るものよ、と、兵を損じない秀吉の方策で、北条の支城や属城をまず、個々に攻略させていた。

四月から五月にかけて厩橋城、松井田城、箕輪城、江戸城、玉縄城、川越城と陥落してゆき、小田原の命運も旦夕に迫っていた。

小田原城は十年の籠城も平気だと豪語していたものの、焦りが目に見えてきた。時々、思いだしたように、出丸から仕寄りに発砲したり、二百ほどの騎馬隊が突然、飛び出して来て前線を蹴散らして、さっと引き上げたりした。

いよいよ落城の時期も迫ったとなると、寄手は、各々の布陣を厳にし、したがって非番も少なくなった。

藤次と半五郎が衝突したのも、そのせいだった。

藤次が行ったばかりのところに、半五郎が来た。
まだ抱いていない。帯を解きかけたところだったのである。
「なんや、半五郎……」
藤次は半裸で間誤間誤した。
「済んでか」
「未だだ、阿呆」
「阿呆ということがあるか、早よせい」
「早よって……そこで急かされて、出来るものか」
「出来ないのなら、後廻しじゃ、時間がない」
「ほなら、帰れ！　帰って皮つるみでもせいや」
「ド阿呆とはうぬじゃ。ここまで来て、抱かずに帰れるか」
他愛のない喧嘩に見えた。お冬には愉しい観物だったろう。それだけ、自分がもとめられているという認識は、女の自尊心を満足させるものだ。
それだけのことなら、如何に単純で好色な二人でも、あのような結果にはならなかったろう。隣家（といっても同じような小屋にすぎないが）の女が、半五郎が順番待ちで、つくねんと、松の木の根方にうずくまって、鼻毛を抜いていたのを見ている。
「おぬしだな、鉄砲放し（撃ち）の名人半五郎と申すのは」
見世から女に送られて出て来た男が、馴れ馴れしく話しかけた。

問答を聞いていたのかもしれない。
「折入って相談したいことがある」
あたりを憚る様子が、ちょっと気になったので、女は、うしろ耳を立てたという。
「おぬしにとって、得な話だ、ここらの女など、百人も束にして買える儲け話だ」
そんなことまで言った。
ここでは折入っての話はできぬ、歩きながら話そう、と、促して、歩きだした。半五郎も半信半疑だったが、どうせ、藤次がゆっくりお冬の肌を愉しむに違いない。わざと時間を二タ切にするかもしれない。話をする閑はたっぷりある。儲け話とやらに、半五郎の腰が浮いたのも、（お冬を、おらだけのものにできるかもしれへん）と、欲望がわいたからかもしれない。ここら辺の女を百人も束にして、とはうまい口説文句である。
それで目の色の変らぬ雑兵はいない。
そのとき、半五郎が、何の相談を受けたかは明らかではない。が、藤次が十内に打ち明けた話で、凡そはわかった。
十内が鍛冶小屋にいるところにやってきて、どうしても、二人きりで、話したい、と無理に誘いだしたのである。そのとき、十内は鉄砲の玉をこしらえていた。火薬はこしらえることは出来ないが、玉は、鉄砲衆が作ることになっている。火薬も量を加減すれば、目標物の遠近の破壊力が違ってくる。したがって、早撃ち鉄砲と称い、火薬は一定の量が紙包に入れてある。これだと、湿気をひくことも少ないし、分量に狂いがない。その紙包を大きくしたり、小さく

したり、封をするなどの工夫はするが、鉛玉は、はじめから鉄砲衆が作る。
鉛は組成が一定していれば、あとは分量だから、俗に玉匙と称うやつで掬いぎりにして、これをころころ転がして丸く作る。簡単なものである。
その手を休めさせて、藤次は無理に外へ連れだした。
「うまい話があるのじゃがな……」
黄金十枚になるという。破天荒な大金である。それも道理。寄手の総帥、関白秀吉を撃ち殺せば、北条ノ手から入るという。
「当り前のことをいうな」
当り前すぎて、十内は腹が立った。おれが北条なら、十枚どころか百枚も払う。
「敵の大将を撃てば、黄金一枚は確実だろうぜ」
「さ、それだわさ、城内には忍びこめぬい」
「……」
「北条の氏政たら氏照たら、姿を見せることはあらへん。ところが、こっちの大将、関白さまなら、お気軽じゃで、ひょろひょろ御本陣から出られる。歌舞伎おどりを愉しんでおられるところなど、幕外から、ずどんとやれるわな」
「そう簡単にゆくものか、やれるなら、やるがよかろう」
「やる。やるとも。さ、それもじゃ、見張りなんども居るゆえ、一人では、難かしいによって、おぬしに口をかけたのではないか」

「黄金十枚の餌でか」
「山分けじゃ。いんにゃ、おら、四分六でよい。四分、いや、おらの方は三枚でもよいぞよ。の、おらが三枚、おぬしが七枚」
「……」
「これほどのよい話が、またとあるかや」
その話をするだけでも、もう黄金の光がちらつくのか、藤次は、涎を垂らさんばかりだ。味方の大将を撃ち殺して、敵から大金を貰うなどとは、全く浅ましい。が、浅ましさも、金の力には負けてしまうのが、所詮は雑兵だった。
戦さに狩りだされたのも、半分強制で、半分は僅かばかりのお手当てが目あて。大功を樹てないかぎり、足軽は足軽であった。
金のことと女のことで、どうにでもなる。鉄砲衆なら、敵の大将を撃ちとることもできるのだから、槍組よりも、出世の可能性はあるのだが、こういう戦さでは、まるきり、敵の大将はあらわれない。
手っとり早い話の方に、気をひかれてしまうのも無理はなかった。
十内は藤次を蔑みながらも、自分の気持にもそれを一蹴するだけの毅然たるものがないことを、自嘲した。
「どこからきたのだ、その話は」
「そら……言えん」

十内が上司に密告するとでも思ったか、藤次は、口を噤んだ。が、結局、秘密のできない男なのだ。半五郎から持ちかけられた、と饒舌ってしまった。

「半五が！」

十内は軽く驚きの声をあげた。

半五郎はもともと織田信長が存生のころから秀吉の麾下堀秀政に仕えていた。いうなれば譜代だ。足軽には譜代もくそもないようだが、身分が低くても、年月がつながりを深くする。半五郎は、金のために捨てることができるのか。おのれ一人でやらずに藤次を誘ったのは、少しでも負担を軽くしたいからか。危険の配分よりも、心の重荷を少なくしたいのであろう。

「いやだ」

半五郎の誘いと聞いたことで、はっきりと十内は言った。

「気が進まぬ」

「黄金……」

「何枚でも、だ。気が向けば、銭一貫でも関白を殺るかもしれぬ」

歩きだした十内の背へ、

「お、おぬし、他言は……」

念をおすまでもない、と十内はうすく笑った。藤次が半五郎と組んで、堀秀政を撃ったのは、その三日後のことである。

3

正確にはわからない。が、堀秀政の死を聞いたとき、やったか、と感じた。

左衛門督秀政は四位ノ侍従にして、北ノ荘にて十八万八百五十石を領していた。いまだ十八歳の働き盛り、この度の包囲陣にあっては西南部を受け持ち早川口一帯に布陣していたのである。

秀政の人と為りを物語る挿話が二、三ある。

藩翰譜や常山紀談にその武将として士を観る眼が深かったことが語られているが、かれは、ただ勇猛で軍略にたけていただけでなく、人情の機微にも通じていた。

今度の場合でもそうだ。十数万の大軍を動かすには、寝小屋や兵粮が必要だが、堀秀政は一手にひきうけて、その調達を計った。

近隣諸国――伊豆、相模、駿河、遠江で、牛を数十頭、買い集めた。輸送のためである。

これを各隊に配分して、荷車を曳かせ、名にし負う箱根の山越えをした。いうまでもなく山中城の敵を蹴散らしたあとであるが、風雨の激しい夜で、秀政は部下をいましめて、

「今夜、必ず盗賊が出るぞ。この風と雨と闇だ。だが、馬や鞍や兵粮などを山賊どもに与えるくらいなら、おれがとる。いいか、油断しているやつからは、おれが盗む。そのつもりでいろ」

真顔でこう言った。

治世になってからは、こういう話は通用しない。乱世に於ける主従の関係が窺える挿話だが、これが効いて、他の隊では、風雨にまぎれて、積荷を盗まれたりしたが、堀の隊だけは、とうとう一物も盗られなかった。

こうした秀政である。行動は慎重で、かりそめにも軽率な真似はしない。いや、考えが過ぎたゆえに、不慮の死を招いたともいえる。

秀政はその夜——五月二十六日の夜、いよいよ総攻撃近しと見てか、仕寄りのあたりを徘徊していた。

かれほどの身分で、供も連れずに、歩くのは珍しい。雨を催した空は重く雲が垂れていた。どこかで、銃声がした。

馬廻りの侍が駈けつけたとき、秀政は地上でもがいていた。その直後、豪雨がきた。

秀政は陣所に運ばれる間にずぶ濡れになっている。

奇怪なのは、狙撃者を誰も見た者がいない。銃火も見ていない。秀政が急病とされて病死の形式をとったのは、合戦の場に於て死んだのではないからだ。

槍も手にせずおのれが陣中で狙撃されたとは、不名誉なことだった。大将の身分と地位は、死ぬに際しても責任がある。他への影響を考慮されるからである。殊に、落城間近となったいま、堀秀政が、おのが陣中で敵から狙撃されるなどと知れたら寄手の士気に影響する。

(面妖だな)

十内が、そのことに不審を感じたのは、やはり鉄砲衆としての目である。

出丸の端から——最短距離から撃っても、弾丸は届かない。むろん、鉛玉による死ということは、鉄砲衆の間で、ひそかに囁かれていたのだ。

半五郎と藤次のことを十内が思いだしたのは当然である。

(秀吉を殺れずに……)

秀吉が黄金十枚なら、秀政では五枚にもなるであろうか。

だが、その五枚にもありつけたかどうか。

(馬鹿なやつだ。落城は時間の問題というのに、誰が報酬を払うものか)

秀政を哀れと思う気はない。敵に利用されて、味方の大将を撃った同輩を愚かと思うだけであった。

かれが、半五郎と藤次を見たのは、次の日が最後である。

早川畔の女郎屋に出かけたのは、久しぶりにお冬を抱きたくなったからだ。

お冬はいた。十内の顔を見ると、飛び立つように、すがりついてきた。

「お、お前さま、大変だよ、いま藤次さんが、あそこに……」

日暮れに早い雨の日である。もう、森陰は暗くなっている。向う岸にかれらはいた。

「半五、やったのは、おぬしやな、ほうやろ、幾ら貰うた?」

「なんの話だ」

「なんの? とぼけたらあかん、大将を殺った褒美だわさ」

「……」

「半五、おめいが殺ったことは、わかっとるがな、黄金、十枚か、八枚か」

こうした対話は十内のところには聞えなかった。

十内はただ、二人の姿を見て、ただならぬ気配を感じたのである。

藤次の影が身を翻えした。半五郎が追った。距離は十二、三間と見えた。半五郎が腰だめにした鉄砲が火を吹き、藤次は一瞬、棒立ちになり、それから、よろめいて倒れた。

半五郎が走り寄る前に、藤次のからだは、崖を転がり落ちている。

十内のところから、その様子は、はっきりと見えたが、吊橋を渡らねば行けないのだ。雨を集めた早川は、その名が示すように、おそろしい早さで流れている。川水はふくれあがり、渦を巻き、岩肌を噛んで、宵闇にさからうように奔っていた。

しぶきをあげて転落した藤次の姿はたちまち、波に呑まれた。

狼狽した半五郎が、こちらを見た。十内を見たのだ。

銃声に気づいた者も何人かいたようだが、瀬の音にかき消された。注意している者でなければわからなかったろう。

「半五郎！　きさま」

思わず、十内は叫んでいた。鉄砲が手になかったのが残念だった。いつもは必ず携行している。非番だということが、かれに手放させていた。

このときほど、残念に思ったことはない。十内が走り出したのを見て、半五郎も逃げだした。吊橋を渡るうちに半五郎の姿は宵闇と木立の中へ隠れてしまっていた。それきり、半五郎も十内も小田原陣へ戻っていない。

4

（――許せぬ。半五郎は許せぬ。おれの目の黒いうちは……）

草の根をわけても捜し出して、藤次の仇を討つ。

十内は半五郎を追って、北ノ荘へ帰ってきた。小田原攻めの軍勢がひきあげてくるより先に戻ってきたのである。

いずれ、半五郎は戻ってくる。そう思って足軽長屋を見張った。

半五郎の家には、娘はいない。そのことは前から知っていた。干からびた女房がいるだけだったが、この女房は、ひと月ほど前に、富山の薬売りと、どこかへ去んでしまったと、隣家の婆さんが話してくれた。

ひと月前といえば、むろん、あの事件は起っていない。計画的ではあるまい。以前の夫婦を知っているが、そう仲がいいというふうには見えなかった。

半五郎の女房は、敦賀で、廻船の船頭相手に春をひさいでいた過去がある。そのことは別段どうということはなかったが、かなり自堕落な女だった。わざと人目につくようなところで盥を持ち出して行水したり、きわどい話で半五郎の同輩をそそったりした。

「あれじゃア、ママ子を育てられぬわいナ」

と、近所では話した。

その娘は、前妻の子という。京の知己に預けてあるらしいという。

（――彼奴、京に行ったか）

ひと月ほど待って、とうとう半五郎があらわれぬのを見ると、十内は、見当違いをしていることに気がついた。

城下には帰れまい。もしも帰ってくるとしたら、悪事の果報が届かぬ前だ。もっとも、小田原が開城したのは、あの事件から一か月以上経ってのことで、その後も、秀吉は凱陣せず、北条百万石は徳川家康に与えることにして、奥州へ転戦した。

伊達政宗は降参したが、岩代や陸前、磐城の小大名たちが反抗していたからである。

転戦といっても、秀吉は平服であった。戦う前に、秀吉の大軍を見ただけで、奥州の小大名たちはおぞ気をふるって、城を開いた。

これらの城を伊達や蒲生に与え、佐竹氏に本領安堵させるなど、いろいろ手を打って、漸く京に凱旋してきたのは、九月朔日。

三月一日に京を発足して以来だから、きっかり半歳の長征であった。

その行列を、十内は、賀茂川の畔りで見ていた。

深い藁編笠をかぶり、菰包みを持っている。朽葉いろ袖無し羽織を着て鉄無地の袷に袴は伊賀袴であった。両刀を帯して、牢人姿であった。笠から洩れ見える顎のあたりには無精髭が濃い。

腰には、大きな革の巾着を二つぶら下げているのは、一つは銭ではなく、火薬と玉を入れて

いる。胴乱は下げていない。菰包みは、打ち刀でもあるかのように装っていた。鉄砲ということがわかれば、やはりまずい事が多い。

京は天子のいます所であるし、秀吉の聚楽第があり、治安は厳しかった。

もっとも、諸国に牢人者はあふれている。こうした身なりの者は、さして人目に立たない。目立たない方がよかった。半五郎の方で先にかれを見つけたら、そのまま、また逐電してしまうだろう。

（どうでもして見つけ出さずにはおかぬ）

秀政を撃ったのは、かまわぬ。黄金を一人占めにして藤次を殺したことだ。

黄金は手に入れたかどうかしらないが、藤次を撃ったのは、十内が、目撃したことだ。

この時代、法律はない。法律は力が定めた。力が正義だった。秀吉が、殺れと命令すればそれが法律だった。ことの真偽を裁判で争うことはない。

誰に、その次第を告げるのでもない。十内は正義を行なうというのではなかった。

ただ、

（許せぬ）

と、思った。

それだけで充分だった。北見十内という男が、半五郎を放置しておけない。理由はそれだけだ。おのれの心に納得させるために、半五郎を撃ち殺す。

藤次を卑劣に撃ち殺した罪は、十内の鉄砲で半五郎を死に至らしめることでのみ、清算され

る。

（くる、必ず……）

娘のところにはくるはずだ。

風の便りに、堀秀政のあとは、堀秀治が継いだということを聞いた。十内には、関係のないことだった。

かれは、北ノ荘のお長屋の目ぼしいものは金に換えて、京へ来た。

これは脱走には違いなかったが、後世ほど、封建の制度と、儒教思想が浸透していない。大名と家来の関係も、かなり乾いたものであった。

主人が気に食わなければ、家来の方で追ん出る。気がむいたら、帰参してくる。それでさして咎めもしない。有能なら、再度召抱える。能力の時代なのである。

もっとも、喧嘩別れしたときなど、主人が、

〝構う〟

ことがある。その男のゆく先々に、廻状して、仕官話をぶち毀すのだ、文句があれば、弓矢でもって、お相手いたす、という。とにかく荒っぽい時代である。

幸か不幸か、

〝奉公構い〟

されるほどの、身分ではなかった。鉄砲衆などは、戦さには必要だが、人格は認められていない。虫ケラみたいなものだ。

数うるに、一騎二騎、という。一騎とは馬に乗り、供を従え、槍を立てる身分である。これが士分だ。士分以下は、数にも入らない。そのくせ、戦さのときは最前線で、いのちを賭ける。

旧主や、昔の関係者に、顔を見られるのは都合が悪い、という程度であった。

万一のときは、

（これこれしかじかで、藤次の仇討ちに）

といえば、通るかもしれない。が、十内はもとより、そうした手を用いる気はなかった。

あのとき、

（半五郎を、殺す！）

と、思い立った。ほかのことは考えぬ。

娘を探すのは存外、簡単だった。はっきりと住所がわかっていたのではない。

「洛北というだけしか聞いていない」

という者が多かった。

ただ、洛北というだけではわからぬ。捜しようがない。

〝九歳から十一歳〟

年齢もはっきりしない。もっとも、戸籍があるわけではないから、大体のところでいうわけだが、半五郎のいい加減さは、すべてに及んでいた。

「相国寺の近くと聞いたことがありますがの」

漠然としていたが、洛北というだけより、まだいい。

河合神社の巫女が男漁りする、などと話していたこともあるという。かと思うと、糺ノ河原で、誰それの火焙り刑を見たことがある、などと吹聴していたという。

半五郎は、法螺吹きの面もある。娘を預けにいったり、たまにしか、京には行っていない。北陸の北ノ荘と京では、大して遠くもないが、気随に旅のできる時代ではなかった。

半五郎が、京ぶりを口にする大半は、又聞か、一のものを十にするふくらませかだった。もっとも手がかりになったのは、京の針売りの世話だということであった。みすや針の小竹という、その男の名前もわかった。

訪ねていってみると、その男は四国に行商に行って留守だということであった。だが、娘のことは、店の者が知っていた。

「お千のことやな」

と、みすや針の主人は、女房と顔を見合わして、

「遠出する間は、預けとるちゃ話でんな」

十内は、唱門師村を突きとめた。

そこは、京の吹き溜りとでもいっていい、一画だった。

相国寺の東で、出雲郷のかかりであった。当時、京の北郊になる。賀茂川が、高野川を合わせるあたり、三角洲に糺ノ森がある。唱門師村は一口にいえば、傀儡師や盲法師や、放下師や瞽女など、大道芸人たちの京に於ける〝巣〟であった。

唱門師はいわゆる門附けの〝大黒〟で三河万歳などと同じようなものだ。門説経でもあるし、また古くは、陰陽師などを称してもいた。吉凶を卜する方術と正月の祝い祭文には共通したものがある。どちらも、あやしげな職業である。

京という特殊な場所に、こうした連中が発生し、その流れが時代の変遷の中にも余脈を保っているのは、如何にこうした賤業が根強いものかわかるが、また、かれらの聚落は、他の力の介入を許さぬ組織を持っていた。

平安城このかた、京の地は、兵燹に遭っても必ず復興するし、天子と堂上公卿がいて、武家も天下に覇を唱えるには、必ず、京の地を踏む。この京のあぶくを吸って生活している身には、飢えはないのである。京が焼ければ焼けたで、復興すればしたで、収入がある。墓石を起し、死体を始末するだけでも、なにがしかにありつく。

この異様な村で、お千は養われていた。

5

十内が見たとき、お千は池にいた。唱門師村に入って、お千のことをたずねると、三本松の小屋だ、と蛇使いが教えてくれた。その男は、青大将の口をわって、鶏卵を呑みこませようとしているところだった。

「こやつは怠け者や、もう眠たそうにあくびしてけつかる。冬がくるまでに、まんだ一はたらきして貰わにゃ、こっちゃの顎が干上るちゅうのに」

歯の抜けた口を笑わせた。
晩秋だったが陽ざしは、きつい。
唱門師池にゆくと、女のはしゃいだ声が聞えた。
深い木立の中に碧を湛えた池の面が陽を反射して見えた。
そこに白いからだが、喜々としていた。
ばしゃばしゃ水をたたいて泳ぐともなく、戯れている。蒼い肌は、すがすがしいばかりに細い。一糸まとわぬ肌は、濡れて光っていた。輝いているといっていい。
腰に及ぶほどの黒髪を赤い小切れで結んでいる。うしろから見ると、成熟した女のように見えた。が、こちらをむいたとき、その胸の、あるかなしのふくらみや下腹部に、一点のしみもないすべすべした浄らかさが、少女であることを証明していた。
遠かったし、木立が距離感を失わせていたのである。傍へ寄ると、十内の胸のあたりまでしかない。
「お千か」
十内は近づいて言った。
お千はけげんな顔でふり仰いだ。
「だれ！」
「そなたの父御の朋友だ」
「まあ、うれしい」

素直に、お千は笑顔を見せた。人懐こい笑顔であった。十内も誘われて微笑した。
お千の世話をしているのは、片眼の老婆であった。幾歳になっているか、見当もつかない。ほほけたすすけ髪と、凋んだ棗のような顔。片眼が潰れて、残った方は、ほとびるように濡れて、冷たい光りを放っていた。
「お前さま、甚八とお知り合いかや」
「甚八？」
「この子の父御じゃわいナ」
「阿呆吐かせ、この子の父親は北ノ荘の堀家に仕える鉄砲放し衆、半五郎だ」
老婆は凋びた顔をさらにくしゃくしゃにして、ひひっと笑った。
「甚八やないわいナ、半五郎じゃわいナ」
老婆なりに、十内を試したのであろう。
あの半五郎の娘には勿体ないような素直さと明るさが、お千にはあった。
その半五郎は、ずっと姿を見せないという。
（嘘を吐いているのか？）
はじめ、十内は疑った。
北ノ荘にもあらわれなかったのだ。この娘のところにくるしかない。いま、半五郎の身内といえば、このお千だけのはずであった。
いい加減な男には違いないが、わが娘への情愛は別のものがあろう。ことに、お千を見てい

ると、戦さ場の酸鼻も、憎しみも、怨みも、そうした荒々しい感情は綺麗に忘れてしまう安らぎがあった。

逆境にあっても、ねじける者と、そうでない者が出来るのは、先天的な血によるのだろうか。

十内は、この唱門師村に来ての数々、しだいに、心が和やかになるのをおぼえていた。

唱門師村は、村といっても、林の中に、あちこち思い思いに小屋が点在しているだけで軒を並べているわけではない。

その小屋は、板切れを拾ってきたものや、半焼けの家をそっくり解体してきたものがあったり、床板が壁板になったりしていた。

茅張りに竹の柱という掘立小屋もある。松の木をそのまま小屋の柱にしている家もあった。

十内は、この疎林の近くの柳ヶ辻にある木賃に宿をとった。

木賃は文字通り自炊の薪木の代で、これが後の宿賃になるわけだが、したがって、自炊がたてまえなのを、その値段だけ払えばいいわけである。

ここに宿をとって、十内は毎日、様子を見にいった。夜陰にゆくこともあった。こっそりと半五郎が帰ってくるかもしれぬ。

鉄砲の手入れも怠らず、火薬は毎日詰め代えた。火薬は詰めこみでは湿気をひく。銃身に詰める火薬と、発火の火皿の火薬は、別である。火皿のほうは導火線になるのだから、点火がよくなければならない。したがって、同じ粉末でも、特に乳鉢でこまかくしてある。

毎日訪れる十内に、お千は親しみを持つようになってきていた。

「十内さまのお家はどこ」

そんなことを聞いたりした。

「家などない」

ぶっきら棒に答える。

「でも、家がなかったら、嫁御がまいりません」

「――そうだな、おれなどのところには、誰も来まい」

「まあ、お可哀想」

本気で、そう思うようであった。眉をひそめ、憐れむように見る。

「お千が、嫁御になってあげましょうか」

それには、十内も苦虫を噛み潰したような鹿爪らしい顔をほころばさずにはいない。

「それもよいな」

「十内さま、お千を好き」

「――うむ」

父親を殺しに来たのだとは、この幼い胸に言えない。その時がきたとき、お千がどんなに悲しむか、それを思うと、先に諦めさせてしまった方がいいようだが、お千の黒い瞳に見つめられては、口に出せなくなる。

お千は、北ノ荘の継母のことを聞こうとはしなかった。駈け落ちしたことも知らない。

鉄砲はむろん、火縄を点じたまま、持ち歩きはしない。いざというとき、点火するつもりで

切火縄を嵌め、菰でくるんである。
「見せて」
何日目かに、お千は甘えた。
「鉄砲でしょ」
「……」
「父さまが、持っていたから知っている」
「危ないものだ、女子供が触ってはならぬ」
「あら、火が点いてないのに、危ないことはないでしょ」
十内は苦笑した。小ましゃくれた言葉も、可愛らしく聞えたことだ。
ずっとあの日以来晴天がつづいていた。春から夏にかけて雨が多かったから、その反動のように、晴天がつづくのか。十内の心が晴れやかになってきたのも、天気のせいもあろう。お千の笑顔は、天気にこそふさわしい。林の中にいても木ノ間洩れの陽がさすなかを、お千が走ってくる姿は、まるで小鹿のようであった。
十内は、お千と逢うのが愉しみになっていた。こうした気持でいて、半五郎があらわれたとき、ほんとうに、撃てるか。お千がしがみついてきたり、父を庇って楯になったりしたら、どうなるか。
（なんの、撃てる）
十内は、おのれの心に言い聞かせる。

（藤次を殺したのだ、あのような卑劣なことで……）
この怒りの火は消してはならなかった。
清純な少女とは、別なのだ。この少女と半五郎が血がつながっているなどと考える方がおかしい。半五郎は撃つ。姿を見たら撃つ。その間は、お千のことを忘れている。それから先のことも考える必要はなかった。
その半五郎が奥州で討死したらしいという噂が伝わってきたのは、京にも風花が舞うようになった霜月の末だった。
唱門師村には、道ノ者が多い。諸国の風聞が伝わるのは早い。
陸前名生の城が蒲生氏郷によって攻略されたのは十九日のことだが、その落城戦の中に半五郎は陣場借りしていて、討死したという。
「たしかに半五郎という名か」
十内は問いつめた。が、所詮は噂であった。半五郎だったか、半次郎だったか、よく憶えていない、と、その馬喰は言った。南部馬を需めにいって耳にした風聞だったのである。むろん、陣場借りするような牢人衆の討死など、正確な記憶にとどめようのない雑事にすぎない。
「彼奴が死ぬものか、容易に死ぬやつではないわ」
いきまいて、十内は言い、その激昂ぶりを意外な面持ちで見上げているお千の瞳に、はっとしたのだった。
十内は、お千を抱きあげて、言った。

「お千、おじさんの嫁御になるか」
「約束しましょ、指きりしましょ」
小さな小指に指をからめたとき、ふいに十内は、半五郎の討死を信じたい気持になっている自分に愕然としたのだった。
このまま、お千を連れて、どこかへ行きたい。おのれほどの鉄砲の腕があれば、どこにでも仕えることができる。鉄砲足軽でもいい、お千と暮せたら、新しい力が湧くのではないか。おれは鉄砲足軽で終る男ではない。必ずひとかどの者に出世する。半世を暗く包んだもとも、多くの女たちに裏切られてきたからだった。お千のような純真さをこそ、十内は望んできたのではないか。
「お千、北ノ荘へ行ってみたいか」
北ノ荘へゆけば半五郎の死も確認できよう。それとも、その生死如何によって、十内の心にもふんぎりがつく。お千を連れての数日の旅に、十内は期待した。嘗つて、こんな気持になったことはない。
「ええ、行きたい」
お千は目を輝かした。
師走の声を聞いた早朝、出発することにした。空は雪を催して雲が低く、夜明けの寒さは一入だった。暁闇の中に、十内はお千を迎えに来た。寄り添って暗い林の中の小径を抜けてゆく二人の姿が、実の父娘に見えたのも当然かもしれない。

林を出たとき、突然、銃声がした。十内は左の胸を斧で殴られた痛みに目が眩んで倒れた。倒れながら、菰包みをひらこうとした。
「は、半五郎が……」
まさか。半五郎が来たのか。お千の金切声も、混沌の中で遠くに聞えた。
火縄の火と硝煙が近づいてきた。その男の影を、十内は、見まもっていて、鉄砲をむけようとしながら、もう力が入らなかった。
「ざまア見さらせ、半五郎よ。おれが死んだと思うたのやろ、へえ、藤次さまが、そない死ぬものか」
「と、藤次か！」
「ほうや、藤次さまや。水練が出来るよってな、鉛玉が急所をそれていさえすりゃ、死にはせんわいな。汝の次は、この娘じゃ」
「よせ、藤次……おれだ十内だ」
最後の力で、十内は叫んだ。その声が、聞えたかどうかわからない。しだいに目の前がかすみ、お千の声だけが、遠く近く聞えた。その声も、潮の退くように、かぼそく消えてゆくなかで、十内は眠りにおちてゆく快さに包まれていたのだった。

狂刃系図

1

人間の不幸は、どんなときに訪れるかわからない。誕生日の祝いが、突然、不幸な出来事によって、かき乱され、それが生涯を苦難に追いやることになろうとは、幼ないお葉にはむろん、母のたま代にも、予想もつかないことだった。

誕生日の祝いといっても、女の児のことではあるし、特別に仰々しいものではなかった。晴着を着せてもらい、食膳にはいつもより一汁一菜が増えているだけである。つましい母子の暮しも、まだ四歳になったばかりのお葉には、どうということはない。幼ない日々には、母が傍にいるだけで倖せであった。

四月の四日に生れたとき、庭の葉桜がきれいだったので、父がお葉とつけたのだと、聞いた。その父の顔を、お葉はよくおぼえていない。

四歳くらいでは記憶もあやふやなのか、長じてのち、お葉は父の顔を思いだそうとしたが、明確には浮んでこなかった。たしかに憶えていたはずである。母の話でも、その実感はあったが、記憶をうすれさせたのはあの誕生日の衝撃の強いことを物語っていたようである。

母の手作りの、その祝いの膳に箸をつけようとしていたときだった。

「大変でございます、お殿さまが」

と、弥兵衛が駈けこんできた。六十近い老人で、当初から、母娘のことを任されていた。生活費なども、この老人がいつも持参してくる。

「刃傷でございます。お屋敷で刃傷……お殿さまが……」

と、言ったきり、声が涸れて、のめりこむように、式台に倒れた。驚いたたま代が、お葉に水を持ってくるように言い、老人を救け起してからも、まだ、胸をあえがせていた。よほど、息せききって駈けつけてきたのであろう。

幼ない眼にも、異変が起ったことはしれた。

〝刃傷〟

という言葉の意味はわからなかったが、その老人の狼狽ぶりと、真摯な表情は、母娘にとっても大事であることを物語っていた。

それにしては、母は落着いていたと思う。予期するものがあったのか、蒼ざめてはいたが、取乱すふうはなかった。

「それで、殿さまは……如何遊ばしましたか」

語尾には、ふるえがあったのは否めない。

「どなたさまを討たれたのでございましょう」

「いや、そうではない」

斬られたのだと聞いて、一瞬、母の姿がぐらりと揺れた。

「母さま」

お葉の手から湯呑みが落ちて板敷きを転った。お葉が駈けよると、母は顔を振った。

「大丈夫です。早く、お水を」

お葉はもう一度、新しい湯呑みに水を汲んでこなければならなかった。

そのあとのことは、よく憶えていない。ただ、空腹が音を立てて、お葉は食膳をちらりと見た——

事件が起ったのは、山下門のうちにある池田備中守長幸の屋敷であった。

その日、午前から、池田家の一族に御親戚すじが集っていた。朝のうち小雨が降った。まだ庭の八重桜はいくらか花を残していて、小雨に打たれる姿には、風情があったし、当主長幸には叔父に当る河内守長政と、その妹婿の山崎左馬允家盛が静かに語らっている姿からは、血で血を洗う一族の惨劇の起る気配などはまるきり感じられなかった。

ただし、この二人はすでに年配でもあり、こんどの討議の核心から離れていたからといえるかもしれない。

長政はむかし豊太閤に仕えて一万石を領した男だが、のちに長兄の三左衛門輝政に仕えた。このとき、池田の実家は輝政から三代目の新太郎光政で、長政は国詰めだったが、特に請われて出府してきたのである。

わざわざ老体を備前岡山から招かねばならなかったのは、分家である備中守長幸が旧臘以来の病いが重くなり、世嗣問題で揉めていたからであった。

長幸は輝政の長子長吉の子である。長吉もまた豊太閤の養子となって羽柴と称したことがあるくらいで、長幸も若年のころには、大坂陣天満口で首三十級を得たという、武功を称されて備中松山城、六万五千石を食み、福島正則の改易のときは備後の国の支城をうけとりに軍勢を率いていったほどだが、まだ壮年にして病いを得、今日明日にも危ないといわれていた。

徳川幕府の大是では、代替りには予め家督を定め、認可をうけねばならぬ。

お届けを出して、老中評定あって将軍にお目見得することによって、封を継ぐのである。このころには末期養子も許さぬほど厳しくなっていた。

長幸には男子が六人ある。常識からすれば、嗣子に迷うことはない。

長幸が迷ったのは、長子長常とうまがあわないというか、これを嫌っていたことだ。その嫌った理由は後述する。長幸が寵愛したのは次男の三之助長純である。

三之助長純は二十一歳。長常は二十四歳。年齢的に見ても、親族としては、長常への家督を望んでいる。

すでに大坂陣のとき五歳にして二代将軍秀忠に見え、従五位下出雲守に叙任している。これは多分に天下分け目の戦さを前にしての政略的なものがあったかもしれないが、とにかく、長幸の後継者たることは決っていたようなものだ。

「長幼の序ということもあるしの」

大方の意見はそこにあった。秀忠だけではなく、三代家光からも御小鎧金の梨打の御兜を下賜され、更に御弓及び、御弓立靱を拝受している。六年前には、家光が京へ参内したとき供奉もしているし、何ら家督するに支障はない。

長幸には弟が四人いるが、三弟下総守長政、四弟豊後守長頼が、その意見に固執した。次弟の主水長貞は、家老の森寺政右衛門忠勝の養子になっていたし、末弟の長賢は年少でもあり、意見を述べる立場にはなかった。長幼の序ということが、現代では考えられないくらい、絶対視されていた時代である。

すでにおのれの死期が迫ったのを悟った長幸は、親族会議を開くに先立ち、長頼に差し控えを命じた。長常も居室におしこめた。

評定の席に、脇坂主水正安信と同苗佐渡守安経も参会したのは、三之助長純の正室が、安信の娘だったからである。表向きは伯父の淡路守安元の女として輿入れしている。佐渡守安経は安元の父安治の五男だが安元の嗣子になっている。したがって、脇坂家の名代としてきていたし、安信は、その付添の名目である。

むろん、脇坂家からこの二人が乗り込んできていたのは、かれらにとっては婿がわの三之助長純の応援のためであり、また長幸の意志でもあった。

「恐れながら東照神君のお訓しもある。長幼の序を守るこそ、御家安泰の道と存ずるが」

わずかに河内守長政がそう言うだけで、他の者は遠慮がちにその言葉に追随するだけだった。

「出雲（長常）はその器ではない」

苦しい息の下から、長幸は一言で否定した。座が沈黙すると、

「佐渡どのの考えを聞きたい」

と目をむけた。

佐渡守安経の意見はすでに決っていた。意見ではなく、長幸の意志を代弁することだった。事前に打ち合わせは済んでいたのである。

「六万五千石のうち、出雲殿へは三万石を賜わり、残りを三之助殿松山城の守りとして賜わる」

その言葉はそのまま、三之助長純をして家督させるものであった。

「不承の者ありや」

長幸は死期の迫った目をぎらりと一同にむけた。

威圧である。強引に、おのれの意志に従わせようとする主君に、河内守が悲壮な決意で口をきった。

「不承とは申しませぬが、われらには、さほど御器量に於て優劣の差があるやにも思われませぬ。また、長幼の序を覆せば理由を糺されましょう。それが分明ならざれば、公儀の御下問にも答弁に窮しましょうぞ」

長政の言葉に、長幸は怒りを発したように叫んだ。

「猿めが！」

その一声は血を吐くかと思われた。

猿――

一座は沈黙した。

渾名(あだな)でも蔑称でもない。それは正しく、長常の童名にほかならなかったのである。むろん、その〝猿〟という名は長幸が憎しみをこめて命名したものだった。

長幸が大声を発したことで、急にいのちの火が消えたように、がっくりと枕に頭をつけると、医師たちは顔色を失って、傍へいざりよった。

その騒ぎに、主水正安信が、もっともらしい顔で頷いた。

「これ以上、評定を紛糾させては、おからだに悪い、かように定めて、明日にでもお届けを」

早々に決定させてしまおうとした。それまで、無言で扇子をつかっていた人が、ぽつりと言った。

「詮方(せんかた)あるまいな」

長幸には従兄（輝政の六男）にあたるが、若い右近太夫輝興だ。長純とおつかつの若さであるが播州赤穂で三万五千石。家康の娘督姫を母に持つ大名だ。こうして、ことは決定したのである。

事態を重視した豊後守長頼は自邸で、腹心の者に、様子を窺わせていたが、仔細を聞くと、かっとなって刀を摑み、

「馬ひけ」

と、怒鳴った。

長頼の身分は旗本である。御書院番に列して采邑三千石。従五位下豊後守だ。長幸の弟には違いないが、将軍家旗本としての身分がある。発言を封じられることも本来、踏みつけた仕打ちだ。耐忍の緒は、そのとき切れた。

栗毛をかって池田邸へ乗りつけた長頼は、

「評定の場へ罷り通る」

と、大音声に叫んで走り込んだ。

家臣たちは驚いた。大名屋敷の玄関には常に取次の者が控えている。殊に、御親族方が集まっているのだ。お供の者たちで、玄関先は埋まっているし、奥の方もごったがえしている。その混乱の中を、長頼は、裃姿で駈け込んだのである。

「御待ち下され、慮外でござりましょう」

取次の者が、袴の裾をとらえようとしたが、

「邪魔ひろぐな」

と、蹴返した。

長頼は三十を僅かに出た壮年である。身のたけもすぐれている。二、三の者がやはり前に坐りこんで、片手をあげたが、これも肩を蹴って進んだ。

「うぬら、阻めば斬り捨てるぞ」

長頼の血気は知らぬ者はない。家臣たちも、まさか抜刀までするとは思わなかったのだ。

長頼は評定の席へ駈けこむと、
「御家を乗っ取る不所存者は、何れにやある」
割れ鐘声で呼ばわった。
すでに評定は終っている。長政など、長常を推す人々や中立派の者は、居辛くなって、廊下へ出たり、別室で茶を喫すべく、退出していたのである。
勝利を愉しむ人々が、談笑しているところだった。この決定は、はじめから三之助長純の仕組んだものではない。二十一歳の次男坊は、周囲の願望の中心になっただけにすぎない。
長幸の愛は、長常を憎しと思う心の反動にすぎなかったし、その意をむかえようとする人々が、アンチ長常の空気を煮つめていっただけのことである。むろん、脇坂家のほうは、多分に功利的だった。
次男坊に娘をやったつもりが、六万五千石の後とりになれば、これにすぎる喜びはない。因に、脇坂の方は五万五千石である。
三之助長純にしてみれば、兄を差しおいて自分が家督することに、多少のうしろめたさがあった。
が、こういうふうに、周囲が動いてくれれば、悪い気はしない。
(父上の気持を尊重するこそ孝養)
と、都合のいい考えかたになる。
血相変えて躍りこんできた長頼にはさすがに怯ッとなったが、

「叔父上か」
と、笑顔でむかえようとした。
が、激昂した長頼の怒りを和らげる力は持たなかった。
「三之助、思いしれ！」
長頼は抜刀している。
突然の兇気！　と人々は見た。大名の上屋敷である。まさかそこまでするとは誰も思わなかった。一瞬、胆をつぶして、殆ど、虚脱したかに見えた。
初太刀が長押に切りこまなかったら坐したままの長純は真向唐竹割りにされていたであろう。がっと刀は長押で音を立てた。
逆上していた。屋敷の中での斬りあいには二尺五寸五分もの業物は不自由である。伝志津三郎兼氏の名刀だった。
三之助長純は仰天した。脇差を抜くどころではない。坐ったまま転った。立ち上った。が、膝がふるえて、よろめき倒れ、そのまま、這いずるようにして、逃げた。
「待てい！　待たぬか。さ、三之助、卑怯！」
兄を差しおいて、家を乗っ取る不埒者のくせに、卑怯未練な振舞、と罵りたかったのであろう。
やっと立ち上って走ろうとしたのへ、二ノ太刀が振りおろされていた。
逆袈裟であった。しゃあっと、小紋の肩衣を裂いた。げえっと濁った声を放って、のけぞる。

たまらずに前へのめって、とんとんとたたらを踏んだ。その背に鮮烈な血が噴きあふれた。

「刃傷だ、刃傷だ」

「出合え、豊後守さま御乱心」

わっと人々は立ち上り、口々に叫んで、肩衣をはね、刀の柄に手をかけたが、さすがに場所柄を考えて、すぐには抜刀できぬ。

長純は血まみれになりながら、なお、抜きあわせる気はなく、女のような悲鳴をあげて逃げた。襖から畳も柱も血が飛び凄惨そのものになった。磨きあげた奥座敷である。誰もこうした修羅場になるとは予測もつかぬ。

あとから考えると、なぜ、長純が抜き合わさなかったのか、それが解せぬと、人々は噂した。当時は大名でも、後世によく見られるような、おひらの長芋のような若さまという感じはない。父も祖父も戦場を駆けめぐった人々である。こうした場合には、一人の侍として闘うのが当然であった。

「待てい、卑怯であろうぞ、三之助」

長頼は血を見て一層狂ったようになり、追いすがった。

同座の人々は周章狼狽、とり押えようというよりは、本能的な保身で、逃げるのに精一杯だった。さすがに脇坂佐渡守安経は、

「豊後どの、鎮まりめされ、場所柄をお考えなされ」

と、声たかく叱咤した。

「黙れ佐渡！」

長頼の〝発狂〟は信じ難い。狂人に刃物というくらいで、見境いがないはずである。が、この場合、はっきりと、長純を斬っているし、中立もしくは長常擁立派には手出しをしていない。止めようとする脇坂安経は、もっとも憎むべき元凶と見えた。

「うぬらが当家をかきまわすか」

血刀を翻えした。

安経にしてみれば、まさか、こちらに火が飛んでくるとは思わなかったのである。

あわてて、刀を抜こうとした。が、鯉口三寸抜かせずに、長頼の血刀は、右腕を切り落している。

絶叫を噴いて佐渡守のからだは、独楽をまわすようにくるくるとまわった。さらに二ノ太刀が、胴を横に払っている。

この騒ぎの中で、即死したのは、この佐渡守安経だけである。安元の嗣となっていたから、こういう不慮の事故がなければ、脇坂五万五千石を継げるはずだった。

その安経の断末魔の姿を、兄の主水正安信は、庭越しに目撃している。

丁度、この騒ぎが起ったとき、主水正安信は小用に行っていた。用を済ませて出てきたとき、刃傷という声を聞いたのである。まさか差し控えを命じられている長頼が飛びこんで来ようとは思いもしなかったことである。

数人の侍たちが逃げようとして廊下から転げ落ちたり、真蒼になって空部屋に飛びこんだり

している。

「何といたしたぞ、刃傷は誰じゃ」

泡を喰って、ものも言い得ない者たちをかきわけて走ってきたとき、どっと、血まみれた男が書院から転り出た。

「佐渡！」

愕然とした。次の瞬間、返り血を精悍な顔に浴びた長頼の顔が見えた。怨みをこめて三ノ太刀をふりかぶったのへ、

「豊後！　狼藉！」

右の肩衣はねのけざまに、安信は抜刀した。

「うぬ、主水正、うぬも！」

長頼は安経を捨てて、斬り込んでいった。

必殺の一撃を、安信は受けとめている。まだ大坂の合戦から二十年と経っていない。大名と雖も刀法を実際に必要としていたし、実際に使っている。罪人の生胴を斬るくらいのことは、身分のある者もよくやっている。

安経は戦場を知らぬが安信は甚九郎といった幼少から関ヶ原合戦にも家康に供奉したし、従五位下主水正に叙任したのちも大坂両度の戦いに出陣している。人を斬った経験こそないが、度胸はできている。返り血に彩られて凄絶な長頼の顔も血刀も、他の者ほど恐怖には感じなかった。

それよりも目の前で実の弟を斬られた怒りが、

「理不尽なことを」

と、怒りを大きくしていた。

長頼はこのときはもう、逆上気味であった。不思議に一創だに負っていないのは、いかに、人々が狼狽恐怖するばかりで、刃合わせして、阻止しようとしなかったかがわかる。

だが、すでに息切れがしていた。二、三合、打ち合ううちに、身を翻えした安信に追いうちかけたと思ったとき、血刀が手からすっぽり抜けた。

上手の手から水が洩れるというか、一瞬の隙である。安信は、それを見逃した。やはり、安逸が斬人剣の呼吸を忘れさせていたのであろう。

長頼は刀を拾いとるや身を転じた。階段を見て駈けのぼった。二階は望楼を兼ねている。明暦の大火以後、市中の大名屋敷では、二階作りを禁じられるようになり、僅かに塗籠の土蔵くらいにしか許されなくなる。火ノ見櫓はあったが、書院造りの屋敷に二階はない。

この寛永九年のころまでは、規制が殆どなく、したがって、二階造りの大名屋敷も所々にあった。

長頼はこの二階に駈けのぼった。

「かえせ」

安信は追った。斬れる、と思った。追いすがって駈けあがる。背後からの一刀、ふいに長頼が振りむきざまに横へ払った。鏘然たる音とともに白刃は、はね飛んでいる。

頭上から拝み討ちの刃を辛うじて避けた。落した刀が手すりに突き刺さっていたのを、とろうとして身をひねった。そこへ、ぴゅっと落ちてきた。肩先へ入っている。安信は水月の辺まで割られたような衝撃で、わあっ、と悲鳴をあげて、のけぞった。

だだっと階段に凄まじい音を立てて転落し気絶してしまった。

脇坂代々記という写本によると、長頼ともに傷を負い、取り組んで柔取りし互いにおとす、とある。締めあって双方気を失ったというのだが、これは信じ難い。

大猷院殿御実紀には〝長頼は少しの薄手も負わず〟とあるし、〝安信疵を蒙りてこれも逃出る〟また寛政重修諸家譜の方では、〝安信これを見て声をかけ追て楼にのぼり刃を接ふといへども、終に創をかうぶり、階より落ちて気絶し〟とある。

安経斬死、安信と長純は重傷を負ったのだ。

この修羅場を展開した張本人の長頼の方はまるきり軽傷も負わなかったのである。

お葉は父の死目にはとうとう逢えなかった。弥兵衛がなんとか一目、と配慮してくれたが、事件が事件だけに殺気だった家中の眼をくぐりぬけることは難かしかったのである。

三之助長純という名も、お葉はもの心つくようになってから聞いたように思う。

それまでは、母も弥兵衛も、若殿さま又は〝若さま〟というだけだった。

「実のお子なのにのう」

弥兵衛は、涙ぐみさえして、お葉を抱きあげ、頬ずりした。

母のたま代は、はじめから覚悟していたようである。

「よろしいのです、若さまには、可愛がって頂きましたから」

蒼ざめた顔に淡い笑いさえ浮べて、弥兵衛の苦慮を打ち消すのだった。

たま代が若き日の三之助の戯れから、お葉を妊ってしまい、屋敷を退ったのは、五年前のことである。

備中松山城の城下の面打ち師の娘に生れたたま代は、妊った身で実家に帰ることもできなかった。

父は一徹者だったし、母は継母でうまがあわなかった。美貌のゆえに召出されての奥奉公ではあったが、そうした家庭の事情も、たま代を出府させる要因になったようだ。

三之助長純の正室になるのは無理としても、側室としての地位と、お葉を妾腹として認知することは、常態である。

三之助がそれをしなかったのは、かれの立場が微妙なものがあったからだ。

父の長幸が、長兄を嫌い、自分を世嗣ぎにする意志があることを知っていた。三之助擁立派の家老たちにしてみれば、たま代の懐妊は、

「もってのほかの御浅慮」

であり、

「六万五千石をお棄てなさる所存か」

と詰め寄ったのも当然だった。

長常を排斥して長純を立てるのは、常識を破って無理を通すことになる。
そのためには、一分の非もあってはならなかった。
名流脇坂家の娘を正室に迎えたのも、長常の妻が、堀丹後守直寄の娘であるのに拮抗するためであった。堀丹後は十万石である。格からいえば脇坂家は比肩すべくもない。その不足分を補うためにも、長純は父の寵愛に間隙を作ってはならないのだった。
たま代とお葉の身にその皺寄せが来ている。
いずれ、長純の代になれば、側室として、また長女として母娘を披露する。それまでの辛抱だと、納得させていたのである。
思いがけない結果になって、母娘の前途は暗澹たるものになった。
「こういうことになるのだったら、せめて、暮しの方でも」
もっと裕福にするよう、お手許金を過分に渡すべきだったと弥兵衛は悔んだ。
ただの病死か何かだったら、話のもってゆきようはある。
長純が死んだからといって、御落胤だといっても、無意味だった。情勢は一変したのである。
長幸の死期が迫っているのだ。早々に、後嗣ぎのお届けをしなければならなかった。
長幸の意志に反し、長常が後嗣ぎに決った。
こうなると、長純の死は、まるきり叛逆者扱いになる。不逞の謀みによって、お家乗っ取りを策した張本人ということになる。それが、父長幸の偏愛による意志から出たことでも、罪は長純にかぶさってくる。世間というものは、簡単にそう見てしまうのだ。

幕府というものの存在が、またそれを要求する。
長幸は東照神君はじめ三代に仕えた忠誠の士であり、池田家の繁栄のためにも、長純ひとりが策謀を逞しくしたということに話は歪曲されるのだ。
刃傷のあった日から四日目、四月七日に、長幸は無念を残して卒した。享年四十六。蔭涼宗樹承国院と号される。
長頼は長常の居所にひき籠ったが、台命によって切腹と決った。
事件はただちに幕府に届けられ、検証の役人が来て、佐渡守の斬死が兇行の裏づけとなった。
「豊後守の申す所、理ありと雖も、衆人疵を蒙り、佐渡守安経命を損するにより、自裁の事」
とあって、中一日おいて六日、切腹を命じられたのである。
もとより、長頼は覚悟の上であった。
「謹しんでお受け仕る」
悪びれる色もなく死の座に就いた。
長頼に付添っていたのは、書院番能勢小十郎頼隆、惣右衛門頼之、市十郎頼永、山口左平太光正の四人である。
長頼の面目は、身に一創も帯びなかったことである。かれは無銘相州物の短刀をとると、すっと、腿に一すじ引いて、
「なかなかの切れ味でござる」

暫く、刃に見入っている。心残りの色を見た。山口左平太が、すっとにじり寄るようにして囁いた。

「出雲（長常）どの御家督の由」

その一言で充分であった。

長頼の死は、これで意味があったことになる。にこりとして、刃に奉書紙を巻いた。

2

慎ましい暮しのうちから、たま代は少しずつ貯めていた。万一の際を慮ったというよりは、そういう性質だったのだ。三之助の側室になるという野心もなかった。お葉を妊らなかったら、そのまま姿を消していただろう。

この若殿への執着もなければ、愛を感じたこともない。ただ、若殿の戯れを、強く拒めなかった結果というにすぎない。

お葉のために、たま代は運命に従ったのだ。もしも長純が世嗣となって、お葉が長女としての待遇を受けても、たま代は側室になる気はなかった。お葉の行末さえ保証されたら、備中へ帰り、静かに余生をおくったにちがいない。

大名家というものは非情である。長純派だった人々も、出雲守長常が家督するや、掌をかえしたように、韜晦しはじめた。

長純派はむろん、親しくしていた者も、こぞって長常の正当性をたたえるか、そこまで豹変

できぬ者は口を噤んだ。

その空気の中で、弥兵衛や二、三の長純の御側にあった者も、たま代母娘のことを公けにする勇気を失くしていったのは当然かもしれない。

正室までが、長純の死後、脇坂家へ戻っていったのだ。

安信一族は悲惨だった。安経は兄安元の養子だったから、斬られ損でも、すぐに脇坂家がどうなるということはない。まだ淡路守安元は壮健だった。

ほかに子がないが、安信、安経のほかに弟が四人いる。いずれこの中から、養子にするだろう。安信はみじめだった。なまじ、即死しなかっただけに、面目を失った。

「抜いたならば、なぜ斬らぬ」

淡路守は一言、口惜しげに言った。

現代から考えると、正当防衛を意味すると思われるのだが、士道の掟はきびしい。長頼にかすり傷も負わせ得ず、おのれが傷つき階下へ転落して肩の骨を脱すという恥をかいた。

帰邸するのに家臣たちに輿へ乗せてもらって辿りついている。

その醜態が、堀家の者の口から世上にひろまった。

長常の正室は前述したように堀丹後守直寄の長女である。評定の席には堀家からも次男の七郎五郎直時が陪席していたが、刃傷と知って、郎党を走らせた。

これほどの惨事を予測したわけではないが、万一を慮ったので直寄は足軽らに用意をさせていた。異変と知るや、ただちに三百余人に六尺棒を持たせて駆けつけ、騒ぎを鎮めた。

池田家は二分され、脇坂家の者も加わって、従者同志の斬り合いになりかけていたのである。安信はなまじ堂々と長頼と刃合せしたために、汚名を被てしまった。

長頼が切腹したのは六日。その翌日、安信に下命があった。

士道に悖る振舞ありしかば美濃の内にて一万石召上げらる、と。飛ばっちりである。安信は即日屋敷をひき払って淡路守の下屋敷へ移った。安信には甚九郎安英、山三郎安正、久三郎安長という三人の男子に女子一人がある。家臣たちに暇を出し、屈辱に身をふるわせながら、傷を養う身となった。

もう一人、そば杖喰った者がいる。

どうも大名家は複雑すぎて困るのだが、長幸の長女左恵の夫水野紀伊守成言がそれである。成言もその席にいた。かれはどちらにも加担していない。したがって、何もしていない。士道とは不思議な論理で支えられている。

「水野紀伊が居合わせたと？」

「で、豊後を斬ったか、いや、斬らざったのか」

「何もな。鯉口も斬らず、傍観していたと申す」

「まさか」

「いや、真実さ、ただ、見ていたという」

「馬鹿な、左様なことがあろうか、水野日向の伜だぞ」

水野日向守勝成は猛将として聞えている。戦場往来の喧嘩大名だ。いまは備後福山十万石の

大名だが、その青年期には諸国を放浪して槍の血が乾くひまもないといわれたほどである。その伜に対しては、世間で過剰な期待がある。無責任な期待だ。

「水野紀伊がその場に居合わして、乱妨をとり鎮められなんだのか」

「一体何をしていたのだ、紀伊ほどの者が」

「大方、鼻糞でも丸めていたかの」

「いや、剣にすぐれているとか、槍の名手とかいわれているのも、評判倒れではないか」

「親父どのの名声の陰にかくれて、実はとんだ臆病者かのう」

「腰抜けじゃ、あきれたものよ」

長純派にしてみれば、

（豊後どのを討ちとって下さればよかったのに）

と思うと、いまいましい。愚痴になるが、長常派に寝返ろうとしても、急にうまくいくはずもないから、雌伏するにしても、愚痴はとめどない。

「腰抜けなれば如何ともし難い」

「評判倒れの腰抜け侍」

「あれで五千石なら、イザリでも千石」

「水野日向の名までけがしたか」

成言の評がひろまった。

人間の評判というものは、得てしてそういうものである。なまじに剣の腕がたたえられてい

たがゆえに、反動的に悪評になる。

ほかにも多勢いたのだ。不運というしかない。

もっとも五千石といっても、父日向守の所領備後国安那郡のうちから、分知されていたので、役向は将軍家光の御側に仕えていて、従五位下紀伊守に叙任したのが元和六年であり、後小姓組の番頭、または御側衆となり、家光上洛のときも供奉の一人となっていて、御おぼえめでたい身だった。

全く傍杖というしかない。突然の不幸だった。長頼一人の刃傷が、これほど、親類一統に迷惑を及ぼすことになろうとは。もっとも泉下の長頼に言わせれば、三之助長純の増上慢と兄長幸の浅慮が原因というに違いない。

ともあれ、父日向守勝成や兄美作守勝俊からも叱責された。

「わが水野家の名を恥しめたぞ」

紀伊守成言は居たたまれなかった。剣の使い手としての自負は確かに持っていたのである。それだけに自ら、恥じた。かれは江戸から姿を消した。古書に曰く、

〝成言この騒動の座に有合ながら、手をむなしくせるをもて、遂に踪迹をかくし隠遁せしとぞ〟と。

隠遁したのはたま代母娘も同じだった。もっとも江戸に在っても、隠れ住んでいたにひとしい。

「備中へまいりましょうね、母の故郷なのですよ」

たま代は江戸を離れることに未練はなかった。

二度と江戸へは帰って来まい。帰りたいとも思わない。故郷へ帰りたい思いは、五年前からあったのだ。むしろ運命に一つの区切りがつけられたと思った。

お葉には生まれてはじめての旅であった。しかし、その記憶は殆ど、ない。

備中松山城は高梁川の上流、上房郡の南部にある。現在の高梁市である。ここの臥牛山山頂に城が築かれたのは鎌倉時代というが、この高梁の地名は、高橋というのが最初だったらしい。それが元弘のころ、松山に改められたという。むろん、これは城山の名をとったものであろう。

備中松山城の名が広く知られたのは、戦国末期、三村家親、元親父子がこの城に拠って備中一円から備前にまで勢力を伸ばし、果敢な戦いを展開したからである。殊に宇喜多直家と小早川隆景の大軍に攻められての籠城戦は戦史に名高い。

城山は五百メートルほどのものだが、するどく削ぎ立った山稜に細長く南北に延びていて、いかにも、戦国の山城の典型という感じである。現存する山城としても最も高い。

城下は平地にあった。平地といっても標高がすでに高いが、高梁川に臨み、東方を山に囲まれた静かなところだ。山下に御殿がある。

埃りっぽく関東のがさつな気風に汚された江戸から見ると、この山と川にはさまれた城下は別天地だった。

この川を遡れば出雲へ出る。出雲もそうだが、砂鉄が採れることで古くから、豪族の争いの

渦中に巻きこまれたという。川砂を掬って揺すると黒い砂鉄が残る。お葉はそれが面白くて、よく遊んだ。その砂鉄は刀の原料になると聞いても、踏鞴の構造と原理を理解するまでは、よくわからなかった。

母娘は故郷でもめぐまれなかった。襲封して政豊と改名した長常の世である。長純とのことは、隠しおおせるものではなかった。誰いうとなく、その噂がひろまると、故郷も居辛いものになった。

たま代にその気はなくても、世間ではそう思わない。野望があるものときめてかかるし、また、それなりに後押ししようという者もでてくる。

たまたま、そのころ、変事が起った。

城山は野猿が多いことでも知られているが、毎朝のように、猿が殺された。だけではない。猿の死骸を御殿の門前に遺棄したり、小橋のてすりにひっかけたりした。

下手人はわからない。が、御殿の前にそういうことをするのは、領主へ対する挑戦であり、嫌がらせであることは、明らかだった。

この池田家では、〝猿〟という語には、ひどく神経質になっている。出雲守長常の幼名が〝猿〟であることは前に述べた。

長幸が、おのれの長子にそのような幼名をつけたのは面白半分ではない。憎しみがある。長常の顔が、猿に似ていたからではない。

長常の母は忠政の女で、輿入れしてきたときから、長幸に馴染まなかった。慶長十三年であ

る。家康が征夷大将軍となって五年目で、臣僚の結束と大名の血縁をひろげてゆき対豊臣勢力の増殖に腐心していたときである。

長幸がかえりみないから、自然、仲はうとくなる。長幸は懐妊と出産に疑いの目をむけた。

「おれの子ではあるまい」

ずばりといった。乱世の気風がまだ濃い。歯に衣を着せぬ。忠政の娘もまた気が強い。

「貴方様のお子でなければ、誰の子だと仰せられるのでございます」

「その胸に問え」

「はい、この胸が申しております。あなたさまの御子だと」

「産んでみろ、大方、猿の子でもあろうわ」

当時、まだ父の備中守長吉の代で、城地は烏頭にあった。生れた子に〝猿〟をつけ、長幸はうとんじたのである。

その長幸の虐めかたが甚しかったために、室はとうとう折れた。人が変ったように、仕えるようになった。長幸はこの妻に数人の男女を生ませたほど、仲は良くなったのだが、最初の確執の証拠のような長常との仲は終生、和むことがなかった。長常の方で〝猿〟と命名された恨みを生涯、胸にきざんでいたからである。

こうした因縁があるだけに、猿の死骸ということは、政豊を嘲けるものであった。政豊を主に思わない考えの底には、次男長純の擁立派と無関係ではないものがある。いつの世でも、領主の政治に満足な者ばかりではない。不満分子は常にいる。嫌がらせもある。が、母娘には、

この一件は迷惑でしかなかった。

彼女たちが望んでいる静かな生活は、故郷でもめぐまれないとすると、どこへ行ったらいいのか。四年目の秋のことであった。このあたりは雪は少ないが、霧が深い。山上の城から見る霧の海は、周辺の山々へ峰が点在する小島に見える絶景であるが、その日の朝も、どんよりした空模様だった。

母娘たちが行ったのは高梁川を下ったところにある惣社ノ宮の門前町だった。

この惣社というのは奈良朝のころの備中国の合祀社である。国司が各々の神社に巡拝していた慣行をやめそれらの神社を綜合した社を作った。惣社の名はそこからでている。

ここはまた売薬の町としても有名だ。富山の方がよく知られているが、実は、富山の売薬は、ここから万代常閑という者が教えにいってひろまったものである。

翌年の春、たま代はこの町で脇坂安信と逢った。二人の間に面識はない。日陰の身だったたま代と、長純の正室の実父である。安信はあのときの傷がもとで、右腕が悪くなっていた。一度治癒したのだが、江戸にいつまでもとどまっていられない身が、やはり無理をしたからであろう。

一万石といえば、高身の旗下に毛の生えたくらいで、最低の大名だが、ともかく大名に違いない。その身が、浪々の身となったのである。長兄淡路守が健在である以上、生活に困るということはない。そのときの安信は、

「御宥免になるやもしれぬ」

と、希望を抱いていた。

安元は嗣とした安経の死によって、あらたに養子をもとめて、堀田勘左衛門正吉の次男正茂を得た。

左兵衛安利である。ところが、去年の春に十九歳の若さで病死してしまった。

よくよく脇坂家はついていない。が、一方安元は安信御宥免の運動を幕閣に働きかけていたから、

「主水正に陽がさすめぐり合わせかもしれぬ」

と、むしろ希望を持った。

その矢先に右腕が悪くなったのである。安信が備後福山に来ているときだった。水野日向守勝成は豪勇の大名である。佚紀伊守成言の、

「怯れた」

恥辱に比べ、安信が敢然と斬り結んで、傷ついたことを賞賛していた。

「泰平の世となって、人みな優柔不断、尚武の心を失いおった。主水正を罪するとは、理の通らぬ話ではないか」

日向守の豪毅さには、幕閣はときどき顰蹙している。すでに、世の中は変っている。乱世の条理は変えねばならぬ。治世には、治世の政治がある。智慧伊豆と呼ばれる老中伊豆守信綱などから見れば、日向守は、わからず屋の頑固者ということになる。

日向守は、浪々の安信を招いて、厚遇した。家来たちに、士道を奨励するためでもあった。

実子の不甲斐なさと対照的だった。

安信の傷の再発は、この福山滞在中に起ったのである。小田郡真備の山中に鬼ケ岳というところがある。温泉があって傷に効く。山陽道の矢掛の宿場から二里ばかり北へ入ったところだ。そこで暫く療養したが、はかばかしくない。惣社ノ宮の秘薬ならというので、やって来たのだった。

江戸で暮したたま代は、地味に作っていても垢ぬけしていたし、この町では目立った。安信の長男の甚九郎安英が目をとめた。甚九郎は二十三歳。母は高力土佐守の娘だったが、早くに歿っている。あるいはたま代に惹かれた気持には、母を恋う気持が作用していたのだろうか。

「美しいひとだ、この町の方ですか」

薬屋［奇妙洞］の店先だった。番頭はちらりと見て、

「お目が早い」と、うすら笑いをした、「松山からお出になって、左様、四か月ばかりになりますか」

たま代は毎朝、惣社ノ宮へお詣りにゆく。お葉の成長を祈りにゆくのだ。甚九郎は故意にその時間を選んだ。たま代はいつも、お葉を連れていた。

子持ちと知っても、甚九郎の気持は変らなかった。後家なら、浪人の身にこだわるものはない。

「いつもお目にかかりますな」

会釈を交すようになって三日目、思いきって甚九郎は声をかけた。

お葉の方では、二度目くらいから、無邪気に笑いかけるようになっていたのである。

たま代にしても、朝の爽涼の気に満ちた境内での逢瀬に、

（感じのいい御浪人）

と、思いはじめていた。控え目な気質が、それを表面には出さなかっただけで甚九郎の面影はいつかたま代の胸にかげろうのように淡く揺曳していた。

甚九郎に話しかけられたとき、たま代は嬉しく思いながらも、やはり憚かるものがあった。何に対して憚かるのだろうか。後家の身では誰にも拘束されることはない。お葉も好意を持っている。

それにも関わらず、

（いけない、親しくなってはいけないのだ）

そう叫ぶものが胸の一隅にあった。

自らを責めて、蔭にいようとする気持には、この爽やかな若者と親しくなることの、女心のおそれを自覚しているからだった。好きで後家を通しているのではない。三之助に抱かれたことの悔恨は、お葉と、そして自分の生涯を支配する運命の残忍さへの呪いとすらなっている。

この若者に好意を抱いたら、さらに、狂って来よう。故郷の松山城下ですら、波風が立つ運命なのだ。ただ平穏無事を望んで逃れてきたこの町で、また、何を起そうというのだろう。

「お住居は近いのですか、私の宿は……」

と、話しかけてくる甚九郎から、たま代は目をそむけた。

「急ぎます、御免下さいまし」

お葉の手を引いて逃げるように立ち去った。

そんな母の気持など、八歳のお葉にはわからない。

「どうしたの、母さま」

なじるような娘の目を見ると、たま代は、かっとなった。何も知らない子供へ怒りをむけることはない。が、お葉があの若者に好意を持っていることがわかるだけに、かえってたま代の胸はひき裂かれるような悲しみに顫えた。

「お黙り！　あの方とは、口を利いてはなりませぬ」

いつにない母の荒い声に、お葉はびくっとして言葉を失った。それから、その顔がゆがんで、みるみる双眸に涙が盛り上ってきた。いまにも泣きだしそうになりながら、精一杯悼えている。その涙は、たま代の胸にこみあげ、必死に押えられたものを、誘いださずにはいなかった。

「堪忍しておくれ、お葉、いいの、いいの」

ひき寄せて抱きしめると、どっと堰を切ったように、熱い涙があふれ出た。たま代は声を放って泣いた。お葉も、泣いた。お葉には、母の思いの深いところがわかるはずもない。が、相擁して涙する歎きの刻は、女だけに通じる哀しみを理屈ではなしに感じたようである。そのときの情景は、お葉の胸に甘く悲しい記憶として残った。

あとにも先にも、たま代の滂沱たる流涕の姿を見たのは、そのとき一度だけだった。

運命は非情で、残酷である。たま代が逢いたくない思い、男を避けようとする気持は、しかし、本心ではない。熟れた二十六歳の肌は〝男〟に焦がれている。たま代はまだ恋をしたことはない。男を愛したことはない。長純という男を知っているだけに、恋への憧れは、一層切ないものがあった。

甚九郎の出現は、あまりにも、女の年輪に合致していたのではないか。若者のみずみずしい姿に傾斜する女心は、それを阻むことでさらに燃え、たま代ははじめて、自らを慰めることを知った。

だが、その思いの強さは、それくらいで霽れるものではない。惣社詣りの時間をずらした。が、甚九郎は待っていた。その次には、早くいった。が、それも三日目には、暗いうちから、甚九郎は来ていた。前の晩から来て見張っていたのであろう、楼門の下で、甚九郎は眠ってしまっていた。

暁闇の中で甚九郎の眠り顔を見たとき、たま代はぎゅっと抱きしめてやりたい思いにかられた。

（これほどまでも……）

こんなに思われて、尚、どうして避けねばならないのか。熟れた肌は若者の強い腕をもとめている。たま代の惣社詣では、その日限りとなった。激しく惹かれる気持が、自分を逼塞させずには居られなかったのだ。

せまい町である。たま代の家は、奇妙洞の番頭ばかりでなく、知っている者も多い。

「あのお侍さん、露地口にいたよ」

お葉から聞いたとき、たま代は、もう、この惣社もひき払わねばならないと思った。

そう思ったとき、実行するべきだったろう。その支度に手間どっているうちに、事態は別の方向へそれている。甚九郎の父が主水正安信と知ったならば、この血ぬられた関係を複雑にしないためにも、取るものも取り敢えず逃避していたに違いない。運命の神は意地悪である。たま代の軌道にはすでに縦横に交叉線が敷かれていた。

奇妙洞の秘薬が効を奏したのか、安信が回復に近づいたのは三月はじめ吉備路の桜が陽春を謳うかのように咲きはじめてからである。安信は散策することが多くなった。江戸からの便りも、閣僚たちへの運動の成果が報じてあり、近い将来に吉左右が齎されるであろうとのことであった。

そうしたことも、かれの回復を早めた理由の一つであろう。安信は散策の途中で、お葉を見た。

社家町の裏店だった。たま代は山城の伏見にゆくつもりだった。浪人した弥兵衛が伝手を頼って伏見の旅籠で帳付けになっている。武士が主家を失って転職するのは難かしい。プライドが邪魔するし、使う方も使い難い。よほどの決心がなければ出来ないことである。

弥兵衛は老齢だし、余生を過すために割り切ったのであろう。弥兵衛なら、たま代母娘の生きる道を見つけてくれるはずだった。

「似ている」

と言い、安信はお葉に近よった。お葉は驚いて露地へ駈けこんでいった。たま代は車井戸で水を汲んでいた。

「そなたの御子か」

安信は、また凝っとお葉を見た。

「他人の空似というには、似すぎているの」

「――どなたさまでございましょう」

「いや……」安信は口ごもった。

「わしの娘婿じゃが、不慮のことあって果てたが……よう似ている。ふむ」

そう言われて、はじめてたま代は胸に疑惑が湧いた。

瓜実型の顔かたち、眼の涼やかなところ、唇の小さなところ、眉毛も似ている。お葉の眉はほそくて長い一文字眉で、男の子なればさぞ凛々しい若殿になろうものを、などと弥兵衛も言ったほどだ。

したがって、お葉の顔は、眉毛だけは男にしてもいいほどだが、そのためにかえって、甘さが失われ、血すじの良さを感じさせる。

その日安信は名乗らなかった。他日あらためて、と礼を失せぬ態度で、その場は立ち去った。

翌日、安信は季節の物を持ってふたたび訪れている。四月朔日であった。三之助長純の由縁の者だという噂は、近所の青物屋の口軽な女から洩れた。

「そうであったか、そういう者がいるとは聞いていたが」

奇しき因縁であった。たま代とお葉という名も知った。世にあれば正室と側室である。子を生していたのだけ、たま代のほうが正室よりも由縁は深い。何よりも、いまの零落した境遇が、同病相憐れむ心情で、安信を喜ばせた。

「脇坂じゃ、主水正安信の名は、そなたも耳の隅になりと残っていよう。奇遇じゃ、かようなところで逢うとは」

たま代の狼狽と困惑は、安信には理解できない性質のものであった。たま代はすでに旅支度を整えていた。家を出るばかりになっていたのである。

お葉の誕生日は三日後だった。四年前のあの日から、世の中が変った。お葉の生活も変った。どうして誕生日の祝には波風が立つのか。伏見へ着いて、お祝いしましょうね、と母は言った。この惣社ではなぜいけないのか。そのいけない理由は、あの若い侍のせいだと思うが、いまあらわれた初老の侍の言葉が、一層、母を困惑させたのを知った。

「逢わなかったことにして下さいまし、いまの私どもは、池田家に何の関わりもございませぬ」

たま代は、耳をふさぎたい思いだった。

忘れようとし、忘れたつもりの過去を、また甦えらせたとしても、わずらわしい人間関係が何を齎すというのだろう。

「お帰りになって。私どものことはお忘れになって下さいまし。それに、これから旅に出るのですから」

安信には、手きびしい拒絶に聞えた。たま代母娘の四年間がどのようなものであったか、その理解は出来ても、その以前の四年間については、安信の理解の外であろう。

「待ちなさい、万更、無縁というのではないのだ。もう少し、うちとけて貰えぬものか」

「お宥しを。もう出かけないと……」

たま代は身もだえした。安信がたま代の風情に惹かれるものがあったのは事実である。気を張りつめてはいても、心細い寡婦の弱々しさが、哀れをそそった。

「たま代どのか」

安信は彼女の顫える肩を抱き、家の中へひきかえさせようとした。嫋々たる女のからだは、頼るものをもとめれば、崩れるかもしれない。

そのとき、お葉ははげしい叫びを聞いた。

「父上、何をなさる」

それがあの若い武士だと知ったお葉は、思わず息を呑んだ。

血相変え、刀の柄に手をかけた甚九郎だった。思いをかけたたま代の家で、父が馴れ馴れしく、からだに手までかけている。若さがかっと血を逆流させた。口をきくのさえ拒まれた哀しみと怒りが、言いようのない憎悪となって、爆発したのである。確かに、そのとき、甚九郎は錯乱したといえる。純情は、時に狂気に最も近い。

凄まじい白刃の光りは、一瞬、何が起ったのかわからなかった。

母の悲鳴と、初老の侍の怒気を含んだ叫びと——さすがに安信である。一太刀浴びながらも抜き合わしている。本能的な戦国武士の動作である。ただ、伜を斬る気が起らなかった。そのひるみが、隙となった。甚九郎の怒りの刃は、安信を袈裟がけに斬り下げていた。

3

父とたま代を目睹するまで、甚九郎は常と変らない。抜刀したとき、一時的に錯乱した。血が、かれを狂わした。おのれの刀が父をよろめかしたとき、これまでの忿懣が一度に噴きあげたのである。

安信が世間のもの笑いにされたとき、子の屈辱は、生涯拭えぬものとなった。尊敬してきた父の惨落は多感な若者の心を傷つけている。十九歳から二十三歳の希望の年齢を、碁九郎は世間に背をむけ父の看病と逃避の旅に過したのである。その深い傷痕が、一度に堰を切った激情となって、父へ白刃を叩きつけさせた。

狂刃——まさしく、甚九郎は狂った。倒れた父のからだへ、二度、三度、四度、さながら、魔性の物を微塵にきざむかのように狂い太刀を叩きつけた。血が霧となって噴き、肉が千切れ飛び、骨が音を立てて砕け、甚九郎は返り血を舐めながら哄笑した。

悲劇というには、あまりにも凄惨である。

たま代の腕にしっかり抱きしめられて、お葉は、呆然とその血の祭りを見守っていた。

やはり、一刻も早くこの土地を離れるべきだったのであろうか、数日後に山城の伏見に移ってから、たま代母娘には、漸く静かな生活が齎された。

弥兵衛が奔走して、船着きの宿屋に働くところを見つけてくれた。この時代に女の働き場所はきわめて少ない。容色を売らないとすると、あとは水仕のような下廻りの仕事しかなかった。世が世なら六万五千石のお部屋様と姫君である。運命の苛酷さは、苦難を強いた。が、いまのたま代には、静かでありさえすれば、それ以上の欲はない。もともとお屋敷に奉公にあがったときも玉の輿を夢見たわけではなかった。

その伏見の暮しが五年ばかり経って、たま代は、秋も深まったある日池田家が改易になったことを聞いた。伏見の宿は京へ上り下りの旅人が諸国の噂を運んでくる。淀川を上下する船待ちの客の世間話は、それなりに心の慰さめになった。

肉親が血で血を洗う抗争の末にやっと手に入れた六万五千石の家であったが、出雲守政豊に子はなく、三十三歳という若さで急病死したために、改易になってしまったのだ。

三十そこそこで死ぬとは、政豊自身思ってもいなかったろう。以前から病弱ではあり、それも長子廃嫡の理論的根拠になっていたのだが、政豊は死の床にあって、末弟の喜助かその上の鍋千代を養子にして家督させんことを乞うたが、

「末期養子の儀、大法に違背す」

として、許されず、六万五千石は没収、一家は離散してしまったという。

こんなことなら、三之助長純が家督していた方がよかったということになる。その愚痴もあとの祭りだ。たま代は他人事のように微笑して言った。

「お大名といっても、人の世の運命はかないものでございますね」

家督といえば脇坂家では、安信の死により、血縁をあきらめて、他家から養子を貰った。池田家改易の一年前。佐倉の堀田加賀守正盛が二男安吉である。堀田正盛は権勢がある。それに正盛の室は酒井讃岐守忠勝。正盛は老中で、忠勝は大老。これほど強力な背景はない。安信、安経のことがあって、天下の権勢家と縁を結ぶ必要性を痛感したのであろう。脇坂家の社稷は確かに安泰となった。安吉はのちの中将少輔安政である。

脇坂家の墓は、二代安治が開基した京の妙心寺の塔頭の隣花院にある。初代安明、安治が葬られているが、安信もここに埋められた。

「かようなことは頼めた義理ではないが、一度でよい、回向して下さらぬか」

隣花院の浄水という僧が来て、青い頭を下げたのは、それから間もなくのことだった。

浄水は安信、安経の末弟である。安清という名だったが、度重なる兄たちの不幸に、出家して墓守りを志したのである。

たま代は拒む言葉がなかった。あれから六年の歳月が流れ、たま代も三十路の坂を越していた。

たま代はそのことを告げて暇を貰い、京の妙心寺に詣でている。安信については哀れと思うだけである。ただ狂死したと伝えられる甚九郎に就いてはもっと感情は複雑だった。

あのとき甚九郎の想いを受け入れていたならどうなったろう。運命は変っていたろうか。

人間の欲望は、時と所によって、思いがけないかたちで、作用するものだ。隣花院でたま代は甚九郎を見た。甚九郎ではなかった。末弟の久三郎安長だった。

明るい陽が墓地を照らしていて青葉の匂いが濃かった。すでに初夏である。数年の間こんな遠くまで歩いたことがなかったし、洛中の風物がもの珍しく、疲れていた。たま代は、甚九郎の幻影を見たと思い、立ちくらみした。眼の中で白い光りが躍った。

「――大丈夫ですか」

気がついたとき、たま代は若者に抱きかかえられていた。それが久三郎安長だった。顔をのぞきこんで微笑している。健康な若さには性の匂いがある。心配そうにのぞきこんでいる切れ長の眼を見たとき、たま代の胸ははげしく顫えた。その眸に吸いこまれてゆく自分を感じていた。たま代は、いつかしっかりと、久三郎の腕をつかみ、唇を喘がせていた。三十路を越したばかりの女の肌は、十年間の寡婦の切なさが全身に漲り、若者の胸に何かを訴えかけていたのだった。

お葉は、母を失った。京へ行ったたま代は、そのまま伏見へ戻って来なかった。久三郎安長が送っていったはずだと、浄水は沈鬱な顔で言った。その夜、お葉は初潮を見た。

お葉の青春が世間の女のそれとかなり違っていたのは、幼少時に受けた衝撃の強さを物語るものかもしれない。

「脇坂久三郎安長……その名前、忘れませぬ」

浄水の前で、お葉は涙一滴こぼさなかった。母が戻るかもしれないという期待は持たなかっ

た。根拠のない期待や希望は、痛恨をより深くするだけだということを、お葉は知っていた。日蔭の道を歩いてきた年輪が、いやでも、絶望の底にしか救いがないことを教えてくれている。

お葉は笑いを失った。十四歳からおおよそ十年の間、花を開かせることなく、灰色の青春をおくっている。

冷たい美貌は、多くの男たちの目を惹かずにはいなかった。恋心を燃やした男も多い。行動に出ようとした男も尠くない。が、お葉にとって、男とは、憎しみの対象でしかなかった。

年齢に関わりなく、お葉は男を受け入れようとしなかった。どんな好意も、賛辞も、彼女には、ただ男の身勝手な興味と好奇心がさせる言動でしかないと、嘲けった。

「なあに、あない顔しとっても、隠し男があるのや」

宿屋の主はしたり顔に言った。

「時々、京に行くやろ、墓詣りたら言いよってねやけど、何しとるか、わからへん」

一度、男衆にあとを跟けさせたが、深草のあたりで見失ったという。少くとも妙心寺にはいっていない。

お葉の〝男〟というのは、まるきり当っていないこともない。が、少くとも、その時点では、お葉にその気は片鱗もなかった。

深草の里に、竹藪に囲まれて一庵がある。住まう者は数年前に、何れからか来て、庵を建てた。近在の者も素姓を知らぬ。ただ鄙びた里のわびた暮しだが、暮しに困らない。農家の者が米麦や野菜を持ってゆくと過分に鳥目をくれる。

大坂与力の引込浪人であろう、と噂した。その孤独の暮しのわりに内懐が裕福なのに目をつけた盗人が、三人で夜陰に忍んだことがある。翌朝、三人は数町はなれた孟宗の竹林の中で、めいめい削ぎ竹に串刺しになって果てていた。

三人がその庵に目をつけたことは、馬喰などが耳にしていたので、役人が庵を訪れたが、

「存ぜぬな。昨夜はぐっすりと睡っておりましてな」

と、言って、取り合わなかった。三人が踏みこみ、闘った跡もないので、役人は引下るしかなかったが、ほかに心当りもなければ、恐ろしい手練れの者よ、名ある兵法者の隠れ棲む姿であろう、と近在では噂した。

傲りも高ぶりもせぬ。日ごろは、書を読み、あるいは日向で、うとうと居眠りしているか、時には、せまいところに何やら植えて土いじりを愉しんでいることもある。全く、世を捨てた人の暮しであった。

お葉が来たときだけ、庵の裏手の空地で、木刀を持って立つ。

「女子（おなご）の身で剣をふるうとは、尋常の心構えではならぬ。わしを打ち殺す気で、かかってまいれ」

そう言いながら、この男の木刀は、お葉の木刀にもそのからだにも触れぬ。影のように、右へ左へ躱し、時に、地面を叩く。お葉は必死にそれを避けて飛んだ。飛びつつ、片手振りに木刀をかれの頭上や肩先に振りおろした。

誰にも知られることなく、お葉が剣を習ったのは、もとより目的があったからだ。そしてそ

の汗にまみれ剣技を究めることで、若い肉体の想念をふり切ることが出来た。

「打て、師と思うな、令声坊と思うな、仇と思え、打たねば、おのれが斬られると思うて打ち込め」

令声坊。その名の由来は知らぬ。が、この男こそ、水野紀伊守成言のなれの果てだったのである。遁世したかれは、諸国を漂泊したのち、この深草に来て、終の棲家とした。お葉を知ったのは偶然ではない。かれの妻、即ち三之助長純の妹左恵が、成言の出奔以来、探し探しして伏見に宿り、お葉と逢ったのだ。長純に似ているということは、また彼女にも似ていた。

結局、左恵は成言の傍にいることを許されず、兄の長信（御書院番に召出されて千石）の采地（備中国後月郡）に帰っていったのだが、意識的ではないまでも、二人の橋渡しをしたことになる。

執念があるとはいえ、女の腕である。奉公の寸暇をぬすんでのことで、紀伊守成言が満足できるところまでの上達は、容易ではなかった。

十年間、両者の木刀は音を発するところまでいっていない。つまり、素手にひとしい成言を十年間、お葉は打ち込めなかったのだ。

たま代と久三郎の行方が知れたのは、さらに歳月が経てからである。浄水は死に望んで二人の行方を隠していた非を詫びた。

お葉がからだをひらいたのは、深草の最後の夜である。

「お力を賜わりませ、所詮、女子の腕に兵法は身につきませなんだ。でも……」

成言のおとこを得れば、力になる。秘剣の会得は体技心三者の偶然たる呵吽の気にある。お葉は、成言の大きなからだに抱かれ、四月の月が沈んでゆくのを眺めていた。

もっと、もっと、と。男女の交りの意味するところを知りたかった。夜の白々あけに、快感に似たものが、下半身を戦慄させ、お葉は、死にたくない、と思った。その思いは、お葉にとってはじめてだった。死はいつも、隣りに坐っていた。孤独に耐えられたのはいつ死んでも惜しいいのちではないと思っていたからだ。

炎暑の街道をお葉は近江国へ向った。

大溝というところに分部の陣屋がある。政豊の次女が分部伊賀守嘉治の室になっている。分部は二万石。大溝城は乱世には度々戦火に見舞われたが、京極氏以後、分部光信が入ると、城の三の丸に陣屋を設けた。大手前一帯を家臣の屋敷とし、廓内の町屋は北、中、南と分けて、小ぢんまりとした陣屋城下を形成していた。

久三郎とたま代はここに住んでいたのである。だが、お葉はどこまで不運なのであろう、彼女が着いたときは、すでに二人の姿はなかった。子供が二人出来ていたという。東北に旅立ったあとということだった。

（子供まで――二人も）

それほどの仲だったのか。お葉は、夜具に顔を埋めて泣いた。彼女は涙の中で、奇しくも母が久三郎と姿を消した年齢に自分が達していることを知った。成言の肌を恋しいと思い、さらにお葉は泣いた。

「湯殿の用意が整いました。お入り下さいましょう。織部どのが昔語りしたいと仰せられて」

織部というのは、幼名鍋千代、長重である。京師に流浪していたが、先ごろから、この分部家の食客となっていた。頼ってこられると親類だから伊賀守も突き放すわけにはいかなかったのだろう。だが、たった二万石では、そうそう召抱える余裕はない。

お葉は誰にも逢わずに帰りたかった。が、長重にしてみれば、お葉は可愛い姪になる。流浪の身には、そうした思いはひとしお、強いものだ。その思いが、かれを無遠慮にした。酒も手伝った。

乱酔気味の織部長重は、待ち兼ねたように、ふいに湯殿に入ってきたのである。着衣のままだった。

「そなたか、わしが姪どのは、ははは、なるほど、亡き兄者そっくりだのう」

姪といっても、年齢はそれほど離れていない。五つか六つであろう。

「織部さま、後ほど御挨拶仕りまする、何とぞ、後ほど」

「なに、羞ずかしいことはない。叔父と姪、なに兄妹のようなものだわさ」

そのあとのことは、悪夢としか言いようがなかった。伊賀守が飛んできて制止しようとしたのを、長重は抜き討ちに斬った。伊賀は抜き合わしたが、簀ノ子にすべって、逃れた。お葉は裸身のまま、その刀を拾って長重を斬り下げていたのである。

悪夢——夢ならば醒めてほしい。血の匂いと、足元で呻きもがいている男を呆然と見下して

いるお葉の胸に、遠い昔、幼ないあの日、弥兵衛が駈けこんできたときのことが甦っている。あのときから運命は狂っていたのだ。

お葉の濡れた肌を蒼い月が照らした。湯気ぬきの格子窓から、月がのぞいている。万治元年七月九日の寝苦しい夜のことである。

蟹眼の大事

1

その男は編笠をかぶっていた。肩幅が広く丈が高いことを憶えている。色の褪せた小袖に裾もほころびていたし、錆朱の海鼠鞘も塗りがところばち剝げていた。

記憶はそのくらいである。お留以は、まだ幼かった。五歳の春だった。

夕刻で茜が水に光っていた。利根川の渡しである。幸い往来はもう絶えていて、今日は早仕舞いにするべ、と父の民蔵は棹を洗って上ろうとした。そこへ、牢人者が来たのである。その男は北の方から来た。

「船を出せ」

さびの利いた声で牢人者は言った。

へえ生憎ですがねえ、もう仕舞ったんで、と民蔵は答えた。嬶アが工合が悪いんで、帰らなきゃならねえんで、とも言った。嘘ではない。お留以が民蔵を呼びに来ていたのだ。走って来て、まだお留以は、ハアハア息をついていた。

「よいから、出せ。おれも急ぐ」

「あっしも急ぎで」

むっとして民蔵は言った。人は善いが、気は荒いほうだ。街道の渡し舟の船頭は、気が弱くてはつとまらない。旅人は雑多だから三文五文の舟賃を踏み倒す奴もいる。

「いやか」

だめを押すような言葉とともに、抜き討った。

残照を反映して、一瞬、光が走った。民蔵は棹を担いで止ろうとしていたところだ。殆ど悲鳴もなかった。驚愕の方が大きかったのだろう。水から上げられた死顔も、眼を剝いて、口を半開きにしたままだった。恐怖や苦痛を感じるひまもない。手練だ。左の肩から袈裟掛けに、水月まで断ち割られていた。

よろめいた民蔵から棹を奪ると、身軽く牢人者は舟に乗り移っている。血を吸ったはずの刀は瞬後に鞘に収っていたのである。何が起ったかもわからぬように、呆然と佇んだ少女に一瞥もくれず、舟はゆらりと岸辺を離れた。

空を灼いた茜が消えても、葦に戯れる川水は真っ赤な澱みを残して民蔵を包んでいた。

お留以はそのとき、泣くことを忘れた。遠ざかる小舟と、背の高い牢人者の後ろ姿を凝っと見つめていただけである。

松林という名は、あとで村人から聞いた。街道すじの村で土蔵が荒されて、警戒の網にかかったとき名乗ったというのである。信州松代の松林某。民蔵の一件がなかったら、誰も翌日まで記憶していなかったろう。松代の松林という語呂が字を知らぬ村人にも憶えさせたし、幼

いお留以にも、憶え易かった。聞いたとき、お留以は岡の松を思い浮べた。

「人を斬ったことはあるが、盗みはせぬぞ」

松林某はそう言って、肩を聳かし、村人たちを威したという。

「眼がぎょろっとしてたべ、頬骨が突き出てよ、うん、鷲の嘴みていに骨張った鼻つきでよ、おら、一目で悪だと思っただ」

村人たちは思いだして、言った。大体、人相は合っている。頬から顎にかけて刀傷があったようだと一人が言った。それは知らないという者が多かった。定かではない。右か左かもあいまいだった。

「じゃけんど、どっちにしても、人相は」

険悪だったという点で、一致した。あの背格好と、その人相は永く、お留以の胸に灼きついた。歳月は古傷をうすれさせるが、そのたびに、お留以は爪でひっ掻くように、恨みを新たにした。黄色く濁ったぎょろ眼の鷲鼻、頬骨、こういう特徴は長顔に多い。編笠の下から洩れていた顎のあたり、角ばっていたようであった。えらの張ったその顔かたちが、いつかお留以には、目のあたり見たもののように胸でくりかえし描かれた。

不幸が重なるほど、人は怨念を倍加させるものだ。

あの夜、母親も死んだ。弱っていたところに民蔵の横死である。衝撃は心臓に急激な負担をかけた。

五歳の少女を、名主は引き取って育ててくれた。はじめは誰でも同情する。いたいけな少女

の不幸に涙せぬ者はない。が、お留以の方は涙を忘れた。父の変死に涙腺が凋んで癒着したか、涸れきったように、長じても涙を見せることがなかった。

可愛い盛りの少女のうちから、人間への不信感を抱いた少女は、しだいにその容貌を冷たく冴えたものにしていった。

あどけなさが消え、大人の顔を読む。探るような眼は、心の内まで見透されるようで、

「可愛気のない子じゃ」

と、村人たちは月日の経過とともに、お留以を疎外するようになっていった。

笑いを忘れ、涙を涸らした少女は、大人もそうだが若者たちもからかえない。

「無理もないわい、両親を殺されてはの」

名主次郎作だけは、憐れみをかけた。民蔵の死を最初に発見しただけに、印象が鮮明だった。お留以は泣きもせず、ぼんやり草むらに突っ立っていた。その眼から幼児のあの無心な輝きが失せていた。そして、野辺送りの、墓のある岡の斜面で見た光景も、忘れ難い。

お留以は、父母の土饅頭が作られてゆくのに背を向けて、木に向かって何か投げていた。楓の木である。蛇が這いのぼっていた。一尺ほどの小蛇。くねくねと青い背を光らしてのぼってゆくのにむかって、そこらの小石や木の枝などを投げていた。

名主次郎作が愕いたのは、お留以の表情がかわいたものだったことである。

幼児にも、喜怒哀楽はある。お留以が蛇へ向って礫打ちをしているさまは、戯れでもなく、蛇への怒りでも憎しみでもなかった。

ただ、そこにあるもの、生きものへ、ものを投げる。投げつけることが目的であった。その目的が五歳の幼女を動かしている原因を思って、愕然としたのである。

お留以のそれが、無心でなかったことは、それからも、何度も、見た。

あるときは、猫に投げていた。鶏に投げていた。雀には殊に多かった。農家のことで、土蔵の前に広場がとってある。蓆をひろげて、籾が干してある。雀がよく飛んでくる。追っても追っても飛んでくる。

お留以は、雀を目がけて小石を投げる。飽きないのだ。河原から小石を沢山拾ってきて、桶に入れていた。

「変った子だ」

と、人々は、驚いたり呆れたりした。

「大きくなると、何になるじゃろ、石合戦で女大将になる気かのう」

そう眉をしかめる者もいたが、お留以はきらわれ者ではなかった。口数少なく、言いつけられたことはする。容姿はいいのに、控え目なので、目立たない。だから、女たちには、評判はよかった。

裁縫もおぼえるのが早かった。黙って、針を動かしている姿には、温和しい、いい娘じゃ、と、誰にでも思われた。

ただ、何を考えているのか、それだけは誰にもわかりかねたのである。

時代は漸く泰平に入っている。徳川幕府も将軍は三代目で、世間は治世を喜び、窮屈ではあ

るがその安定の中でささやかな倖せを摑もうとしていた。

引込み牢人などで、いわゆる寺子屋など、私塾をひらいて、生活の資とする者もいた。村といっても、この利根川べりは、将軍家お膝元に近い、だけに比較的早く、子女の教育に目がひらいている。

この関東平野は肥沃でよほどの天災がなければ、東北や寒冷地にありがちな、極貧というのは少ない。お留以はほかの少女や少年たちと、そうした塾へ通った。お習字にも意外な上達を見せたし読本でも男の子に負けなかった。

十二、三歳のころから、お留以は、竹を削って、するどく尖らした竹串を投げることをはじめた。

背戸に一丁ほどつづいた竹藪があり、いくらでもとれる。五寸ほどに切った竹を割って削る。重みをつけるために節を頭にして一方を尖らせる。

何本も削って、これで雀を打った。まるで雀に恨みでもあるように、投げる。野道を歩くときでも、懐中にしていた。片手に束ねて持っていたり、帯の間にはさんで、一本ずつ抜いては投げた。

村では、そうしたお留以の手裡剣狂いは知らぬものはない。

「女だてらにの」

「狂うているのじゃわ」

嘲りで眺めていた村人たちも、その手裡剣がかなりの正確さで飛ぶのに、笑いを消していっ

た。

世間というものは異端に対して、嘲けるか怖れるかである。笑うどころではないとなると、今度は、

「狐憑きだんべ」

ということになる。

「近寄るでねいぞ。どうも変じゃと思うとったが」

指弾する者の中に見知らぬ武士が多かったのはお留以に言い寄って効がなかったからだ。

礫打ちや手裡剣打ちが、あるいは胸部の発育に幸いしたのであろうか、お留以の胸は十四のとき、すでにみごとな成熟を見せていた。

乱世の余燼が燻っている時代である。女の婚姻は早い。十三や十四で嫁にゆくのも珍しくはない。時代の風潮にそぐわない者は、いつの世でも嫌われるものだ。

お留以には、若い男の憧れや、戯れ心を受け入れる余裕はない。心はかわいていた。

色の恋のという気持は、彼女には無縁のものだったのである。

（お父っつァんとおっ母さんの仇を討たねば）

ひたすら、そのことだけを思った。

刀や槍は重い。繊手にはあやつれない。

やや長じてからの決心だったら、小太刀や薙刀を学んだかもしれない。お留以の決心が、五歳という幼さが、手裡剣を望ませた。おそらく、手裡剣という言葉さえ知らなかったろう。

あの楓の小蛇を打ち落とすように、手のとどかぬ者へは、ものを投げ仕止めるしかないことを、幼心に感じたのであろう。あるいは、あの仇が棹をあやつって去ってゆく姿に、痛感したのかもしれない。水の上を追うことは難いが、空間ならものを投げて仕止めることができる。

その、幼い知慧が、彼女を我流で練習させたにちがいなかった。

色も恋も無縁のお留以だったが、男は知った。十五歳の春、沈丁花が悩ましく甘酸っぱい香をふり撒くころ男のためにからだをひらいた。

2

好きだったわけではない。その男はただ、ワザが優れていた。旅の武士である。まだ三十前と見えた。

そのとき、大銀杏の幹に笠を掛けて、お留以は竹串の手裡剣を打っていた。その男が疎林の中の小径を通ったのは、近くの神社に詣でたのかもしれない。

武士は足をとめた。そのことは眼の隅に感じたのである。が、気にかけずに、打っていた。気にかけない心算が、やはり虚心になれなかった。

十本のうち二本しか刺さらぬ。

「娘だてらに、鮮かだの」

武士は言い、歩きだそうとした。これは賞賛ではなかったのである。

「お待ち下さいまし」

だが、足は止めなかった。歩きながら、さっと手をあげた。キラリ、光るものが飛んだ。お留以は目を疑った。

その光るものは、竹串の頭に吸いこまれるように突き刺さっている。

無造作な一打ちが、さながら、糸を引いたように、その小さな点に突き刺さっているのである。

武士は片頬を歪めた。笑ったようである。

そのままゆき過ぎようとした。お留以はわれ知らず走り寄っている。

「待って！」

これほど積極的に人に話しかけたことが、あったろうか。お留以は追いすがって、男の小袖をつかんでいた。

「お教え下さいまし、お名前を、お名前を」

「おれの？　聞いてなんとする」

「手裡剣打ちを、お教え頂きたいのでございます」

そうか、と、笑った。片頬が笑った。

つかつかと戻ってきた。男のからだから、動物的な匂いがした。発情したときの牡馬のさかんな体臭であった。かれは大小を鞘ごとぬいて草の上に置くと、的笠をふりかえった。

「娘だな？」

「――はい」

「娘のままでいては、上達は望めまい」

あっと思った。お留以は次の瞬間に、荒々しく抱きすくめられていた。

あまりにも唐突で、思いがけないことだった。手裡剣打ちしか念頭になかったお留以には、そうした男の情欲への予備知識がまるきりなかったのだ。

白昼だったし、人目のない林の中とはいえ、こうした手荒な行為に出るとは。お留以が抗ったのは最初のうちだけである。

男の手が荒々しく裾に入ってくると、もう、抵抗をやめた。

男のけものじみた行動に応えるというより、抵抗する、何の意味も持ち合わさなかった。

この男が、それを望み、自分がその男のワザを必要としているという現実が、お留以のからだをひらかせた。

そのときまでは感じなかったことなのだが、男の硬いものが、からだの中央に奔馬のように闖入してきたとき、

（あ、とうとう……）

と、思った。

これまで、処女を大事に守ってきたわけではない。ただ、わずらわしさを避けてきたに過ぎない。

その男女の行為も、お留以にとっては、あるいは三度の食事くらいの意味しかない。男がはげしく動き、唇を貪るのに耐えながら、これでいいのだ、どうせあたしは、まともにお嫁にゆ

く身ではないのだから、と自分に言い聞かしていた……。

男はけもののような唸り声をあげたあと、虚ろな眼になった。その間はどれくらいのものだったろうか。はっと醒めたようになり、手早く始末してから「――女になった」と言った。かれが身を起したあとも、お留以は、なぜかけだるい重みを下半身に感じて、起きあがれないのだった。

「拭ったらどうだ」

男は手拭いをそこへ投げた。

「見ずに拭ったほうがいい、はじめは恐いものらしい」

「恐い？」

「血がな」

白い内腿に叩きつけたような鮮血が見えた。疼くような痛みも残っていたが、お留以には、後悔も、恐怖も不安もなかった。

「教えて下さいまし、手裡剣打ちのワザを」

「おれは、人に教えるほどのことはない」

男は立ち上っていた。

「もはや、そなたは女になったのだ。しかるべき兵法者につけば、伸びよう」

「……」

「赤山村に松林蝙也斎どのがいる。行って教えを乞え」

「松林……」

「おれの名は進藤勘四郎。左様に申すがよい」

勘四郎はそのまま立去った。

松林という名を聞いたのは、十年ぶりのことだった。お留以は呆然となった。なんという皮肉な廻り合わせであろう。

あの凄まじい居合い斬りに繊手で打ち勝つには、手裡剣しかないと思いこんで、十年を費して習いおぼえたのも、これでは水泡に帰したも同然だった。

及びもつかないほど巧みな勘四郎、その師匠が、あの仇敵とは。

松林という姓だけで、仇敵だと思いこんだのはいささか軽率だったかもしれない。が、そう多い姓ではなかったし、（あの男も、北の方から来た……）のだ。まだ、眼に残っている父を斬った手練は、常の腕前とは思えなかった。剣客として名の通った男に相違なかったのだ。

お留以は泣いた。はじめて泣いた。春草には陽の温もりがあり、蒸れたようなあの匂いを放っていた。その匂いの中に浸って、溺れてしまいたいような誘惑を感じていた。

そのことが、彼女を甦えらせたといってよい。

「松林蝙也斎……でも男なのだから」

あたしは女だ、と、お留以は思った。

男という者は、あれほどの手練を持っていても、女の肉体を抱くと、ああも他愛なくなるものか。

勘四郎が放ち果てたときの、あのもろい姿を思いだすと、お留以は自信に似たものが、四肢に漲ってくるのをおぼえた。

手裡剣のワザではない。女としての自信だった。本質的に、男より女が勁いといわれる生命力であろうか。お留以はふいに、からだの奥にうごめくものを知った。

武州赤山村はいまの埼玉県北足立郡神根村のうちである。鳩ヶ谷町の北方だ。

ここを領しているのは七千石の旗本伊奈半十郎忠治。父は三河の出で家康に仕え、備前守一万石。関八州の貢税を掌り、農民はその温情に喜悦せざるはなかったという。関東郡代を継いだ嫡男忠政は元和四年に壮年で歿り、仲忠時も年余で歿し、以後関東郡代は空席となっているが、忠治は代官らの治政を監する立場にあって、実質的には関東郡代を兼ねたようなものであった。

この伊奈半十郎忠治、寛永二十年十二月に布衣を許されているが、兵法好きで、先ごろ召抱えた兵法者を蝙也斎松林左馬助永吉という。信州松代の産である。一説に常州鹿島の人ともいう。幼時より兵法に専心し、長じるに及び、四方に志を求め、天下を周遊し、蘊奥之秘を探り、遂に変化之妙に至り、自ら願立と号して一家を立てた。

江戸藩邸に住むのを嫌い、赤山村に一庵を立て、乞う者あれば、こころよく入門を許した。が、観ること三月、素質なきはこれを破門して、悔いなかった。

「――女の身でか」

と、蝙也斎はかぶりを振った。

「是非ともお許しを」

「ならぬ」

「――女子と思召さずに」

蝙也斎はふりかえって、思わずにはおれぬ、女子にちがいあるまい、と言った。

言っただけではなく、肘をのばし胸から手をさし入れたという。通常なら、強いことを言っても、女は拒むか、羞恥に身を竦める。

お留以にはそれがなかった。蝙也斎の大きな手が、乳房を鷲づかみにしたのにも、騒ぐ気色もなく、為すにまかせたという。

眼を閉じ、凝っと観念の体が、蝙也斎には小憎いものに見えた。お留以の冷たく冴えた美貌は、他の弟子たちの心をも迷わしむるものである。

「女子であることを捨つるか」

「はい」

迷いもなく、打てば響くような応えであった。

「ならば、この乳房、とるか」

「――如何ようにも」

「申したな」

蝙也斎は、脇差を抜き放った。それでもお留以は動じない。両手を膝に置いて、うなじをそ

らし、眼を閉じていた。

当時の女小袖は、腰のあたりで細帯を結ぶのである。後世のように幅広く、且つ胸高に締めるようなことはない。自然、胸はゆるやかであり、容易にひらく。乳房のかたちも、したがって中期以降の風俗による圧迫の歪みなどない。その若さと健やかさを誇るように、つんと上向いて突き出ているのだった。

雪白の胸肌が、独身の蝙也斎にはまぶしいほどだった。

もともと蝙也斎は、兵法者たるもの、一芸一代、すなわち妻子を持つの要なし、と言い、独身を通している。おそらく、女嫌いなのではあるまい。乳房を鷲づかみにした掌が、ある種のおののきを伝えていたのである。

蝙也斎の荒々しい態度は、美貌に動かされまいとする虚勢ではなかったろうか。

「――心底見とどけた」

ややあって、ふかい吐息とともに言い、蝙也斎は脇差をおさめた。

その鍔鳴りを聞くと、お留以は静かに息をひらいた。

大きくはだけた襟から、豊かな双の乳房をあらわにしたまま、

「入門お許し下さいますか」

「いま一つ、羞に耐えるならばじゃ」

「如何ようなことでも」

眼が輝いている。決意に負けまいとするように、脱げ、と蝙也斎は言った。

「――小袖を」

「身にまとうたもの、すべてじゃ」

蝙也斎は冗談を言っているのではなかった。

そのぎらぎらと油を流したようなぎょろ眼と、頬骨と鷲鼻は、お留以の胸にきざまれた仇敵とあまりにも酷似していた。背格好もそっくりだった。松林という姓も同じなのだ。疑う余地はなかった。

永年の辛苦が、いま霽れる！　お留以は、小袖を脱ぐことも、なんとも思わなかった。

だが、ただ裸にしただけではない。

「あれへ立て」

草庵の外に巨大な榎があり、表をつけない畳が立てかけてあった。当時、畳は後世ほど普及していない。大名でも旗本でも、屋敷の床は畳よりも栗色に磨いた板張が多かった。

弟子たちは七人いた。その眼に全裸を曝して立つのである。何が蝙也斎にこれを要求せしめたろう。

お留以は拒まなかった。

十五歳の輝くばかりの肌を惜しげもなく曝して、畳の前に立った。

「大の字になれ」

命令に唯々として、両腕両脚をひらいた。

若壮の弟子たちは、声もなくこの美しい肢体を見守っていた。蝙也斎の非情な命令に抗議す

るよりも、美しい入門者の裸身へ卑しい興味を抱いた者が殆どだった。

長い黒髪は腰まで垂れ、下腹部の茂みも蔽うものなく、人々の眼の前で微風にそよいでいた。

蝙也斎がこの非情な習練を弟子たちに強いたのは、ただにお留以の心をためすだけのものではなかったようである。

弟子たちは順番を決められ、手裡剣十本ずつを持って立った。距離は三間。三寸にして手の内に返して打つ。

三寸三間というのは手裡剣ワザの初歩の入門打ちともいうべきもので、むろん返し打ち（回転打ち）である。流儀それぞれによって秘伝があるが、この原則はひとしい。

弟子たちは緊張した。これまで、常に的はものいわぬ存在であった。いうまでもなく、小動物、飛ぶ鳥の類いを初歩にて打ち落とすことは難いから、こころみることもないが、初歩の大切は体の決りであり、動くものを狙うことは、体の決りを会得する以前において、揺らぎのままに打つ、即ち上達は遅く、妙手は得難し、とされている。

したがって、半歳、もしくはその進捗ぶりに於いて、一年の間、樹木や的板しか狙うのは許されない。それも、体の決りを一義として「空打ち」気合打ちともいう。赤手でもって、的を狙い、打ち込むのである。

体の決りから、気合とともに打ち込む、体は崩れ、手裡にある物は的へ刺さる。その呼吸を養う。熟練すれば、空にて、確実に、「命中」するを得る。

もとより、他人眼にはわからぬ。おのれの眼と心が、一点となって、それを得る。ここには

誤魔化しや、甘さはない。

この空打ちは上達早きも三か月、遅きは半歳に及ぶ。忍耐と努力を嫌う者は、この期間に於て破門される。これは、玉石のふるいをかける意味に於いても有効であった。

前述したように、その進捗はおのれよりわからぬ。心技一体にして、空間に虚影を放ち、命中を確認するところまでゆけば、師匠に告げる。

蝙也斎はこれによって、相対するのである。

「体を決めよ」

三間を隔てて向いあい、左掌に手裡剣十本を摑むの象。右手は虚である。空より抜き空より打つ。が、蝙也斎の心眼には、その虚影がありありと見えるのか。

「打て」

気合十度。打ち終って、弟子は常に淋漓たる汗を腋下や額に知る。左掌に汗を握りしめる者もある。

この十本を、蝙也斎が課するのが真の意味の入門の許しでもある。

「命中りしは一本、三番目のがそれじゃ。五本は、体も掠らぬ。最初の一は左肩、二は腕、三は命中せしもあとは外れたぞ。残り二本となって、はじめて、正に復したが、心ノ臓を外れること一寸、未だしじゃのう」

これが、しかし入門資格の限度であった。

したがって、お留以の裸身に向って真剣を握って立った七人は、いずれも、この段階を過ぎ

て来た者たちであった。

3

美女の裸身にもっとも近く、而して肌を傷つけぬ打ち方は、後世大道見世物の曲打ちに堕したが、その濫觴はこうした彼我の心神鍛錬にあった。大道芸人たる居抜きを嘲う前に、武辺に於ける居合抜きの必然的習練に思いを馳せねばならない。

美女を見て手、ふるえ、気、張って失敗するようなことがあっては兵法者としての資格はない。それがその者のワザと呼べるところまで熟練すれば、美醜近親の情で鈍ることはないはずである。

たんにお留以を七人の弟子の試験台にしたわけではない。むしろ真意は、その余にあった。即ち、お留以の心魂を試し、ひいては、七人の者をして、お留以への恋情を断たせる。それが狙いだった。

男ばかりの道場へ女が入れば、若壮の者に迷いが出る。あらゆる兵法修業が、忍耐と努力の賜物であることは自明の理だ。蝙也斎はその破壊を怖れた。

七人の者の手裡剣打ちが如何なる成果をあげたか個々を詳説する紙幅はない。いずれも、怖れが的をはずすこと多く、半ば以上が畳の外の草むらへ没したというにとどめよう。

「未熟者めらが」

この蝙也斎の一言は、そのワザを叱ったのではあるまい。美肌に目の眩んだ若さを口惜しく思ったのであろう。

さすがに、そう断じるだけの意志の強固さがこの兵法者にはあった。蝙也斎いまだ五十の坂を一つ越したばかりである。強健な体軀は贅肉の一片もとどめず、精悍の気に溢れている。

妻子を持たぬのは兵法究理の目的のためであり、老衰の態は窺えぬ。衆道の気の有無は、もとよりお留以の理解の外である。

その夜。お留以は蝙也斎の寝所に忍び入っている。

（かたき！）

父母のかたきを師とせんとしたのは、ただに隙を狙うためにすぎない。衆目に全裸を曝す恥辱も、生涯の目的の前には些事であった。

十五歳の肌を曝して、この機会を摑んだお留以が、失敗に備えて、裸身で侵入したのも、そのためだった。

万一の失敗がそのまま死へつながれば、父母の霊は永久に地上に迷うしかない。恥に耐えて、討ちとるまでは、生き延らえねばならなかった。死ぬことは許されない。

その第二段の用意までしていたというのも蝙也斎のワザが卓越しているからにほかならぬ。

伊達世臣家譜中願立流を継いだ上遠野氏の条に、〝営学二願立流刀術及手裡剣及居合及槍及長刀及棒及柔術於松林蝙也斎一、未レ及二極二其奥一〟うんぬんの記述がある。おそるべき兵法者といわねばならない。加えて、蝙也斎とは、蓋し飛跳に妙あるを以て、号したというに於ては、初潮を見ていくばくもない繊手の仕し得るはずもない。

深更、お留以の裸身は寝所に忍び入っている。

なまじ着物をまとうと、衣ずれの音がする。全裸に短刀を握っただけの姿には、そのおそれはない。そう思ったのはしかし、やはり幼稚な思案であった。

女気のない草庵の闇である。若い女体から発散する体臭は、さして熟練した者でなくとも、男なら敏感に察知する。それは眠りをさますほどのものであった。

草の褥の上で開花されたばかりのお留以の肌は、いうならば生涯でもっとも芳香の強い時であろう。仮眠の蜂や蝶が、その匂いに惹かれて眼ざめるように、蝙也斎は、妖艶の侵入者を知った。

お留以は、たしかに音はたてなかった。呼吸もころしていた。気配を悟られるはずはないと信じたのである。

短刀を蝙也斎の胸にふりおろしながら、なお無言だったのは、

「おやのかたき！」

と、叫ぶことすらも、蝙也斎の眠りを醒ますことを恐れたのである。

無言でふりおろす。尖先が胸にふれんとした刹那、がっしと下から手くびを摑まれていた。

「何をする」

闇の中で、冷静な蝙也斎の声がした。

「かような真似を……」

「……」

咄嗟に、嘘言はお留以の口にのぼらなかった。かたき！　と洩らさなかったのがせめてもである。

お留以は息をのみ、動揺をおさめて、万一の失敗のときにと用意の言葉を口にした。

「恥を……」

「なんと？」

「男衆の目に、恥を曝して、もはや生きておれませぬ。お師匠さま、一緒に死んで」

なおも力をこめる腕が痺れ、刃物はもぎとられていた。

「愚かを申す。ははは、やはり女子じゃのう」

蝙也斎は呵笑しつつ、お留以を抱いた。

それも計算のうちに入っていたのである。

お留以は恥じらいを見せた。初老の兵法者の大きく剛い手が、乳房をつかみ、肌をすべった。

その柔らかく掌にぴたりと吸いつくような感触を楽しんでいる。

男の手は、珍しいもののように彼女の全身をまさぐり、ところどころ、この起伏や、密毛の具合を確かめているようであった。

当然、そのあとには、くるところへくる。

ところが、蝙也斎の手は、愉しむだけ愉しみながら、それ以上の行為に出ようとしないのだった。

お留以は先日の若者の激しい、けものじみて飽くなき行為を思い出した。それだけでもう、

女体はしっとりと潤ってくるような気がした。

女心とはふしぎなものだ。あくまでも計算された行動であり、仇への憎しみがありながら、からだは燃えようとしている。男の手が、もっと大胆に、直接的な動きをすることをいつか望んでいるのだった。

お留以の若さと、その立場が、自分のほうから、積極的に出なかったが、どうするすべもなく、肌の奥から沸き起る情火があった。

ややあって、蝙也斎は、その手を退いた。

「行け」

「え？」

「もどって寝(やす)め」

呆然となった。このとき、お留以ははしたないことに、男のものに触れたい欲望を、疼(うず)くように感じている。そこまで、しかし出来なかったのが、若さであろう。

「あの……」

「女じゃな。男なら、誰もがこの肌にとびつこう」

「……」

「抱きたいと思おう。だが、そなたは、これから修業せねばならぬ。修業の明けた暁、そなたを抱く」

そして、それきり、蝙也斎は鼾(いびき)をたてはじめた。

狸寝入りかどうか、お留以はただひきさがるしかなかった。たとえ眠りこんでいたとしても、お留以は、それ以上、刃物をふるう気力を失くしていた。蝙也斎は彼女が思っていた以上の兵法者だったことである。

仇敵を師とする。

そのことの苦悩を、お留以は意識の上から払いのけようとした。意識することが、すでにワザの上達を阻(はば)む。ワザは師以上に上達して、はじめて当初の目的が成就するのである。

（できるかしら、あたしに……）

蝙也斎の偉大さは、今日よりは明日と感じさせられる。兵法者にして一流に秀でた者は多い。が、かれほど、武芸百般、会得している者は少ない。その人を敵と狙うことの不幸を、お留以は夜毎、疲れたからだを横たえて噛みしめる。

（かたきなのだ、お父っつぁんを斬った男）

お留以は思い出す。

あの茜(あかね)に灼けた夕方の利根川を。深編笠をかぶった男の後ろ姿を。父を斬ったときの痩軀(そうく)の動きと、棹をあやつって、川を渡っていった姿を。

（別人だろうか？）

別人とは思えなかった。別人なら、どれほど気が楽だろう。あまりにも似ていた。背格好ばかりでなく、その〝信州松代の松林〟と名乗ったことも。

そして、村人たちの証言による人相が合致していたことである。お留以の胸の中で描かれ、灼きつけられた相貌とも。

蝙也斎は伊奈半十郎に三百石で召抱えられるまで、諸国を遍歴している武者修業である。当然、村も通っている。

親しく過去を探ろうとしたが、なぜか、口をとざして語ろうとはしない。故郷のことも家族のことも。

ただ、明けても暮れても兵法、ことに手裡剣に終始した。寛永二十年、江戸草創期である。草深い武州赤山村の代官陣屋に隣した蝙也斎道場でお留以は女である身を忘れた歳月をおくった。

4

手裡剣打ちに直打ちと返し打ちとあることは前に書いた。直打ちは頭を持ち、剣先を敵に向けて打つ。頭上にかざして腕いっぱいの投げおろしは、必然的に短距離となる。一間半が限度である。むろん、これは、本人の背丈、腕の長さ、手くびの鍛錬にも関わる。

一間半直打ちを限度とするのは、常人の場合であり、上背すぐれて、六尺に垂んとする者にあっては、直打ち二間も難くはない。

小がらなお留以は一間半を出ない。むしろ返し打ちに主眼を置いた。

これは鍛錬によって、三間から四間五間と長距離に移行できる。いうまでもなく、手裡剣の

もとむるところは、距離と正確さである。

体を決めることを初歩とするならば〝崩れ打ち〟〝寝打ち〟〝走り打ち〟等々の変化打ちも会得しなければならぬ。

これら変化打ちの前二法は直打ちも含んでいる。譬えば、斬りこまれて、これを躱しながらに打つ。倒れて打つ。走り打ちは、走りながらに、彼我の距離を計る。

距離の目測が完璧でなければ、回転した剣先が目的の一点に所期の力で突き刺さらぬ。

「いかなる打ち方にあろうとも、剣が手裡より放たれる一瞬は、静止の状態にひとしいのじゃ」

息を止める。それは走りの途中にあっても同じである。時間的には呼吸も軀も乱れ揺れていても、放つ一瞬を静止し〝体の決り〟を得れば、目標を射るに不足はない。

その体の決りを、繰り返し習った。

右足を退き、左手を前に出す。同時に、右の掌にひそめた手裡剣が頭上に上る。この基本体型から、いわゆる手裡剣百法が派生する。

基本を蝙也斎が執拗に強いたのは、柔術の受け身にひとしく、また兵法（剣法）の青眼にひとしい。頭上から真っ直ぐ、ふりおろすとき、右足と、手と肘は一直線を描く、おのれの額、眉間、鼻柱から、咽喉、水月、臍、股間に至る線である。

お留以の入門するまでは、男の弟子に向って蝙也斎は口癖のように、

「おのれの睾丸を切る心得にて打て」

と、訓していた。

右足を前に出すとき、足、膝の線が垂直にして敵の中心にあらねばならぬ。手裡剣は距離長びくほど、威力の落ちる理である。したがって、〝蔽う物〟ある個所を狙うのは三間が限度とされている。五間以上の距離をとらざるを得ない場合、剝きだされた個所を狙う。

即ち、眉間、両眼（右を兎眼といい、左を烏眼という）、口、咽喉である。横手より、耳穴、もしくは頸動脈を狙うのも正しい。

ために、弟子同士で対峙する。相互に仮想敵としての、打ち方を習得する。この場合、初歩に反復練習した〝空打ち〟のやり方である。

上達すれば、おのれの〝虚剣〟が目標に入ったか外れたかがわかるようになる。

入門して三年目、蝙也斎は、自らのからだを的にして打たしめた。

「動かざる的では、真の打ちこみはなるまい。わしの軀を狙え」

蝙也斎はおのれを的にして、秘伝五法をこころみさせたのである。

五法とは、一に正、二に崩、三に寝、四に走、五に飛――この五型が基であれば、応用変化は自在になる。

（討てる！）

お留以は思った。

練習に名を借りての仇討ちが出来る。蝙也斎は初めの夜の寝込みを襲ったときも疑わなかったのである。いままた、自ら、的たらんとしている。

蝙也斎、もとより、お留以の腕前を過少に評価している。容易に鋭鋒を避け得るからである。よしや、避け得なかったとしても、おのれの老衰を悔むしかあるまい。

（この機会に討たねば）

蝙也斎と面とむかって対等の試合では勝てるはずがなかった。殺気を闇を透して感得する兵法者に勝つには、それが公然となし得る場でしかない。

もとより習練とはいっても、的を狙う場合の心気は、真剣である。殺気がなくては、意味をなさぬ。

「わしを敵と思え」

岡の赤壁を背にして、蝙也斎は傲然と言った。

「憎め、殺る気になれ、わしを殺るがほどに上達したなれば、師たる者死甲斐がある」

その軀へ向って手裡剣が飛んだ。三寸半の一方剣である。返し打ちに幸いな基部に重みを加えた鋭いものだ。

「眉間！　右眼、こんどは左！」

的の部分をはげしく叱咤して、蝙也斎はそれを受ける。

ただ避けるだけではない。お留以が放つ迄は的として静止し、放った直後に避けるのだ。これほど危険なことはなかった。が、蝙也斎にとっては、きわめて容易に見えた。

身軽く、柔軟に避ける。あたかも、百間の距離から飛来する矢を避けるよりも気楽に、確実であった。

（父母のかたき！）

その憎悪と怨恨をこめての一打ち一打ちが軽くいなされてゆく度に、怒りと哀しみがお留以の胸にこみあげてくる。

「ちくしょう！　ちくしょう！」

手元が狂った。

「殺気が足らぬ」

と、二十本を虚しく放ったあと、悄然となって崩折れたお留以に、この憎い敵は言った。

「まこと、憎しと思え。さなくば、工夫を凝らせ」

その一言が後に残った。

その夜、まんじりともせず、お留以は考えている。

蝙也斎の自信は大きい。当時、手裡剣術にあっては他に比類ない第一人者だ。この五年後に将軍家光の御前で妙技を台覧に供して、嘉賞され時服を賜ったほどである。

小娘の飛剣は蚊とんぼほどにも感じなかったであろう。

かれは、お留以の飛剣を避けるに、僅差の動きを示した。大きく動くも小さく動くも、命中しないということでは同じであるし、大きく動けばそれだけ、体力が消耗する。

顔を狙った場合でも三寸ほどしか、動かさない。打つ者も、拝見の相弟子らにも、髪や耳すれすれに、飛剣は流れたように見える。

これを逆用したら？　お留以はそこに思い至ったとき、息苦しいばかりの、喜びを感じた。

（討てる！）

蝙也斎の自信を、利用することだ。

「工夫ができました、お願い致します」

「ふむ」

ぎろりとあの眼が見た。これをお留以は恐れ気もなく見返した。心が決ったいま、恐れはなかった。弱い女が強豪を討つには、術を用いるしかない。

「よかろう、手には」

「一束でようございます」

手裡剣の一束は十本である。

再び対した。お留以の双眸は、漸く仇を討てる喜びで潤んでいる。彼女は心をひきしめ、あの利根川畔の茜の色を思いだそうとした。父母が死んだあとの孤独の歳月を思った。怒りと憎しみが、心を占めた。その敵は、五間のかなたに、傲然と立っていた。

「打て！」

敵は叱咤した。

「眉間！」

外れた。

「咽喉！」

外れた。

「右眼！」

待っていたのは、その言葉だった。刹那、お留以の手裡にある剣尖は、蝙也斎の左眼、を狙って放たれたのである。

右眼に飛来する剣を避けるのに、蝙也斎の顔は左へ三寸ずれる。その自信過剰が、お留以の狙いだった。左眼を狙えば、剣尖は右眼を貫ぬく。

このとき示した蝙也斎の狼狽と混乱を、お留以は忘れない。左へ避けかけて、ぱっと右へ顔を振った。放たれた瞬間に、お留以の真意が奈辺にあったのかを見抜いたのはさすがである。なまなかの者であったら、もろに手裡剣を受けていたろう。右眼か、眉間を貫ぬいていたろう。

「猪口才なことを」

避け得たのちも、動揺が、その喘ぎでわかった。見ている門人たちが、ざわと膝を起した。

蝙也斎は自嘲をあらわにして、

「まだ残っているぞ。打て。次は心ノ臓じゃ」

「はい」

「右胸でもよいぞ」

「……」

「瞞し打ちも、兵法じゃ」

手裡剣は怒りの音をひびかせて、飛んだ。一本、二本、三本——臍から陰部を狙ったのを避けて、蝙也斎は跳んだ。これほどの跳躍を嘗つて見たことはない。

号するが如く、蝙也斎は蝙蝠の如く、あざやかに舞った。

（勝てない、どうしても、勝てない……）

お留以は、両手で面を蔽い、よろよろと崩れた。

「あざやかであったな、お留以」

意外にも、蝙也斎は褒めた。

「一気五剣……会得したな」

「……」

「だが、それだけでは、足るまい。あと一年はげめ。すりゃ、そなたの望みも達せよう」

そのときは、打ちのめされていただけに、深い意味を感じずに、聞いた言葉である。

が、あとから、それが気になった。望み、と、言った。お留以の目的を知っているのであろうか？

一年の歳月は、またたく間にすぎた。この間、お留以は、おのれの手に合う手裡剣を打っている。刀や槍と違い、微妙な重さ、それは、各々の体力や心気と合した重量、太さに関連が深いだけに、究極は、自ら鉄を打ち延べ研ぎ上るに如くはないのである。

ために、敷地の隅には鍛冶場がある。同じ本人が作りあげた手裡剣でも、百本のうち気に入るのが三本あればいい方とされている。それくらい、微妙なものだ。

そのもっとも手にあうもの二本を選んで、お留以は、父剣、母剣、と名づけた。

さらに一年経った。お留以は、その日に、左手も右と同じほどに使いこなせるようになっていた。蝙也斎の奨めにしたがったのである。

「右手に故障ある場合でも、左あれば」

しかし、かれの真意はそれだけではなかった。ある日、いずかたよりか、使者が来た。仙台の伊達家の侍であった。蝙也斎を召抱えるための使者であった。前から内意は、主人伊奈氏を通じて来ていたらしい。

「わしは仙台侯に招かれてゆく。されば、その前に、極意を与える」

蝙也斎は秘伝を与えた。

〝烏兎ノ大事〟とも〝蟹眼ノ大事〟ともいうのがそれであった。これは直打ちに行い、敵に近づくこと一間。もとより剣下の必殺ワザである。至近より敵の両眼を見る。その大事とは、敵の双眸を見極める。即ち、白眼と黒眼をはっきり識別した上、さらに黒眼のうちに〝星〟を見る。眸を〝得る〟のである。このとき双眸の黒星、蟹の如くに飛び出して見えたなれば、左右の手裡剣をその星に打ちこむ。

「星を見ること能わざれば、死ね」

と蝙也斎は言った。

「そのときは、左右の手裡剣を握ったまま、敵の双眸を突き、斬られて死ぬしかない」

この〝大事〟こそ極秘の一であった。

蝙也斎が赤山村を去るにあたって、この秘伝を与えた意味を知ったのは、その送別の席での

ことであった。

「御舎弟が見えられました」

と、門人の一人が告げた。そのとき、お留以は蝙也斎の盃に濁り酒を注いでいたのである。何気なくふりかえった眼に、土間に入ってきた男が見えた。そのときの驚愕を、どういったらいいだろう。そこに蝙也斎と瓜二つの男がいた。

「お留以、わしの弟じゃ。久しく音信不通であったが、こたび、仙台侯に招かれたと聞いたようじゃ」

皮肉な調子であった。

「おぬしがくると聞いて、待っていた者がある」

「おれをか？　この松林参十郎を待つ者などいるものか」

はっきりと、そのとき、お留以はかれの容姿に、父を斬った男の影を重ね合わせていたのである。

（この男だ！　あたしは間違っていた……）

蝙也斎に兄弟がいたとは。ただ松林という姓だけで、頭から信じこんでいたのだ。若気のあやまちともいえよう。それだけ、仇への憎しみがはげしかったのだ。

「――わたくしでございます」

「そなた？……」

参十郎は睨むように、彼女を見た。むろん、見おぼえはなかったのである。

お留以は立ち上っていった。
「外にお出下さいまし、利根川畔で斬られた渡し守の娘でございます」
それで充分だった。
「ふむ、そんなことがあったかの。まあよい。おれと果し合いをする気か」
「父母のかたき。討ちまする」
「その腕でか、ほう、面白い」
参十郎は右肩をそびやかし、外へ出た。そのうしろ姿こそ、編笠の武士にまぎれもなかった。
この果し合いの有様を詳述する紙幅がない。纔(わず)かに、お留以の得た極意はみごと、左右の剣をして、参十郎の兎眼烏眼を貫ぬき得たというにとどめる。
参十郎の刃は虚しく影を斬り、両眼盲いたまま、狂ったように林の中に飛び込んでいったあと、お留以は、とどめを刺す気が失せていた。仇討ちのためにおぼえた手裡剣のワザに、女兵法者としての極意を得た喜びがまさっていたのであろうか。あるいは、その瞬間、お留以が女の心の優しさをとりもどしたともいえる。
その夜、お留以は師との訣別を前に、いつかのように寝所に忍びこんだ。そこで、蝙也斎の陰茎が異様に損なわれていることを知ったのである。少年のころ、弟の参十郎が戯れの手裡剣打ちで傷つけられたという。
傷つけた参十郎も村人にうとまれて性格が粗暴となり、出奔した。一生娶(めと)らずと決意して、蝙也斎は兵法に生涯を捧げたのである。

お留以のその後は明らかではない。故郷に帰ったとも、蝙也斎に従って仙台に移ったともいう。男の機能のない蝙也斎は一生娶らず七十五歳まで生きた。寛文七年二月朔日(さくじつ)、兵法者には珍しく仙台の屋敷で大往生したが、その後半生を身の廻りの世話をした美しい女があり、あるいはお留以かと思われるが、この女性、仙台ではついぞ手裡剣を打つことがなかったという。

怨み兜の八幡座

1

異様な緊張が、座を占めていた。つい、今さっきまでの歓楽が、まるで春日に寒波が襲ってきたかのような、冷え冷えとしたものに変り、人々は酔いもさめるような気持で、眼を据えていた。

気の弱い者は、事実、酒が醒めた。いつも快楽的に、酒が入ると、よくはしゃぐ男ほど、蒼い顔になっているのを、さつきは見た。むしろ、事件は、その連中が起したと言っていい。酒が固苦しい気分をほぐし、同輩としての親しみを増す仲介をするのは事実だが、また屢々、酒は自制の歯止めを忘れさせる。

「なんと申しても据物斬りは、重左どのが家中一であろうな」

大森という男が、こう口を切ったのが最初だった。何の話から、そこへ及んだろう。誰かが〈猪口斬り〉という見せ物の話をした。江戸で見て来たという。浅草というところで、そのワザを見せて銭を集めていたという。その話も、どこまで本当かわからない。座興にしたこしらえ話か、聞きかじりに尾鰭をつけたか。

「猪口をな、真っ二つに斬るのだわさ、それもな、酒をたたえてな、掌に乗せて切る、あれには、感じ入ったわ」

「馬鹿なことさ」と、磐田という年長の男が一笑に附した、「左様なことが出来るはずもない、おぬし、狐に化かされたのではないか。浅草寺は奥山と申す、奥山の狐に」

げらげらと、みんな笑った。その笑いのままで済めば、話は、ほかのことに転じたはずであった。

「いや、この目で見た」と、大森は言い張った、「たしかに、真っ二つになった」

「掌は切れなんだか」

まだ磐田は揶揄気味だった。そういう話はいい加減なところで切り上げないと、こじれたものになる。他の話なら知らず、武道のことになると、みんな武士一通りの腕はあるだけに、座興では済まなくなるのだ。

「切れなんだ。かすり傷一つ、負わなんだ。それもさ、仁王の掌じゃない。花と羞じらう妙齢の美女の掌がな」

「濡れたろう」

と、誰かが言った。さっきは酒を運んでいたので、顔は見ていない。

「酒がびちゃっとな、美女の掌を濡らしたか。見せ物としては、あまり上手ではないの。いっそ、女の頭に乗せてやったほうが、やんやの喝采をうけようにな」

「それにしても、真っ二つ、というのがひっかかるのう」磐田は固執した。「割れるのなら

わかるが、真っ二つとは」
「いや、たしかに……」
「切り口を見たか」
「手にはとって見ざったが」と正直に大森はつづけた。「その女が、濡れた手で、両方にわけて、こう見せた、見物にな」
大森は、盃を二つ両手に持って、動作を真似た。
「はは？　そいつを、おぬし、ぽかんと口をあけて見ていたのか」「女の顔を見ていたのさ。じゃから目くらましにおうた」「顔ではあるまいぞ、胸のあたり」「いんにゃ、裾の方かな、ははは」
その笑いのあげくに、磐田左内は、さつきの方を見た。
「験してみるか」
その言葉の意味に、みんな、はっとなった。笑いが重苦しい沈黙に変った。
「美女あり、盃あり、琥珀あり、何んぞ験し斬りに不足のあらんや」
「腕に名刀あり、験さずんばならず」
調子に乗った。一座は、酔っていたのだ。
酒になって一刻ほど経っていた。せいぜいあと半刻たらずで散会になるはずであった。こうした事態はまるきり予期しなかったのである。
みんなの目が注いでいるのを見て、さつきは、狼狽した。

「御冗談を……」
話は聞いていたのだ。大体の内容は頭にあった。そんなことを本気に、実行するはずがない、と思った。
笑っている者もいたし、酒を飲んでいる者もいた。が、笑っている顔も妙にこわばっていたし、盃を口に運んでいる者も、さつきの返事を待って、手もとが留守になっているようであった。
「冗談なぞいうものか」と、磐田は口を切った以上、それを空に散らせたくなかったようである。「藤七が見たと申す、出来ると申す、されば、そなたに、美女の役をやって貰わにゃの」
「左様、美女ゆえに美女の役を。ははは、これは無理がない」
諧謔のつもりだった。
磐田がどれくらい大森に敵意を感じていたのか。最初は困らせてやれ、くらいの気持だったろう。だが、周囲がそうはさせなかった。
出来れば、これ以上の座興はない。あらためて、みんなはさつきを見た。
さつきは女中ではない。この勝間田重左衛門の娘である。娘といっても血はつながっていない。後妻の弥生の連れ子だ。重左衛門に伜と娘がいた。この前妻の娘琴路はすでに嫁していたし、伜多三郎は江戸詰でいない。弥生は三月前に亡くなっている。もともと蒲柳の質であった。さつきの美貌は母ゆずりだが、幸い、からだは丈夫だった。からだの方は父譲りかもしれない。信州の飯田でさつきは育っている。

飯田は天竜川沿いの風光明媚な静かな城下町である。ザザ虫という、小さな川虫が岩のうしろに隠れているのをとり集めて、佃煮にする、オコゲの葉というのも、このあたり独特のものだ。

オコゲの葉っぱと、ザザ虫のおかげでさつきは丈夫に育ったのでしょうね、と母はよく言っていた。

江戸育ちの母には、この信濃の澄んだ空気のもとで生れ育ったさつきが、丈夫なのが何よりも嬉しかったにちがいない。

その母が重左衛門に再婚してから、十年ほどになる。重左衛門は優しかったし、実の娘と変らない気持で、さつきは暮していた。

勝間田家には風呂焚きや若党などのほか、下働きの女が二人いる。こうした家庭での酒の席には、どうしてもさつきが座敷の方をすることになる。

酒や料理の膳を運んだりするだけで、はじめのうちは、みんな固くなっていたから、こうした乱れた悪い結果になろうとは思わなかったのだ。

「さつきどの、どうかな、引き受けてくれまいか」

と、別の男が言った。

さつきは蒼ざめた。

一座の連中が、それをのぞんでいることがはっきりわかったからだ。

いやだと言ってしまえば、それまでだったかもしれない。それを言わせないものが、この場

の雰囲気にはあった。

それに、さつきの気性も、軽口を叩き馴れていない。かえって、そういう蓮ッ葉な気性だったら、するりと身を躱すことができたかもしれない。

生みの父母もそうではなかったし、重左衛門も軽薄な人柄ではない。さつきの生い立ちには、水商売の女たちのような軽口を楽しむならわしはなかった。

つい言いそびれた。

こういうときは、機先を制する〝間〟をはずすと、どうにも言いだせなくなる。

「やって下さるか」

と、一人がいい、ほかの者も、ほっとしたように、にたにたしてきた。

「やはり、勝間田の御息女」

「おやじ殿が武辺なれば、御息女もまた」「おりゃ、早よう愚妻を貰うて損をした」「まことにな、さつきどのなら、なんと心強いことかの」「ああ、残念なこと、いささか、早よう生れすぎたわ」「もう十年若かったら、なんとしてでも……」

口々に言いたいことを言いつのっている。

酒は口を軽くし、舌に油をひくのか。べらべらと饒舌が、さつきを身動きできなくしてしまった。

「大森、支度せい、支度」

「え、おれが」

「なにを、とぼけた面をする。おぬしが出来ると申したのではないか」
「いや、拙者はただ、浅草で」
「さあ、ごちゃごちゃ申さずと、支度せぬかい」
大森藤七郎も、そんなつもりはなかったのだ。
が、こう話が進んでいっては、もう止めようがなかった。後へひけなかった。
武士の世界とはそういうものである。余事ではない。ことが武道に関するかぎり、冗談では済まない。かれらは武を以って、主君に仕えている。それがすべてといってよい。
(しまった！　つまらぬことを言ってしまったな)
一番後悔していたのは大森藤七郎自身であろう。だが、もはや騎虎の勢いである。しかたはなかった。
まわりの者が、後へ退かせないのだ。おっちょこちょいな奴が、ばたばたと、そこらを片附けはじめている。
膳部を隅におしやり、座敷の中央を大きくあけた。
「さ、さ、御両人、お支度を」
盃を持ってくる奴、酒をそそごうとするやつ。自分たちは高処の見物だから、気楽な顔だった。
さつきは坐らされた。その頭に、盃を置き酒をそそぐ。
その間に、促されて、大森藤七郎は刀をひっさげて立った。大森の顔は、もう酔いなどさめ、

蒼いほどになって、がたがたと顫えているようであった。
(大丈夫かしら……)
それを見ると、さつきの胸を、はじめて不安が掠めた。
大森の足もふるえているし、刀を抜こうとする手に、自信がなかった。若いのだ。二十四か五か。腕はかなりのものがあるという噂だった。が、真偽はさつきの知るところではない。
「どうした？」
いつまで経っても、抜刀しないので、誰かがけしかけた。
「怯れたか」
その言葉が、かれの決断を促した。大森藤七郎は抜刀した。
右足を半歩踏みだし、刀をふりかぶった。そのままの姿勢で、つつーっと、進み寄った。
が、さつきの眼前六尺のところで、ひたと足が止った。
まるで、根が生えたように動けなくなっていた。
盃を切る。——
そのこと自体、至難なのだ。況や、若い女性の頭上に置いた盃。酒を満たしたものを、どうして切れよう。錬達の士にしても、よくやれるか。
額に米粒を張りつけて、これを一刀両断にし、額には毛すじの傷も負わせなかったと、世に伝わる。宮本某の逸話である。識者は、これを不可能ではないという。
知らず、超人的な秘剣の持主ならば。だが大森藤七郎は、これを肯じ得なかった。おのれの

ことは一番おのれがよく知っているのだ。

刀を振りかぶったまま、藤七郎は、棒のように固くなって立ち竦んでいる。その額から、たらたらと冷汗がしたたった。

さつきは微動もしない。さつきの頭上の盃は揺れていない。さつきが動揺すれば盃は揺れ、酒はこぼれるのである。

「どうした藤七」

「石不動になったか」

けしかけられた。その言葉に動かされたのは、修業の足りぬ若さであった。藤七郎の眼の中で、盃が白くぼけて広がった。さっと進み出ようとした。

2

そのとき、父の重左衛門が制止しなかったら、どちらにせよ、さつきの命は亡かったにちがいない。

若者の暴剣は、盃を砕き、さつきの頭蓋を断ち割ったであろう。

重左衛門は、別室にいた。同僚の筧主水と話があって、座をはずしていたのである。

この酒宴というのも、筧主水が江戸詰になるので、送別のためのものであった。主水は遠縁に当る。江戸の多三郎に伝えて貰うことがあった。

多三郎の近ごろの行状がおかしいという報せを受けていた。

荒れているという。何の理由かわからないが、若者にありがちの不満であろう。ともかく、江戸詰となったら、看視の眼をきびしくするにこしたことはない。筧主水にくれぐれも頼んでいたのである。

それだけなら、もっと早く、もとの席に戻れた。

筧がこんなことを言った。

「噂だがな」と、前置きして、「言いたくないことじゃが……おぬし、気を悪くすると困るのだが、あるいはと思うゆえ、申すのだが……」

「なんだ、えろう勿体ぶるではないか」

「さつきどののことよ」

「さつきが、何とした」

「多三郎がな」

「……」

「惚れたという」

「馬鹿な！　何を申す、なんということを」

「それ見い。気色が悪いであろ、じゃから断ったのだ。言わねばよかった」

「あ、あろうことか、左様な！」

「わしも、そう思うた。はじめはな、馬鹿なことを申すと。じゃが、考えてみると、あり得ぬことではない」

「あり得ようか、兄妹ではないか」
「じゃとて、血がつながっておらぬ」
「……」
「すりゃ他人じゃ。縁あって兄妹とはなっていても、それ、恋は無分別と申す。さつきどのは、親でも迷う美貌じゃしの」
「これ、何を申す、酒を食べすぎたのではないか」
「いや、わしは申さぬ。世間が申しているのだ。心せねばならぬ」
重左衛門が怒ったのは、心当りがあるからではないか。
さつきは何も言わないが、多三郎はさつきのことを好きだったようだ。ただ義兄としての好意だと思っていたが、重左衛門の眼が甘かったのかもしれぬ。
兄と妹となった以上、どうにもならぬ。その苛立ちが、荒れた日常となっているのではないか。
困った奴だ、と思った。ともかく、江戸と小田原とに離れている以上、問題はない。江戸にいれば、頭が冷えるであろう。悪い女にひっかかることも考えられるが、ともかく、さつきに恋情するよりは、よい。
重左衛門はそう思いながら、席に戻ってきたのである。
その眼に映った光景が——
目を閉じてきちんと坐ったさつきの頭上にいましも白刃を振りおろさんとした大森藤七郎の

姿に仰天した。
「何をする」
咄嗟に、小柄を抜いて投げた。
手練であった。小柄は、手裡剣となって飛び、藤七郎の肘に、ぶっつりと刺さった。
「うッ、邪魔を……」
衝撃で藤七郎はよろめいた。刀こそ取り落さなかったが、肘の痛みで、眼が痺れた。
斬撃寸前である。駈け寄った重左衛門を、磐田がとめた。
「お、待たっしゃい」
「放せ、さつきを……」
「座興じゃ、大事ない、大事ない」
「ざ、座興とは何たるたわけ」
「まあ、落着かっしゃい。これには理由があるゆえ」「そうじゃ、重左どの、大したことではないのだ」「まあ、お鎮まりなされや……」
まわりで、寄ってたかって押えた。
そして、磐田が始終を話した。盃を切るのであって、御息女を怪我させるのではない。
聞いていた重左衛門は、かえって怒った。
「なんということじゃ、一同揃うていて、たわけなことを。左様な、神業を、本気で考えてのことか」

赤くなったり青くなったりして激怒した。
「かように申しては何だが、この中では、もっとも腕の立つのは、この重左じゃ」
「……」
「大森づれに、何ほどのことが出来よう、未熟なる腕のくせに……わしが止めなんだら、さつきの頭はたち割られていたはず」
「……」
「第一、おぬしらは、据物斬りもろくにやったことはあるまい。竹藁を土壇で試すのとはわけが違うぞ。われら若きころは冬瓜の頭巾切りなどやったものじゃが、冬瓜の頭巾切りと申してもわかるまい。冬瓜を布でくるみ、据物にして、布だけを切る、冬瓜に傷をつけずに切る…あるいは兜割りじゃ。兜割りも力だけでは駄目じゃ、心技体、一つとなって、はじめてなせるもの」
「ほう、おぬし、兜が斬れるか」
磐田が漸く、隙を見たように、反駁してきた。
「斬れいでか」
「斬れる？」
「おう、斬って見しょうぞ」
これも騎虎の勢いだったのである。
「よせよせ、斬れるものか」

「斬れるとも」
「斬れなんだら、何とする」
「腹を切るわい」
そう言ってしまった。
自信があったのだろうか。言葉のはずみか。まるきり自信がなかったら、そこまでは言わぬ。事実、重左衛門の腕前が、衆にすぐれていることは、座にある者の、誰もが知っていた。だが、自信があっても、そこまで、広言してしまうことは、やはり軽率の誹りは免れまい。この夜の酒は、異常だった。すべてを狂わした。
夏の夜であった。あるいは空梅雨の、妙に重苦しい夜気が、禍いしていたのかもしれない。酒をすごすことが暑気払いになるなどと、宵の口に言っていた者たちも、厚い天鵞絨のような夜気に巻かれて、常軌を逸していたのかもしれない。
「さつき、兜を持て」
と、かれは言った。
重左衛門の表情はいつもと違っている。他人を感じさせた。あの温厚で、篤実な感じさえした養父とは違っていた。近より難く、そして、さつきが、何と言おうと、その行為をもはや止めるとも見えなかった。
（坂を岩は転りはじめた）
という感じだった。

「父上……」

自分の軽率から出たことなのだ。さつきは何か言おうとして、あとの言葉は、咽喉にひっかかった。

「早くせい、さざえ兜じゃ」

勝間田家は、遠江の出である。南北朝以来、勝間田は遠江の名門として聞えている。もとより重左衛門の家は、その分脈で、家路は知れたものだが、祖先の栄光を伝える武具が幾つかある。

兜も三頭あるが、さざえ兜は、先祖の播磨守某が掛川の松葉城に河井宗忠とやらを攻めた折、大薙刀で、前廂を裂かれたが、敵の武将を討ち取ったと曰がある。薙刀の尖先は、前廂を割り、鼻柱を切りさげ唇を四つに割って、ために、生涯、鼻にはつかえ棒を入れ、生れもつかぬ兎唇となった。

だが、この兎唇、豪勇のしるしである。以来、播磨守某が、つかい鼻の兎唇であらわれると、敵兵は、

「ソレ、さざえ兎唇じゃ」と、算を乱して逃げたという。

その由緒ある、誉の兜なのだ。

さざえ兜というもの、自体が珍しいが、ないことはない。ただ、兜の性格上、タテさざえと、つぶれさざえの二つがある。

タテさざえは、遠望すると、烏帽子兜によく似て見える。これに比べて、つぶれさざえは、

栄螺を少し潰したように、つまりデフォルメしてあり、遠望した場合桃なりの兜と同じような格好に見える。地方によって、さざい、とか、さだえとか訛るようだが、栄螺のことである。

このつぶれさざえの兜を持ってくると三方に乗せさせた。

重左衛門が、差替えの中から選んできたのは、無銘ながら関もので、異風とされる蛤刃の二尺ものである。

据物斬りは、刃渡りの長きは不利とされる。

もとより、刀は手に従う。人の体格はさまざまだから、その体格膂力に相応した道具があればいいわけだが、常識として、据物斬りは二尺を良とす、とある。

重左衛門の身長は並である。肩幅がやや広い。いまだ四十不惑の半ばで、当時としては、初老に入っている。それを補っているのは、若壮にして鍛えた剣技である。重左衛門は一刀流と林崎流居合をよくする。

「おう！」

重左衛門は、声を放った。

いまだ、白刃は鞘の中にある。つつーっと走りよる。手が柄にかかったのは、兜の手前五尺である。

抜く。きらりと灯を返射した。

重左衛門の膝が、畳につくと同時に、白刃は兜の頂辺に落ちていた。

ガッと凄まじい音がした。さつきは一瞬、目を閉じた。が、ほかの者は見た。火花が飛び散

ったのを。そして、火花だけではなく、刀が折れ飛んだではないか。
半ばから折れた刀は、鋭い尖先をおどらせて、床ノ間にはね、黒塗りの框に傷つけて落ちていた。
「……」
異様な気が満ちた。
斬れたら、みごと！　と賞賛がわいたろう。その言葉は嚥み下さねばならなかった。
三方の上の兜は、さながら、傲然たる巌のような表情で、ふんぞりかえっていた。
がっくりとなった重左衛門は見るも哀れなほどの悄気ようだった。折れた刀を凝っと見つめて、その顔はもう死人のようだった。
妙に気まずいものが、座に流れた。座興がとんだ方向にそれてしまったのである。
もとより、深い意味もなく、さしたる悪意もない。みんな行きがかりの言葉だし、行為だった。酒のせいだといってしまえば済む。事実、悪酔いの結果だとみてよい。
磐田も、気まずそうにしていたが、慰めるつもりか、つぶれさざえをそっとなでて、
「大分、斬りこんだようじゃ」
などと呟いた。それで座興のしめくくりをしたつもりだったのかもしれない。
これが、鮮やかに斬れていたら、いままでのこだわりが、気持よく溶けたろう。こうなっては、ただ、時間しか、この気まずさをはらす手はない。
三三伍々、連中は帰っていった。大森藤七郎が一番、こたえたようである。かれはいつもよりも、おどおどした眼になり、さつきが送りだしたのにも、卒爾しました、と詫びている。口先だけのものではなかった。一度出てから、またもどって来た。さつきも無言で迎えた。
「……」
何かもう一言いわねば、胸苦しかったのだろう、が、さつきの顔を見ると、その言葉が出ずに、黙って、一礼して、逃げるように去っていった。
さつきには、藤七郎が、卒爾を深く詫びたいものと思ったが、それだけではなかったらしい。そのことを知ったのは、後のことである。

3

こんなときは、なまじの言葉をかけない方がいい。さつきはそう思った。養父への思いやりであった。さつきの母が亡くなってから、見る目も哀れなほど消沈していた父である。
後片附けも、もう遅いからと、下働きの女たちを寝ませて、さつきも寝ることにした。
重左衛門は、残肴の散らかった席に一人胡坐して、手酌で飲んでいた。
折れた刀を前に置き、三方のつぶれさざえの兜を見まもって——まるで、兜を肴にして飲んでいるようなものだ。もう酒は、冷たくなっている。夜具の支度は出来ていますから、と、さつきは、就寝をすすめたが、重左衛門は、うむ、と生返事をしただけだった。
冷酒も気になった。
「おからだにさわりまする、燗をしてまいりましょう」

というと、要らぬ、と応える。
「このままでよい、先に寝め」
うるさげに言った。
明日になればまた、いつもの養父になるだろう。母が亡くなってから、かえって、ほんとうの父親のようなしっくりした情を感じるようになっていた。
自分が母代りにならなければ、という気持に、多三郎もいない暮しとなってから、特に二人だけの心の交流を感じていたせいかもしれない。
（そっとしてあげるほうがいい……）
さつきは慮った。その慮りが、アダになった。
翌朝——
気になって早く眠りからさめたさつきが、養父の寝所に声をかけたが返事がなかった。
思いきって中へ入った。夜具は昨夜、のべたままになっていた。重左衛門は寝ていなかったのだ。
急に不安になった。胸がざわめいた。心臓が破れるように鳴りはじめたのを知った。
さつきは客間に入っていって、愕然とした。重左衛門は、割腹して果てていた。
異様な死にざまであった。
あの折れた残りの刀でもって腹を割き、そして折れ飛んだ尖先のほうを咽喉に突き当てて死んでいた。

尖先が、えりあしのわきから一寸も突き出ていた。おそらく、袖で刃を巻き、咽喉に突き立ててから、前へのめる力でもって、貫いたのであろう。
その武辺の意地には、これを見た者、誰もが、ぞっとした。
執念を見せていたのは、それだけではない。
片手は——血に染んだ左手が、つぶれささえの兜をがっしりと摑んでいた。
三方の上に手を伸ばし、兜の頂辺を鷲づかみにしたまま、果てていたのである。
武士の意地だ。酒席での言葉とはいえ、二言はない。兜が斬り得ぬときは、切腹すると広言した。それを実行したまでである。
さつきは、その凄まじいまでの武辺の道に驚倒した。
（父様は、意地をお貫きになった）
兜が斬れなかったことは恥辱だが、死をもって、それを雪いだのである。
多三郎は訃報に接して、小田原へ戻って来たが、納棺する直前に父の顔を見て、
「愚かなことをなされた」
と、言い放った。
「よく似た父子だ」
そう呟いた言葉の意味を、筧主水はじめ事情を知る者は解した。多三郎は、おのれを恥じ、父の死を恥じたのだ。

誰のせいでもない。父の腕が劣っていた。

そう諦めるしかない。兜斬りとは、誰にでもできることではない。至難のわざだ。おそらく、家中の何人か、よくしても五本の指を出まい。

それに死を賭けるのは、勇み足にすぎる。

すでに時代は徳川幕府の中期にかかっていて、荒々しい戦国の気風はすでに人々の心から失われていた。

泰平の時代の安逸は、安逸を肯定する世論によって、さらに退廃へと転ってゆくのである。小田原の城下に、町人たちの間にも豪毅の気風が残っていたのは、せいぜい寛永時代までである。小田原は東海道の一駅であるだけに、交流がはげしく、北条早雲長氏以来の、硬骨の気風は失われていた。

「馬鹿な死にざまだわな」

町人たちは噂した。

家中の眼も、かれの武辺ぶりをたたえるよりは、おのれの出来ぬことを広言して、自ら墓穴を掘った愚を嗤った。

嗤うことで、もはや、そうした時代は過ぎたのだと、お互いが認識し合おうとしたようである。

誰でも人間は、今日に安住している場合はより以上の困難にぶつかりたくはない。

勝間田重左衛門の死は、大久保家に戦国の残夢を払わせるものであった。厳密には、大久保

家は三河以来の武辺である。その三河武士の尊んだ武勇は、この重左衛門の死を嘲笑することで、終止符を打ったようだ。

むろん、こうした意地を表向きたたえるには、時代そのものが違っていた。

家来は主君のために存在する。その原則をはずした重左衛門は、大久保家にとって不忠の臣であった。

勝間田家は改易となった。表向きである。

すでに伜多三郎は、お召出しにあずかっていたから、これは別家を立てる。——形式的なものだが、封建の世は、形式主義だ。面倒な手つづきの末、あらためて勝間田多三郎が、一家をたてた。

重左衛門の跡目相続なら、八百五十石はそのまま、継ぐことができたものを、多三郎の身分は低く、奥小姓役としての二百石のみ。もっとも、いずれ何分の御沙汰があろう、という含みであった。

これは勤役如何では、父の半分くらいの御加増は折を見て給わるであろう、というのである。〝折を見て〟というのは、重左衛門の死を人々が忘れるころ、のことだ。

（可哀想なお父様……）

さつきは、ひとり、重左衛門のために涙した。

多三郎と野辺送りを済ませると、さつきは翌日、家を出た。

（あのようなことになったのも、磐田さまが意地の悪いことを仰せられたため）

磐田を刺して、自分も死のう。さつきは決心した。

磐田は御境目御用、という肩書で、郡奉行配下である。山から山を歩きまわって、国境いを見張る。

戦国の世と違って、侵略などということはないが、貧民の逃散とか、御尋ね者の密出入がある。

それを取締るほか、山火事に気をつけたり山賤たちに布令を伝達したりする。面白い役目とはいえない。根気と耐忍を必要とし、汗にまみれての山歩きだ。

所々に山小屋があり、その山小屋を点として、線を結ぶように、歩かねばならない。

さつきは、丹沢に入ってから、その線をたどった。

「ほう狐かと思うたがの」

女気を離れた山役人たちは、好色の眼をぎらつかせる。が、さつきが重左衛門の娘だと知ると、牙をひっこめた。

さらに、磐田左内に要用があって来たのだと知ると、態度を変えた。この山番たちにとって、左内は恐い存在だったようである。

その左内を漸く見つけたのは、山小屋を十幾つか辿った奥に入ってからであった。

左内は独りだった。

夕闇の忍びよった山の山小屋で見る左内はあの屋敷で快楽的に、てかてかに顔を光らせて盃を重ねていた左内とは別人のようであった。

「――何しにござった」

ぎろりとした感じで左内は見た。無精たらしく半身を起して見ただけである。

「――かかる山奥へ、美女の到来とは……奇怪なことだな」

「はい……」

何と口実かまえようかと、来る道筋でとつおいつ思案してきたのだが、いざとなると、嘘は出なかった。

そのとまどいを、凝っと赤い目で、左内は見た。

「かかる山小屋に見えられても、馳走のしようがないな。酒ならある」

左内は酒徳利を引きよせた。

「いいえ、お酒などは」

あわてて断わろうとしたとたん、左内は徳利を棄てて、さつきの腕を握った。

「あっ！」

「どうした！　おれに惚れてきたのではないか」

「あ、いいえ、そんな……」

狼狽したが、強い力で、引き寄せられていた。

逃げようがなかった。声を出しても、誰が来よう。丹沢山中である。聞く者は梟や猿ばかり。

「放して」

「ははは、羞しいか、羞しいのは一刻よ、男を知れば、男がよくなる、ははは、すぐに

な、よくなる」

左内は笑った。

眼をぎらぎらさせて、のしかかってきた。抗ったが、抗うには、あまりにも強い男の力だった。

「な、な、いいぞ、いいものじゃ、男と女というものはな。ははは、誰に気がねせいでもよい、ははは、どのようによがり泣いても誰にも聞えはせぬ」

磐田の強い力で下肢を押しひろげられ、その太い指が、秘めどころを乱暴にまさぐってくると、さつきは、力を抜いた。

それをどう解釈したのか、涎を垂れんばかりに、笑声をあげて、磐田はのしかかった。

磐田の男のものが、からだの中へ入ってきたとき、激痛で、さつきは悲鳴をあげた。

あとは、何がどうなったかわからない。熱いものと冷たいものが、全身を襲い、不快な感触と疼痛だけがあった。

その地獄のような責め苦はどれくらいつづいたろう。まるきり時間の経過もわからなかった。

くりかえし、くりかえし、左内は、彼女の肌を弄んだ。

さつきは、地獄の苦しみの果てに、まだ余力があるのを、幸運だと思った。

満足した左内が、大の字になって寝込んでいる。かれはこころよい眠りに勝てなかったのだ。

が、さつきには余力があった。左内の脇差を抜きとり、その胸に力をこめて突き刺すだけの力が。

左内が、心ノ臓を貫かれると、けものめいた声をあげて手足をばたつかせた。

「な、なんと……」

その驚愕の眼に向って、柄をしっかと握ったまま、さつきは言った。

「養父の……意趣ばらし」

「う……こやつが、左様な……」

「武辺に死んだ養父の代りに、おまえを、私が討ちました」

もうその声が聞えないように四肢をばたつかせながら、左内の手は何かをもとめて、動いた。

その手が、茶碗を圧えた。茶碗の糸底に指がかかっている。

さつきは見た。その手は、重左衛門が兜に無念を見せた手の指を思わせた。糸底にかかっている指は、兜の八幡座にかかったそれを思いださせたのである。

さつきは動かなくなった左内から、よろよろと立ち上った。

4

さつきの姿は、大久保家の領内から消えた。山小屋に於ける左内の死体が発見されたのは、二日の後であった。

大久保家では、むろん、さつきの行方を捜したが、杳として知れなかった。

むろん、江戸の多三郎も調べられたが、多三郎には、まるきりわかりようはなかったのである。

さつきが江戸の近郊にいるらしいという噂が伝わったのは、一年ほど後である。
だが、それ以上の詮索はなかった。一つには左内には係累がなかったせいである。左内は変り者で通っていた。妻がいなかったのは、何度貰っても、妻が逃げだしているからだった。かれにはサジスティックな面があったらしい。
さつきがあの手荒な行為に耐えたのは、かれを討つ目的があったからである。普通の妻なら、耐えきれない。さつきの美しい処女肌に狂喜して、あれくらいで済んだのだ。押れてくれば、何をするかわからない男であった。
さつきは多摩川の畔にいた。
彼女は、この一年、ひたすらに、薪を割り石を砕いた。
その方法を教えてくれたのは、重左衛門の師であった帰雲という林崎流の達者である。真田帰雲は、当時本所に住んでいた。御舟蔵の近くに道場があり、「お舟蔵の先生」といえば界隈で知らぬ者はなかった。据物斬りの腕は六十の声を聞いても達者であった。
訊ねて来たさつきが教えを乞うと、
「石を割れ」
と、言った。
「毎日、石を砕け、半歳たったら来い」
教えを、さつきは守った。
信濃の飯田にもどって知人を頼り、連日、石を砕いた。

若い女に、この難行は、徒らに逞しい手足を作るばかりである。色気も何もなかった。
さつきの手は、腕は、しだいに太くなり、逞しくなっていった。日焼けした顔は浅黒く健康な美しさになっていた。笑うと歯の皓さが目立った。
半年後に、江戸へきた。帰雲を訪れると彼女の手を見、日焼けした顔を見、それから、
「薪を割るがよい」
と、指示した。
薪を割る仕事は、誰にも喜ばれる。そのまま生業のようになった。
若いとはいえ、適齢期になってから、剣術を習っても、一人前になるまでは容易ではない。早道を狙うしかなかった。石を砕くことで手に豆が出来、豆がつぶれ、掌の皮が厚くなり、腕が太くなっても、さつきは平気だった。
容色を売るつもりはない。さつきは、仇を討ったら、死ぬつもりだった。
左内によって、女にされたが、男をほしいとは思わなかった。あのようなかたちだっただけに、一層、それが強く感じられたのだろう。
その苦しい日々に、さつきは不思議と心の安らかさを知っていた。
なぜ、そうまですることがあろう。理由はない。仇とは呼べないことだけに、一入、心の中で、さつきは、重左衛門との通じるものを感じるからである。
（お父様のお気持は、さつきだけが知っております）
その日々が、さつきに思いがけない心を呼びさましていた。

（あたしは、お父様を……）

重左衛門とは真実の父娘のような気持だと思っていたが、それは恋情と呼べるものではなかったろうか。

軽薄な若者を、多三郎を含めて、好きになれなかったのも、重左衛門をいつしか恋していたからかもしれない。母の死は、彼女にそのような思いをつのらせていたのかもしれない。

あの温厚で、篤実で、いざとなれば、武辺の心を持った重左衛門こそ、二十幾つも違ってはいたが、さつきの中に占めていた男だったのだ。

あれだけ、意地を張り通して、武士に二言はないことを、身をもって示した男。そういう男こそ、さつきの胸の中の男だった。古いといわれても、真実、心を占めた。感動があった。その生きる喜びが、彼女を異常なまでの鍛錬に走らせていた。

薪割りの半年が済んだあと、帰雲は今度は妙なことを言った。

「布を切れ」

布を切る？　はじめて、刀で斬ることを教えた。これは異様であった。木の枝から布を吊りさげて、これを斬るのである。柔らかいものほどいいという。

柔らかい布は、風に揺れる。揺れる方向に向って斬れというのだ。いかに鋭利な刀でも容易ではなかった。

その布切りの技を会得するのに、半歳を要した。宙に投げた布を下から掬い斬る。石を砕くうちに、さつきが会得したことの一つは、石の目、を見ることである。

石には、それぞれ、〝目〟がある。その目を見つけて、かけやを打ちおろす。いたずらに力を出しても、はね返されるだけだった。

薪割りで会得したことは、木の質を見ることであった。これは、いかに力を抜くかにかかっている。振りおろすとき、力をこめ、木に触れた瞬間、力を抜く。木はひとりで割れるのである。

この石と木によって習得した技と力をもって布を切るのは、これまでの〝力〟を呼気に代える。気合にかえることを習得させるものであった。

布切りの秘奥を、帰雲は言った。

「流れを切る、これじゃ」

水の流れを切る。

水を切るとは、いささか、呪術めいている。

ただ、水を切っただけでは成果はわからない。小川の流れに布を浮べ、これを一気に斬るのである。

流れには、緩く、あるいは速く、動きがある。この動きに逆うことは、易い。抵抗があるところに、斬刃の可能性がある。

が、帰雲の説くところ、教えるところはその逆であった。

流れのままに斬る。つまり、追い斬りであった。布は逃げる。逃げるのを追うのだ。そこには抵抗がない。あるものは、心技体、ただ一点に凝集された秘剣のみであった。

一心不乱に、その技を追いもとめるさつきの姿は、村人たちの不審と、そして嘲笑を買った。が、さつきはひるまなかった。

さらに一年経った。

さつきは帰雲の道場を訪れた。さつきが来たと聞くと、帰雲は、人を遠ざけて、道場に呼んだ。

道場の真中に三方を据え、桃なりの兜が置かれてあった。

「斬れ」

と、帰雲は言った。

「心で斬れ」

その意を体して、するすると、さつきは近づいた。

おのれの眼を疑った。兜は、頭を保護するとともに、敵を威嚇するものである。

その筋金や、星と称する鋲の光りも、頑丈そのものに見えたが、いまこうやって見ると、実に可愛げな、さながら、うすい金でできているようにしか見えなかった。

さつきは、八幡座を見た。

いかなる兜も、頂辺に、菊座があり、穴があいている。頭がむれぬためである。

だけではない。これは意外な効能がある。

はげしい衝撃を受けたとき、穴がなければ、痛みと響きが倍加する。その他にも、意味はあるが、逆に、これが戦さのとき、損になることもある。熊手をもって引っかけられる。

この八幡座は——いうまでもなく、武神、八幡大菩薩の宿りますところで一名〝神宿り〟とも称う。

さつきは見た。

重左衛門の血に染んだ指が、この神宿りに怨みをこめて、つかんでいたのを。

「——斬れた」

さつきの気魄を見てとって、帰雲は言った。

「斬れたぞ。よくもそこまで修業した」

「はい……」

斬った、と自分でも思った。さつきは深い疲労を感じていたのである。不思議な剣の技と心気の相乗作用であった。

小田原へ向ったさつきは細長い包みを持っていた。帰雲が、餞けにくれた刀である。蛤刃の一尺八寸。胴田貫ということであった。

もうほとぼりはさめていようが、やはり、余計な問題で邪魔されたくはなかった。

暮れてから城下へ入っていった。

さつきが訊ねたのは、大森藤七郎の屋敷である。

藤七郎のうけた衝撃は大きかった。

「さつきどのか」

言ったきり絶句した。
部屋へ招じてからも、暫く、声がなかった。
「わたくしが参った用向き、おわかりと存じまする」
こう言うさつきの声音は、凛として、以前の甘くなめらかな娘のそれを失っていた。
「わかって居る。仇討ち、に見えられたのであろう」
「重左衛門の無念、娘のわたくしが霽らす、不思議はござりますまい」
「――兜か」
藤七郎は歎息した。
「拙者の軽口が、あの大事を招いた」
「……」
「その罪は感じておる。が、さつきどの、これだけは申しておきたい」凝っとさつきの眼をのぞきこむようにして、かれは言った。「あの日、拙者は浮かれていた、浮かれねばやりきれなかったのだ」
「……」
「心の苦しさを、何と申そうか、口に出来ぬ哀しさというか、ははは、信じられまい。そなたにはわかるまいな」
「――何のお話でございましょう」
「だから、わかるまいと申しておる。かように申せばわかるだろうか、拙者の苦しみは、多

三郎どのと同じだと」
藤七郎の眼は熱っぽかった。さつきは、胸にはげしいものを唆ったように、言葉を喪っていた。
「いまさら、愚痴だ。あのあとで、どれだけ告白しようと思ったかしれぬ。が、言う機会がなかった。そのうちに、そなたが姿を消した」
「……」
「左内が、そなたの手にかかったらしいと知ったとき、なぜ、拙者のところには来なんだかと……あの当座、日夜、苦しんだものだ」
「返り討ち、でございますか」
その強い、美しく張った眼を見て、哀しげな、弱々しい微笑で、藤七郎はかぶりを振った。
「そうではない」
「……」
「この身の口からは申せぬ。が……」
さつきは、あの夜、帰りしなに、藤七郎がふたたび引き返して来て、何か言おうとしたことを思いだした。
「いや、やはり申せぬ。ははは、武士とはな、かようなものか。拙者も、漸くに重左衛門の心映えがわかって来たわ」
それで、というふうに、藤七郎は、さつきを見た。

「如何ようにでも、望みに応じましょうぞ」
「兜を」
さつきは、きっと、して言った。
「今宵、兜を斬らせて下さりませ」
「――拙者の？」
「御当家重代の兜なれば、重左衛門も浮ばれましょう」
藤七郎は、頷いた。頷いたまま、黙っていた。
が、暫くして、うすく微笑した。
「望みの通りに」
「かなえて下さいましょうや」
「直ぐに支度をいたさせます、書院に。暫くお控えあれ」
藤七郎は立っていった。へやを出るときふりかえって、にっこりした。
「人間の縁とは、不思議なものでござるの。心というものは、自と通じるものと思うたが、心もまた行い無うては、通じようがない」
「大森さま」
贅言無用、という眸であった。
頷いて、藤七郎は言った。
「女ながらの兵法鍛錬、感じ入った。だが、さつきどの、女性の美しさは情じゃ。多三郎どのに不愍をかけてやるがよい。いやこれも余分口であったか」
藤七郎は、肩をゆすって笑った。
どれくらい待ったろうか。小半刻（三十分）ほどであろうか。妻女が支度が出来たと知らせてきた。
手燭を持って、先に立った。さつきは、包みから刀をとり出し、左手に持って廊下を進んだ。
書院の次ノ間に入ると、妻女は手燭を渡して、どうぞ、中へ、と言ったあと、面てを伏せ逃げるように去った。
（何かの仕掛けでも……）あるのではないか、と、思ったのは、その妻女の態度からである。
書院に灯はともっていなかった。
左手に手燭をかざし、抜刀して、さつきは進んだ。
淡い灯の中に、鎧が見えた。床の間に、一領の鎧が据えられていた。剛い棕櫚髭をつけた鉄面が、黒く光った。まるで、人が入っているかのような鎧であった。その兜が、桃なりであることが、やはり、用意したのだとわかった。
さつきの記憶では、藤七郎の家には鍬型の見事な前立の兜があったはずである。
さつきは近づくと手燭を置いた。
凝っと兜を見据えた。
「怨み……いまぞ」
足かけ三年に及ぶ。血の出るような修業もこの日、このときのためであった。

（重左衛門さま、神仏も御照覧あれ）

つつーっと、さつきは進みよった。

石を砕き、薪を打ち、水を切る、あの玄妙の心気であった。はげしい声が紅唇から奔った。

さつきのからだは、鎧にぶつかるほどの勢いで、突進している。白刃は、淡い灯明りを裂くように振りおろされた。

ぐわッと、桃なりの兜は哭いた。

手応え。

（斬った！）

鈍い抵抗の衝撃とともに、すっと腕が軽くなるような斬撃の快感がきた。

が、同時に、さつきの眼は、二つに割れた兜の頂辺から、凄まじい血が噴き上ったのを見たのである。

「あっ!?」

噴血三尺、凄絶であった。その血は黒く見えた。ぐらりと鎧はゆらめき、たまらずに、前へのめった。

割れた兜が二つになって転り落ち、頭蓋を見事に割られた中の人間が、声もなく転った。

「あ……藤七どの」

鎧の中には藤七郎が入っていたのだ。

血刀を持って、さつきは駈け寄った。

「なぜ、なぜ、こんな……」

呆然となったさつきには、藤七郎の、微笑さえ浮べた表情が、尚、不可解だった。

兜の絶対性を信じたのか。それとも、さつきの腕を甘く見たか。それとも、それとも……

（多三郎にも不憫を……）

と、言った言葉の中に、この奇怪な行為を解く鍵が含まれていたのだと気がつくのは、いつのことであろうか。

さつきには、念願を果たしたという喜びがまさっていた。藤七郎の男の真情にまで気がつくには、時間がかかるかもしれなかった。

ただ、幾分なりとも、藤七郎が満足したろうことは、刃の下に立つことを避けない武辺の心が藤七郎にも残っていたことを、さつきが認めたことである。

さつきが多三郎の想いを受け入れたかどうかはわからない。多三郎はのちに、重兵衛と名乗ったが小田原家中家譜で見ると、妻女の名は八重となっている。さつきと同一人かどうか知る由もない。

秘伝闇の蜘蛛

1

常人とは常識の範囲でしか、ものを考えない人の謂である。さむらいのなかには、異常なばかりに豪毅の者もいる。女は、それを目睹したゆえに運命が狂った。

真弓は、そのとき、急いでいた。日が暮れたばかりのせいもある。まとまった金を持っていたせいもある。もっとも、その寺町通りは、白昼でも人通りは多くはないのだが、提灯を点けると、急に四辺が暗くなったように感じた。築地塀に沿って角を曲ったとき、その侍とぶつかりそうになって、あっと、小さな声をあげている。

「ははは、もう少しで鉢合わせするところだった。宥せ」

と、その侍は磊落に笑った。

「いいえ、私が、急いでおりましたので」

と、ゆき過ぎて二間と歩かぬうちだった。ぼすっ、と鈍い音がした。振り返った眼に、その侍が、よろめくのが見えた。いつ抜いたのか、手に刀があった。

「む……」

真弓は愕然とした。

侍の背から何か出ていた。

矢ではないか。夜気を裂いて飛来した一筋の矢が、侍の胸板を貫ぬき、背から五寸も突き出ていたのである。

真弓は声を失い、瞠目して立ち竦んでいた。

「う、うぬ！……弾次……」

そう聞えた。

侍は歩きだしていた。信じられないことであった。が、歩いている。白刃を右手にひっ下げ、よろめきよろめき歩いてゆく、

さながら、眼前にその敵がいるかのように。

鷹羽の矢は、右胸部を貫ぬいていた。もしも心ノ臓であったなら、即死したろう。それにしても、みごとに胸を串刺しにされて、十間近くも歩いたのは、異常である。刀根主馬助が、背丈は並だが、骨格逞しく、兵法鍛錬の偉軀を持っていたせいもあるが、そのおそるべき気力は、聞いた者を驚愕させた。感動した者も尠くなかったが、

「誇大な話だ」

と、皮肉なうすら笑いで受けとる者が多かった。

主馬助が倒れたのは、その寺の裏門の近くであった。

真弓の証言では、刀をひっさげたまま、築地の角からそこまで歩き、ばったり倒れて、再び立たなかった、と。

「下手人は誰か？」

闇の矢は誰が放ったのか。

その肝腎のことよりも、主馬助の豪気がもっぱら城下の噂の中心になった。武道が尊ばれる時代であった。

出来る、といい、出来ないと反駁し、二歩や三歩ならば、と言い、はては、

「その娘の見誤りであろう」

と、無責任な評価が下された。

「だとすればもとより悪気ではあるまいが、何せ、気弱な娘のことゆえ、動顚したのではないか」

むしろ同情的にそう結論したがる者が多かった。理解を示した心算なのが、かえって始末に悪い。

「いいえ、間違いありませぬ。あの角で、おでこをぶつけそうになったのですもの」

「そのあとだ」

「ええ、すぐでしたわ、まだ、お笑いになった声が……」

語尾が夜気を裂いた矢音と呻きでふっと途切れたような気がした。

矢は前から来ている。

二間ほどのせまい路である。土塀と築地塀にはさまれた道。築地塀の角をまがったのだ。かれが倒れたところは、土塀が切れて裏門になったところだ。築地塀の内は、藩公代々の墓所もある名刹で、土塀の方は、尼寺で小さい。寺塔も低く境内も狭い。

下手人がそこに隠れて、弓を引いたのではないか。

主馬助は一瞬に、矢の越し方を識り、その方に歩いた——あるいは、かれの眼は、下手人の影を見たかもしれぬ。死んで尚、主馬助の双眸は、無念をあらわに、かっと瞠いたままであった。その眸は、影をきざみつけたかもしれぬのに、瞳孔をひらいて、虚しくなっていた。

主馬助は一刀流をよく使う。いささか腕自慢でもあった。抜刀はあとか先か、真弓は見ていない。が、察するに、闇の矢が飛来するのを、断ち切らんとして抜き打ち、仕損じたのではないか。夜気を裂く矢羽の音を聞きとって抜刀したのは、並々ではない。距離十間の近さとあれば、尚更である。

「いつかは、こうしたこともあろうかと思うていたよ」

いつの世でも、わけ知りぶる者がいる。

「一刀流自慢が、墓穴を掘ったな」

物頭の速見聯左衛門が、扇子をふりまわして、日ごろ矢切りのワザありなどと高言吐いていたのが原因じゃよ、と見ていたように言った。

「すりゃ、矢切りの論争が生んだ意趣か。なれば下手人はすぐにもわかる」

弓の達者に絞れるわな、と、持筒頭の深作左兵衛が言った。この男は当初から面白がってい

た。犯行が弓矢だということで、自分に関係ないと、気楽なところからくる無責任さである。

「弓の達者は、家中にまず十人……」

いや、十間の近くなら、さほど達者でなくとも射れよう、と反論する者もあったが、闇夜に加えて五寸も貫き通すのは、強弓でなければ、と言われて口を噤んだ。矢切りを誇る主馬助に、空振りさせたのだから、その断定はかなりの説得力を持っていた。

主馬助を殺した鷹羽の矢には、格別の特徴はない。おのおのの矢に、朱を以って名を書き入れたり、彫りこんだりする者もいるし、家紋を焼印する者もいる。また、極く少数ではあるが、矢柄を木賊で磨く者もいる。犯行に使った矢には、これら一切の特徴がなかった。個人のものではなく、家中の備品であり、弓組の者なら、誰でも持ち出せるものである。

主馬助はこの日、友人の朝吹弾十郎の家に行っての帰りであった。弾十郎の証言では、碁を三番、打って、帰った。小酌したともいう。

そういえば、真弓はぶつかったとき、酒が匂ったことを思いだした。足をとられるほどの深酒ではなかったと弾十郎は証言したが、その酔いが、〝矢切り〟の腕を鈍らせたのは疑いない。

真弓も、勿論、調べられた。

女の腕で強弓をひけようとは、誰も信じなかったが、真弓がこの際、調べられたのは、やむを得ない。

そこに通り合わせたことの不審は、証言があって解明された。真弓は売掛金をとりに行ったのだ。

弓組小頭菊名伝右衛門は、強弓をひく。身の丈六尺に垂んとする巨漢である。紙縒りを腕に二重に巻いて力瘤を入れると、ぷつんと切れる。そんなことを自慢にする男であった。

酒好きで女好きときているので、強弓をあつらえても、金を払わない。

「今日は、どんなことがあっても貰うて来ないと」

と、弓師藤八に強く言われて出かけた。四代目を継いでいる藤八に、真弓の姉が嫁ぎ、父母が歿ったので、真弓はこの家で育った。真弓という名前も、父が弓好きだったせいで、姉は弓乃と名づけられている。藤八は弓師としての腕は評価されていたが、博奕好きで、いつも家の中は火ノ車だった。職人が居つかない。真弓は掛金を貰わなくては家に帰れない、と、言い張って、坐りこんだのだ。こんなことを口にしたのははじめてで、恥しかったし哀しかったが、義理の仲で面倒かけている以上、しかたはなかった。

菊名も悪い男ではないが、無い袖は振れぬ、と、いつも追い帰していたのだ。可愛い顔に必死の緊張を見せた真弓に、しかたなしに、どこからか、都合してきた。

「恥を言うようだが、わしが引き止めたのさ。金があれば、すぐにも払って帰したろう」

それ以上は言いたがらなかったが、真弓が被害者と行き違った偶然性は、菊名の言葉で立証されたといってよかった。

ところが、その菊名が殺されたのである。二日目だった。菊名は井戸端で死んでいた。顔を洗うために、肌脱ぎになってつるべで水を汲み上げようとしたところを狙ったものらし

い。

矢はみごとに背中から心臓を貫ぬいていた。

これも同じくらいの距離から放ったのか、矢尻から五寸ほど、やはり射附節（第一の節）まで突き出ていた。菊名くらいの身分では屋敷もさしたることはない。裏塀は柴垣で、小径が通っている。誰でも中をのぞける。菊名は、毎朝、的場にゆくから、起きるのは早い。裏の小径から他人に見つからず狙うのは至難ではない。

ただ、不審なのは、指懸が落ちていた。裏の通りである。これを拾った者がいる。

結城弾次郎。まだ二十五歳だが、日置流の達者で、藩中五本の指に入る。ゆくゆくは指南番になるであろうことは、誰しも認めていた。

その朝、的場に同道するために、誘いに来て、それを拾った。

「面妖だな、と思うたわ。誰ぞ落したのであろう、弓ひくのに困っていよう、そう思うてな」

他の物なら、拾わぬ。弓とる者には分身に近い。

指懸には柔指懸と堅指懸とがある。落ちていたのは後者である。親指の入るところを角を刳って堅く作ってあり、弦のかかる所の溝（弦道）がある。三指モノ、四指モノがあるが、これは前者である。

同輩や調べに当った役人の目にも、この指懸が下手人のものと思われて、

「すぐにも、そやつの名が明らかになるであろう」

と、思い、あるいは口にした。

だが、それも小半刻と経たぬうちに、意外なことが判明した。件の指懸は、殺された菊名の物だったのである。

これは多勢が証言しただけではない。革屋町の弥造という者が記憶していた。菊名の依頼で制作しただけに、特徴は明らかであった。

「そ、それでは下手人の指懸ではなかったのか」

当然、疑いは弾次郎にかかった。

しかし、二つの証拠が弾次郎の疑いを霽らしている。一つは、かれより先に、そこに指懸がおちていたのを見た者があったこと。それもあの事件以来、城下見廻りの役人を増やした。その小役人であった。

使い古した指懸は、皮のケバが汚れを甚しくするから、道に落ちていると、普通の者なら、手を出さない。小役人も、何じゃら腐ったような皮切れが落ちていると思った、と言っている。

その男が、通りに出て間もなく、弾次郎とすれ違っているのである。

弾次郎の疑いは霽れた。ただ、被害者の指懸がなぜ柴垣の外に落ちていたかという疑問は残したまま。

弾次郎への疑いを残していたのは、真弓だけであった。

（あのとき、たしか、弾次さまの名を……）

そう聞えたのだ。死に臨んだ者の言葉には真実感がある。真弓は、あの最後の言葉は誰にも

洩らしていない。苦しみながらだったし聞き違いということもあるのだ。勝気で若かったが、真弓にはそれだけの慎重さがあった。

2

結城弾次郎に就いては、多くを知らない。が、弓師藤八の客として、真弓は何度か口をきいている。快活で、話は面白いし、ちょっとおっちょこちょいのところがあるが、若い娘にとっては、気軽に話のできる男だった。若い同士という気持もある。

結城の方でも、弓の直しや、矢羽に注文をつけに来たりして、真弓と冗談口を交すのを楽しんでいるふうだった。

十七歳の真弓は、花がひらいた感じで、肌も美しく、生き生きとした表情が、結城の目には、眩しく感じることがあった。

その程度の間柄なのである。若くて健やかで、気のおけない感じだし、

(こんな御方が、旦那さまなら……)

ふっと、そんなことを思うことがあるのも、真弓が年頃なのであろうが、事実、結城の人がらが、好ましいのは事実だった。

だが、あれ以来、真弓には、その人柄も、何か、偽装のように見えてきた。

「いつぞや頼んだ矢が出来たら、持って来て貰いたい」

と弾次郎から使いが来たとき、真弓は、あたしが持ってゆきます、と申し出た。

弓術者は、矢柄や矢羽にも注文をつける。

中には、矢篠のうちから、あれこれと選ぶ者さえいる。それくらい、おのれの手に合う物は少ない。

矢篠の二、三年生くらいのものを秋口に切って、よく乾かし、これを火で撓めて、外皮を去り、よく磨く。狂いをもっとも嫌うから、この段階で、残るのは十本のうち三本である。

こうして残ったものは箆として矢作りする。箆の太さは、周囲七分乃至一寸以内。目方は六匁以上十匁以内だ。ところが強弓をひく者は、これでは、

「軽すぎる」

という。

弾次郎が要求したのは十二匁。これに筈と矢の根をつけて、羽根を剝ぎ付ける。筈には竹、木、又は角を用いるが、矢の根は鉄とはかぎらない。真鍮を好む者もいる。羽根は、鷹又は鷲の尾を二つに裂いて(長さ五寸、幅六分以内)膠でつけるのである。

これらのアクセサリー、たとえば矢尻を重くすればいいようなものだが、バランスのためには、平均化していなければならないので、弾次郎は、十二匁の箆を要求したのである。

真弓が矢束を柔紙に包み、さらに油紙で上蔽して、抱えてゆくと、弾次郎は喜んで迎えた。

「待っていた。やはり真弓さんがくると思っていたよ」

と、招じ入れて、ろくに矢など見ないで、到来物だが、といい、干菓子を出した。

「お茶の支度は、あたくし、致します」

弾次郎はつい先ごろまで妹と二人暮しだった。妹が嫁したあと、独身暮しをしている。

真弓は水を汲み鉄瓶を火鉢にかけて、煎茶の用意をした。そうしたことは、義兄の家でいつもしていることだったが、独身の男の家ということが、意識にあるせいか、何か若妻になったような嬉しい気持だった。

「――こうやって茶を飲んでいると、あれだな、なんだか、夫婦になったような気持だな」

弾次郎は照れ臭そうに言った。

「ええ……でも、あたし」

弓師の家の者が、武家の妻女になれるはずがないと、真弓はあきらめが先に立っている。ただ、こうした雰囲気は、正直なところ若い娘のあこがれといえた。

「きらいか、おれが」

「いいえ、そんな、嫌いだなんて」

「ならば、よかろう、夫婦になろう」

弾次郎の逞しい若い腕が抱き竦めてきたとき、まだ真弓は、かれがそこまでするとは思わなかった。一時の戯れ心か、衝動的なものと思った。それだけ、武士というものを高く買っていたといえる。

だが、弾次郎は本気だった。若さと、健やかさは、女性が魅力的に見えたとき、いつ、どこでも爆発するものを持っている。真弓は、唇を吸われ、ただ惑乱して、反射的に抵抗をつづけるうちに、帯は解かれ、男は入ってきた。

「きらい、きらい」

真弓は抗いながら、夢中でそう叫んでいた。

弾次郎が、身分を忘れて、乱暴なふるまいに出たのは、あのときのことを糊塗するためではないか。真弓は、主馬助の断末魔の言葉を誰にも饒舌ってはいない。が、下手人は、真弓を見たはずだ。主馬助が最後に何か言ったのも、知っている。心当りの名前を洩らしたにちがいないことを。

弾次郎の唐突な行動は、真弓の疑いをさらに濃くしたのである。

だが、その〝下手人〟という疑いとは別に真弓の心に変化が起ったのは、娘心としての当然かもしれない。

処女の身に、はじめての男の手は、おぞましさと羞恥の錯綜した記憶を残した。それは日が経つにつれ、強烈に真弓を浸した。

五日目に、真弓は、また抱かれた。弾次郎の家に用はなかった。が、父母の墓詣りに行った帰りに、足がひとりでに、そちらへむいた。

弾次郎は、弓の空引きをしていた。空引き用の弓は、日ごろのものよりさらに強く弦を締めてある。腕を鍛えるためである。曇り空で、雪でも催していそうな寒い日だったが、びいぃんびいぃんと、弦音が大気の中に、爽やかな音を伝えていた。

「来たか」

と、弾次郎は振り返りもせずに言った。

片袖を脱いで隆々たる筋骨を見せて、弦を引き絞っている。

「入るがよい」

真弓は、そのとき、目に見えぬ糸で引き寄せられるように、部屋の中に入っている。そして、弾次郎の匂いの中で、からだをひらいた。

（こんなつもりじゃなかったの、こんなつもりじゃあ……）

庭の外から、そっと一目でも見ることができればよいとの淡い望みだったはずだと、真弓は汗にまみれて心の中で叫びつづけた。

それは世間ていや義兄たちの冷たい蔑みの眼を意識しての詭弁だったろう。真弓はその日、弾次郎の指で愛撫されるだけで、そこが濡れるのを知った。

主馬助と菊名を射った下手人だとしても、真弓は忘れられなくなっていた。物奪りではない。武道の意趣であれば、勝者と敗者がいるだけである。真弓のような町者には、武辺の意地はわからない。武士には義務と責任がある。世界が違うのである。その身分差は、また、二人の結婚をも阻んでいた。

「いいのです、弾次郎さま」

男のからだに、ひしとしがみつき、甘美な思いの中で、うわごとのように真弓は叫ぶのだ。

「奥様にして頂こうとは思いませぬ。真弓はこのままで、このままで……」

愛されるだけで倖せなのだと、真弓は心の底から思った。自分でも恥しいくらい、四肢が痺れる陶酔を識った。

武士と町人の婚姻は皆無ではない。時代が下るにつれ、そうした縁組みも増えてきてはいるが、原則的に、武家と町人や農民では、風習も格式も違ったので、何かと面倒なことが多かった。

ことに、この備後の福山藩水野家中では、藩祖が、戦国時代に勇名を轟かした水野日向守勝成だけに、武門の掟は厳しい。すでに、時代は、勝成、勝俊、勝貞、と数えてこの元禄十年は、勝種の代になっていた。

この勝種は名君として聞えている。幼年にして家督したために、幕府から〝福山目付〟が派遣されたほどで、ずっと江戸で育ち、侍講などにも名儒を得て、仁慈厚い君主に成長した。その在世中は、ことにかれが国元にあるときは、罪人が一人もいなかったと伝えられる。また農政にも心して、飢饉のときなど、村方借物の利息を免除したり、五斗一石の小百姓をも能々いたわったし、他藩のように、年貢が納められない者を無情に〝追上げ百姓〟として田畑から引離すようなこともしなかった。

その勝種の治政に、主馬助、伝右衛門の殺人が行われたわけである。

この殺人は、そのまま下手人知れずとなろうとしていたが、意外にも、妙な噂がひろまったのである。

「下手人は、やはり結城弾次郎ではないか」

その噂が姉夫婦の耳に入ったときは城下で誰知らぬ者はないところまで、ひろがっていた。

真弓は、姉の口から聞いた。呼びつけられて、何事かと思って行くと、弓乃と藤八がおそろしく真剣な顔で坐っていた。

「おまえ、また結城様のところへ行ったのだろう」

狐のように目をひき吊らせて、姉は言った。

「評判だよ、おまえ。あたしゃ亡くなったお父っつぁんに済まない、うちの人にも顔むけ出来ないよ」

「姉さん、そんな」

「ふしだらな妹を持って恥ずかしい」

「姉さん、あたし、そんな……」

「真弓。ふしだらでないとしてもだ。お前のことを世間で何と言っているか知っているか。れいの事件と関りがあることなのだ。わしの弓師としての立場もある」

藤八が心配しているのは、そのことだったらしい。

真弓は、主馬助から、下手人の名を聞いた。それが結城弾次郎の名だったらしい。だから弾次郎は、その口をふさごうとして、真弓を誘惑した。真弓は、弾次郎の男ぶりにまいって、毎日入り浸りだそうだ——そういう噂であった。

真弓は、聞いているうちに、蒼くなり、それから羞恥で赧くなり、からだが、わなわなと顫えて、顔があげられなかった。城下の人々に、弾次郎とのまぐわいを見られたような恥しさで

あった。そして、やはり多くの見るところ、弾次郎が下手人だったのかという哀しさだった。

（誰が、そんなことを言いふらしたのかしら）

ある意味では的確であった。

主馬助が、真弓に洩らしたことは事実なのだから。とすると、それを目撃した者——

（そうだ、その人こそ下手人なのだ）

とすると、弾次郎は無実ではないか。

「お姉さん、結城さまは無実ですわ。だってそんな噂をひろめた人こそ……」

「お黙り、真弓。なんということを。噂は噂ですよ。誰が言いだしたなんてことじゃない。世間の人が、みんな、そう思ったからこそ噂になるのじゃないか」

「いいえ、いいえ、そうじゃないの……」

真弓は、上手に説明できないのが、もどかしかった。

「とにかく、当分、家を出ちゃいけないよ」

藤八に釘を刺された。

それだけなら、まだよかった。噂が噂として、聞き流されるうちはよかった。が、下手人の心当りがほかにないとすれば、目付が黙っているはずはなかった。

上司を通じて、結城弾次郎に出頭を命じて来た。同時に、弓師藤八のところにも、役人が来た。

真弓にも事情を聞くことがある。というのである。これは町奉行の方から下役と足軽と小者

が出張って来ている。

町には、代表になる宿老が居り、この月の大当番の利兵衛が蒼い顔で同道していた。

「お調べには、正直にお答えするのじゃ。万一の事があれば、一族類縁、町内の者にまで迷惑が及ぶ」封建の世の治安行政はそうした相互看視で、保ってきていたのである。

町方の御会所で下調べにあたった下役は、眼付の鋭い、鼻の尖った男で、ねっちりと、真弓の口を割りにかかった。

「主馬助は下手人の名を洩らしたはずじゃ、隠し立てはならぬ。申せ、聞いた通り申せ」

それだけは言えない、死んでも弾次郎の秘密は洩らせないと、歯を食いしばった真弓だったが、

「本当のことを言えばいいのさ、聞いた通りのことをね、お前には何の責任もないのさ」

姉が、叱るように、媚びるように、くどくどと、言いつのるのに、真弓は、いたたまれなくなってきた。

「はっきり聞いたわけじゃありません、声だって、それは、もう、虫の息だったし、だから……」

「それでよい、聞いた通りでよい」

「ですから、はっきりした言葉じゃありません、私の聞き違えかもしれないし」

「それでもよい、申せ、判断は此方でする。申せ」

こうたたみこまれると、もうそれ以上、言い逃れはできなかった。

真弓は、言ってしまった。

「――弾次、と……」

「結城弾次郎か、そう言ったのだな」

「いいえ、ただ、弾次と……そう聞えたんです。ひょっとすると、別の名前かもしれません、団十とか伝次とか」

「よい、それだけ聞けばよい」

下役は足軽らと、目を見合せ、頷いた。思った通りだ、という表情だった。

弾次郎の悲運は、はじめに、容疑者にしぼられた、藩中の弓ノ名人、十人の中に含まれていたことである。

何しろ家老以下、およそ二千六百人もの士卒がいる藩中での十人である。その確率と名前が出たことで致命的だった。

「もしッ、あの、結城さまが、結城さまがお縄になるようなことがあると、あたし、困ります。いいえ、違います。結城さまじゃありません、あたし、あたしの聞き違いで、そうなんです、もし、お役人さま、あたし、いまのは、あの……」

支離滅裂なことを口走って、真弓はとりすがろうとした。

「こりゃ、余分なことは申さずとよい、もはや其の方には関係のないこと」

役人たちはばたりと帳面を閉じて立ち上った。

「いいえ、違います、お許しを、いまのは、あたし、嘘です。刀根さまの仰有ったのは、あ

あ、あたし、何を言ったのかしら、いいえ、あたしの聞き違いなんです」

半狂乱になって、取消そうとする真弓を、弓乃や藤八が押えつけた。

仕様がない子だねえ、あたしたちが世間さまの物笑いになる。とんでもない御方にひっかかったものだと、夫婦は真弓の手を離さず家へ帰っても、職人たちに言いつけて軟禁した。

梅雨明けが近づくころ、お城の瓦が剝がれ飛ぶほどの暴風雨が二タ晩つづいた。この季節にはよくある颱風だったが、御入牢となった結城弾次郎は、その嵐の中に破牢している。

前にも述べたように、福山の御牢は罪人がいないので、永年無用の長物になっている。それだけに格子組みに腐りがきているのに牢目付が気がつかなかった。強弓をひくだけに弾次郎の腕は強い。嵐の音にまぎれて、格子を破り、逃走した。

当初から、弾次郎は、無実だと叫んでいた。

「拙者が殺ったのなら、指懸のことはどうだ、ちゃんと証人もいるではないか」

と、抗議したが、その点は役人のほうにも自信がなかったのであろう。

「主馬助殺しの容疑だ」

と、言い張って、収檻したのである。

「いずれお取調べがあれば、はっきりする」

「はっきりするさ、無実ということがな」

弾次郎は臆面なく言い張った。その二日後に脱牢している。風と闇にまぎれて、福山城下を何処ともなく、行方を晦ました。

3

「困った奴だ、人を殺した上に、逃げたか」

朝吹弾十郎が店へ来ての言葉だった。

「一族ということで迷惑しておる。しかし一族ということを抜きにしても、日置流の弓の道にたずさわる者として恥かしいことだ」

朝吹は従兄になるという。弾の字を名に冠するのは、日置流弓術の誇りである。代々、弓で聞えた家柄であった。

「弓のみにかぎらず、兵法使いにあっては、きびしい道を歩むゆえに、誇りを持たねばならぬ。高慢もよし、自認もよし。されば、武辺として、意趣遺恨のこともあろう。果し合いで、殺すも殺されるも、詮なきこと。だが、御牢を破るとはのう……父祖恩顧の主家を捨て逐電するとはのう」

店にいた者も、朝吹の言葉に頷き同情した。

この福山の水野家は、武勇を以って聞えている。藩祖日向守勝成は典型的な戦国武者で若年には槍一すじに運命を托して諸国を流浪し、加藤清正や黒田長政に仕えては喧嘩をして飛び、この地の十万石の主となってからも、島原の乱に老年ながら出陣し活躍をした。

二代目の勝俊百助も、力で蜂須賀家の姫をものにし、生れたのが、十郎左衛門成貞で、旗本無頼として聞え、幡随院長兵衛などを斬って、切腹しているし、勝成の弟の忠清は、大坂夏の

陣で、青山伯耆守と先陣争いの喧嘩が戦後まで尾を曳いている。これなど、徳川家康が乗り出して裁決したほどだ。

気性の荒さは、水野家の血すじだ。そうした気風だけに、家中にも、武張ったことを推奨する空気がある。少々の羽目をはずすことも許される。

時代こそ違え、藩祖が、横紙破りの荒武者で、死去するや、福山城の守護神として、神様に崇められている。遺骸は賢忠寺に葬られたが御霊を城の最上階に祀ったほか、八幡社地に神殿を建てた。八幡大菩薩はいうまでもなく、勝成の信奉した武神である。勝成のそれを徳勝霊社と称う。

こうした事情があるだけに、家中での決闘は許容される。三代までは寵臣が追腹しているほどだ。これには事情がそれぞれあるが、この元禄の代には関係ない。ともあれ、それほど、武張った家柄であった。

したがって、今度のようなことは、兵法の意地としての見方は他家よりも甘く寛大だが、それだけに、弾次郎の脱走は、厳しく追及された。

とんだ傍杖を喰ったのが朝吹弾十郎である。

「一族の身なれば、行方を突き止めよ」

美作守勝種は名指しで命じた。

これは単に追捕の役目、というものではない。役職によるところの追捕ならば、日限もあり、お座なりでもよいが、血縁という点、同じ弓組、という意味での追捕の役目は、半永久的である。

（むごいことを……）

同じ縁に連なる者は、自分が免かれたことにほっとしながら、朝吹の前では、主君の仰せを、憤って見せた。

「これが、父か兄かならば、まだ、左様な責任もあろうが、従兄ではのう」

「左様じゃ、それにさ、同じ弓の名手ということで、こうなれば、強弓の名声も、かえって、禍いしたのう」

これらの一族たちの、同情や憐愍に、朝吹はあきらめの笑いを口辺にきざむしかなかった。

「運命でござれば」

その複雑な翳りのある微笑が、見ようによっては男らしく見えた。

朝吹は、旅支度をし、自慢の強弓をかいこみ、弾次郎を追って城下を出た。弾次郎の母は京の貧乏公卿から来ている。その縁故で、京を目ざしたと思われた。

ところが、それから四日目に、意外なことが起った。

いや、意外というくらいでは済まない。福山藩にとっての一大事であった。

美作守勝種が急死したのだ。それも、異郷でのことであった。

美作国津山で十八万六千石の森美作守長成。これは森蘭丸などの一族の裔だが、この家が少し前に潰れている。長成（二十七歳）が死んだのは前年のことだが世嗣がないため、死に臨んで家臣関式部を養子にして後を嗣がせんとしたが、この式部が江戸へゆく途中、伊勢桑名で失る。

心して封を襲うことが出来なくなったのであらためて、この年八月二日を以って、森家は断絶ということになったのだ。

もっとも、十八万六千石のうちから、父内記長継に二万石を与えられたが、津山の城は、引渡さなければならぬ。

この城請取りに福山藩が命じられたのである。地ノ利もあるが勇武の家柄が見込まれたのであろう。地ノ利と、軍勢の数からいえば、岡山の池田侯や松山の安藤氏でもいいわけだ。

お家改易となれば、それが御法度によるものでも、家臣たちの気持は複雑になる。少し後のことになるが、赤穂の浅野家で、遺臣が籠城切腹しようとしたのは内匠頭と吉良上野介の喧嘩両成敗の片手落ちの忿懣によるとされているが、そのせいばかりではない。武士というものが、そういうものであり、封建制度のひずみである。明日から路頭に迷うという現実が、プライドの高い士分には、生きていてもしかたがない、と思わせるのだ。

御法度による改易でも、他国の軍勢が、ものものしく押寄せて、力で明け渡しをもとめるのは、そのためである。武家の社会はサラリーマンの転任とは違う。

この城請取りの白羽の矢が立てられたので美作守勝種は、軍勢を率いて、出かけた。

福山は備後といっても、東寄りで、備中との国ざかいまで、十キロとない。早朝出発して、国ざかいを越したのが、まだ七時ごろだったが、朝雨が降ってきた。早くも秋の涼気が感じられる朝雨で、行列が用之江のあたりにさしかかったとき、勝種の乗物に矢が射込まれた。

晴天だったら、馬上で即死したに違いない。乗物の分だけ浅傷だった。矢は、乗物の引戸を

貫ぬき、勝種の胸をななめに刺した。

「殿が！」

家臣たちの狼狽は一通りではない。

真蒼になって、瀕死の勝種を手当てする一方、激昂した武士たちは、矢の飛んできた方向に走った。が、不案内の土地だし、丁度、竹藪があって、小溝が道の間に流れている。一矢を射こんだだけで、暗殺者は姿を晦ましてしまった。

勝種が死んだのは、帰城して十日ほど後。八月二十三日。享年三十七。水野家由緒書によれば、〝町在之藪医者迄不残登城〟とある。手をつくしたが、駄目であった。

家中は暗澹とした空気に包まれた。むろん江戸へは急使が立つ。

「美作守急病」

であり、

「城請取りの出陣御辞退」

御寛宥を請うものであった。

むろん、幕府のうけは悪くなる。が、仕方がない。緊急事態である。急病とあればしかたがないから、幕府では、城請取りを松平若狭守と酒井靱負佐に急遽代えている。

後追うようにして、福山藩からは、嫡子松之丞勝峯の家督相続願いが出る。〝重病につき万一を慮って〟とあるが、実は、このときすでに勝種は死んでいたらしい。こうした誤魔化しはどこでもやった。生前に後継者を定め、本来は、将軍にお目見得して、家督相続許可を得てい

ないと、何十万石でも断絶というのが、御定であった。

もっとも、こうした場合も、御用部屋との関係や父親の忠誠のことや諱代外様の相違などいろいろの事情が介在するのだが、このころになると、緊急の場合の特別措置たる届け切りが、認められるようになっていた。

発病（狙撃）されて十一日目の死であるから、その間の備後と江戸の往復の時間を考えると、辻褄が合わない。お役所仕事がスローモーなのは、今も昔も変りがない。

こうして、五代目に立ったのは松之丞勝峯。無事に家督はしたが、これが、なんと生れたばかり、自分の名前も知らない当歳の君主なのだ。

勝種が家督したときも三歳だったし、家老たちが補佐して、江戸で育ち、立派に成長したことは前に述べた通りである。したがって家中では、その点に関してはそれほど心配していない。

問題は、

「下手人は？」

誰か？　誰もが、結城弾次郎の仕業と見たのは自然である。

やはり強弓でなければ、引戸を貫ぬいた上に人を殺すほどのことは出来ない。竹藪からの距離もそれを感じさせた。

「いったい朝吹は何をしているのだ。こんな近くに彼奴がいたというのに」

「そうじゃ、朝吹めは、京で島原の女などにうつつになっているのではないか」

「そうとばかりは言えまい。江戸の方に探しに行っているかもしれぬ。それに、弾次郎めとて、このあたりに潜伏していたとも思えぬ。今度のことを聞いて、待ち伏せしていたのではないか」

これも納得できる見方だった。が、それにしては、もっとほかの場所があったろう、と、賢しらに言う者がいた。

「美作は山国じゃ、津山までの道には、もっと襲い易い場所がある。弾次郎が遠方から舞い戻ってきたのなら、御城下に近いあたりにうろうろしていたとは思えぬ」

なるほど、と、その解釈にも、頷く者が多かった。殊に、弾次郎と断定されたのは、勝種を傷つけた矢には、羽根下と、俗におっとり節ともいう袖摺節の間に紋があったことだ。

三ツ星。

黒い点が三つ。それは一寸、偶然何かで傷ついたかのようにも見える。釘の先を焼いて三点打つ——三ツ星紋のようにも見える。

容疑者が別の誰かであったなら、さして問題にならなかったろう。

結城弾次郎の家紋が三ツ星。それも黒三ツといわれる黒い三ツ星紋だったのである。

「だが、そりゃ面妖じゃ、弾次郎ならば、わざわざ、おのれの仕業と言い触らしていることになる。これは、誰ぞが、弾次郎の仕業と思わせるための企みではないか」

それも一理あった。が、その見方は、すぐに打ち消された。

「余人ならば知らぬこと。結城めは、恐れ多くも、殿をお怨み申していたに違いない」

「左様じゃ、無実だと喚いていたからのう、その怨み霽らし。むしろ、おのれの仕業とわか

るように、家紋を印したのではないか」

そうだとすれば、いまごろ、どこかで溜飲さげているかもしれない。

「一体、討手は何をしているんだ」

結局、朝吹弾十郎がのろまで、役立たずのせいだと、怨嗟の声があがってくる。

その渦中に、ひょっこり、当の朝吹は戻って来たのである。

「故殿の墓詣りせねばならぬと思うてな」

そんなことを言った。

そして、数日、滞在した。

彼奴、あのような口上で、討手を返上しようというのではないか。と、うるさい世間の眼は、朝吹の心底を見抜いたようである。

誰でもあてのない仕手旅など、好きなはずはない。

「なんのかんのと言うて、湯治場めぐりや、遊女屋めぐり、めったにゆけぬ遠国の名所旧蹟見物が出来て、よいではないか」

というのは、見当違いの眼で、気まかせ風まかせの楽旅で、いつでも戻って来ることが出来るなら、確かに楽しい。

が、結城弾次郎を討ち止めるまでは主命を果せぬとあっては、一生旅になるかもしれぬ。帰郷できぬ旅ほど、むごく、辛く、悲しいものはあるまい。

「——用之江というところで聞いてまわったのだが、やはり、人相風体、結城弾次郎に相違

なかった」

と、朝吹は言った。

「身供一人では、西と東に見当違いをする憂いもある。他に四、五人、探索方を増やして下さらぬか」

朝吹は上司を通じて、家老に申し出た。

「そのことは考えておる。とりあえず其方だけでも出立せよ」

朝吹は、ひょっとして、御役御免になるかもしれないとテにして来たらしいふしがある。

討手仰付けた主人が死んだのだ。主命はそれで終った、という見方もある。

もしも病死したら、あるいは、そういうふうになったかもしれぬ。が、結城弾次郎が主君殺害の下手人ということになっては、かれの役目は延長されるしかなかったのだ。

しかたがなかった。朝吹弾十郎は出立することにした。福山に戻って二日しか経っていない。朝吹には子はなかったが妻がいる。両親もいる。その夜、妻を抱いて、きぬぎぬの別れを惜しんだ。

「これきり、また永のお別れと思うと、悲しゅうてなりませぬ」

「辛抱せい。なあに、半年か一年もすれば、重役たちも諦めるだろうさ、下手人がわかりっこない」

「え？　でも結城どのを」

「さ、さ、その結城が、どこにいるかわかるものか。この広い日本中でのう」

「あたくし、ずっと考えたのですけれど」と妻女は、余後の快感がまだからだを火照らしている中で、うっとりした声で言った。
「いっそ、江戸へ出て暮したら如何でしょうか」
「江戸でか？」
「はい。あなたさまは、討手として、六十余州を訊ね歩いている体にして、ひそかに、わたくしと、江戸で」
「そんなことをしてみろ、切腹ものだ」
「でも、広いお江戸でなら。それに私、もう一人寝はいやでございます。春の夜も、秋の夜長も、寒い冬の夜に、ああ、気が狂いそう」
「我慢せい、一年か二年だ……」
そう言う声にも、自信はなかった。
朝吹弾十郎は、あの日と同じように強弓をかいこみ、箙を肩にして出立した。
その翌日、真弓の姿も、弓師藤八の家から消えている。

4

世間の噂というものは無責任なものである。
「真弓は朝吹どのの後を慕っていったのではないか」
「浮気の性であったろうな。前には結城でこんどは朝吹か」

「いやいや、前の晩に、弓師の裏のあたり怪しい影が徘徊していたと申すから、こっそり結城めが、誘いに来たのかもしれぬ」
「まさか……」
主君を射殺すくらいの男だから、やりかねない、と、断定する者が多かった。
「しかし、あの娘は変っておるぞ、ひそかに弓の練習をしていたという」
「ほう、女の細腕でな」
聞いた者は意外な面持ちだった。
弓師の義妹だから、弓の練習をするのも、さして珍しくはない。が、結城が脱牢してからのことなのだ。
男を知ったばかりの女の胸の炎を、そうしたことでまぎらしていたのだろうか。
手をとって教えたのは、正木弾之進保高。日置流の名手である。齢六十をすでに越しているが、いまだに、福山家随一といわれ、その腕を賞讃する者は、いや備後はもとより山陽道比類なき腕であろう、と、言った。語り草になっていることに、浮き的で一組放って一矢に変らなかったといわれる。
これは的場の一間てまえに的を屋根廂から吊し、射つ。
矢は一組四本を定法とする。連続四本を放ったが、いずれも的の黒の中芯を貫ぬき破って、埒に刺さった。
一矢が破った穴を、そっくり三矢が貫ぬくとは尋常の腕ではない。その穴が一矢のそれと同

じであったというのだ。

それから、何年か経っているわけだが、かれの腕は、衰えを知らぬ。そして、結城弾次郎も、朝吹弾十郎も、同じく、かれの弟子であったのである。

弓と矢のことに就いて真弓が、よく識っていたのは当然であるが、本式に射ることを習ったことはない。

あらためて、弓の持ち方、矢の懸けかたから、真弓は習った。

矢道の距離は十五間。初歩の者、弱腕では、五間からはじめる。

真弓は熱心だった。五間からはじめて、一間ずつ間数を延ばして、十五間に至るまでに、何ほどもかからなかった。門前の小僧、習わぬ経を読む、という。真弓も知らず知らずのうちに、弓矢のコツは身につけていたのであろうか、その進捗ぶりには、師も舌を巻いた。

筋もよかったが、師もまた、すぐれていた。良き師は素質にとって伯楽の役をなすものである。数旬を経ぬに〝見込み〟を云々するところまで、進んでいる。

弓道に於ける〝見込み〟とは、きって放したあと、矢の落ちつく所を見届けることである。その矢の走り具合如何によって、動作の不可なるを知るを得る。

矢が前（右）または後（左）にそれた場合は、押手勝手が釣り合わなかったか、足踏が歪んでいたか、または胴（筒）造が悪かったか、あるいは物見が不十分であったとか、要因があり、それを識ることで、未熟の部分を錬冶するのである。矢が震えることがあれば、片離れか、懸口に弦が触れた場合が多い。そうした諸々のことを識る眼が数旬を重ねるうちに、真弓にも養

われて来ていた。

「――見込みとは、未来身じゃ、足踏、筒造、弓構は過去身にして、打起、肘力、引取、会、離は現在身。未来身の大切なるは心映えよ」

老師の教えは、若木の育つように、真弓を弓の達者に作りあげていった。

すでに世は元禄であり、武道は衰微し、弓術もまた堕していた。嘗つて日置弾正が弓矢を以って戦場疾駆し、鬼神と謳われたところから発した斯道の精神は失われ、的にあてることのみに汲々とする者が多い時代であった。その弓七道の心を、老師は原点に戻って説き、示し、育てたのである。

強風の中で身の動きを恣意のままに行い、雨中で会離の妙を悟り、雪中で心眼の虚を正す。すなわち霏々たる降雪の中で雪片の一を覗視して、白一色の中から、おのれの目付した雪片を見分けることである。この日置流の極意〈雪の目付〉は、真弓の心に強い影響を与えた。

「的の錐もみを見よ」

との老師の言葉を後に、江戸の雪によって体得している。

また〝足踏〟を大事とし、一気発動の元たること、いうまでもなく意動いて形を踏むとなし、目中を配するに及んで、〈蜘蛛の尺〉、闇夜の規矩の真髄を識った。

伝書によれば、

〝目中に用口伝又蜘蛛の尺と謂ふ、心は蛛忽を造らんと欲して、追風を請ふて向ふの木にも雲にも目付を為して、吹付けらるる義也〟

と。

目付に権実の別あり、木は実也雲は権也、彀の遠近によりて仮りに雲に目付を為すは、実は木に至るべき義也、木は則ち鵠的の謂ひ也、雲は正鵠四偏四隅也、彀率に順って権りに的外を覘ふ、是れ実は正鵠に至る修練足の如き乎、と。

秘伝書が説くところ、常に技を超え、其心を得せしむることにより、還って、真に至るものである。形より入って真（神）を得るところに、兵法の道がある。

真弓をして、その女身に性を超えたワザを得さしめたのは何の故であったろうか。

朝吹弾十郎が城下を立去った日、真弓のもとに、一箇の茶壺が届けられたのだ。

その茶壺は、差出の茶舗の住所が書いてあるだけであったが、真弓はそれを手にしているうちに、わなわなとふるえ、双眸が潤んでくるのを圧えようがなかった。

江戸本所中ノ郷瓦町榎茶舗主人、とある。家人は不思議がったが、真弓は微笑で打ちけし、

「おいしいお茶を入れましょうね」

と、そそくさと立った。その翌日、真弓の姿は消えたのだ。

真弓の失踪は当然、城下に不審を抱かせた。

朝吹弾十郎との関係にまで世間が下司の勘ぐりをしたのも無理はない。そうした風評にもっとも影響を受けたのは、いうまでもなく、弾十郎の妻女である。

「私の立場から申しても、御行先を識りとうございます。心当りはありませぬか」

武士の妻女に強面に迫られると、藤八も弓乃も恐畏した。本所からの茶壺のことを洩らしたのは、他に言うべき材料がなかったからである。

本所中ノ郷といえば、向島に近い辺鄙な場所で当時はまだ小屋敷や町家がまばらで茶舗はなかったが、榎は樹齢もわからぬ古木で、大きな洞と瘤が目立った。近所では瘤榎と称っている。その榎の傍に植木屋があった。

結城弾次郎はその植木屋の離れを借りていたのである。

福山にいたときから見ると、日焼けしてひとまわり逞しくなっていた。

「名前を書けないので苦心したぞ」と、笑った。「真弓のことだから、お茶でわかると思った」

「ええ、あのときのお茶の味は忘れていませんわ」

「だが、来てくれるとは思わなかった」

自然に二人は抱きあっていた。真弓は久々に嗅ぐ男の匂いに、目くるめくような昂ぶりと喜びを感じていた。

弾次郎がたとえ下手人でも、いまの真弓には心に咎めるものがなかった。女心とは、惹かれる男の行為は正当化してしまう狡智があるのだろうか。理屈のほかの感情が優先するのか。真弓は弾次郎との暮しに満ち足りた日々を過した。

一介の浪人者となった弾次郎の身分では、うるさい格式も世間ていを慮ることもなかった。江戸の外れだけに、町家と農家が点在する気楽さが、逃避行の二人には、この上ない隠れ家で

あった。

真弓は、あのことには、つとめて触れぬようにしていた。弾次郎が下手人だったら、早晩、破局がくる。それが免れられぬ運命ならば、それまでの時間を、一日でも一刻でも、倖せに過したい。

不如意の生活でも、真弓には毎日が楽しかった。好きな男と二人きりで過すことの喜びに浸った。

弾次郎は近所の弓の道場で稽古をつけて生活の資を得ていた。本所界隈の御家人や、物好きな町人がくる程度の小さな弓道場だから目立たない。

ここに真弓も入門して、弓をひいた。老師に手ほどきされた腕前が、ここでめきめきと上ったのである。弓によって結ばれた二人であった。道場できびしい教えを受け、植木屋の離れに帰っては、男の腕の中で安らかな眠りを愉しむ。義兄や姉の冷たい眼もない。陋屋も真弓にとっては天国といえた。

雪中に立って霏々たる雪片の舞うのを凝視し、弓をひく真弓の姿に、弾次郎は、淑やかな女の裸に燃える情火を感じるのであった。〝蜘蛛の尺〟たる〝闇の規矩〟は日置流の極意とされるが、こうした秘伝が、常に未熟なる者、部外者には理解に苦しむのは当然かもしれない。

闇中に於ける蜘蛛の動きに心眼が開いたとき、矢の根は的中する。

こうした喜びの毎日がいつまで続くか、明けて元禄十一年の春も、漸く闌けたころ、弾次郎は、水野家の噂を聞いてきた。

「松之丞さまが、襲封御礼に出府なされるという」

僅か二歳であるが、形式的にも、将軍に拝謁して引出物を賜わることで、福山十万石が名実共に承認されるのだ。

弾次郎はそう話したあと、急に滅入ったように黙りこんだ。やはり浪人している身の悲しさが、こみあげたのであろう。

「――よろしいではありませぬか、真弓は倖せでございます、たとえ、あなたさまが御仕官かなわぬまでも……」

「浪人の妻でいるか」

「ええ、あなたさまさえあれば」

「真弓！」

柔肌をひしと抱きしめ、二人は狂ったように唇をあわせ、もとめあった。

その歓喜のさなかに、弾次郎が、ふと、聞耳をたてた。真弓は陶酔に浸っている。注意力は散漫になっていた。温い波に揺られるような陶酔である。弾次郎は立って、雨戸のところへ耳を寄せた。

（誰か……来ている）

軒下から、剝がれるように歩きだした気配がした。

誰だろう。若い男女の睦みを盗み見ようとする不埒者だろうか。翌日、そのことを聞いた真弓は、そういえば……と、思いだしたことがある。二、三日前から、家のまわりを徘徊してい

る者の影を感じていた。
その男だろうか。
不安のあまり、それまで口にすまいと思っていた朝吹弾十郎のことを言った。
知っている、と、弾次郎はこたえた。
「運悪く見つかったら、それまでだと思っている。武士として、立ち合うまでだ。無実の身が、おめおめ討たれることはない」
あたしにまで、隠さなくたって、と、真弓は言いたい思いを耐えた。臨終のきわの主馬助の口から聞いた、
（う、うぬ……弾次……）
の言葉が、消しても消しても、拭いとれぬ汚点のように耳にこびりついていたのだ。
「おれは、おれなりに考えた。主馬助を殺り、菊名を殺り、そして主君を殺った奴は、誰か、とな」
「……」
「そこには共通したものはない。逆に考えて見よう。脱牢したおれは、主君を怨んだ。誰もが、おれの仕業と睨んだらしいな、もっともだ。が、三ツ星の矢は、おれに罪を被せるためだ。なぜ、おれを罪にしなければならぬか、つまり……」
「あなたさまが無罪だからですわ」
飛びつくように、真弓は叫んだ。

「そうだ、前の二人を殺したのも、そやつだ。主馬助が自慢した矢切りのワザに挑戦したのが、ことの起りだろう。それはそれでよかった。たとえ闇に隠れても正面から射たのだからな」
「……」
「だが、菊名は背中から射られている。これは試合ではない。下手人の卑劣さは、堂々と主馬助を仆したことを、果し合いだとして名乗り出て、切腹するくらいの気でいたらよかったのに、急に命惜しくなったのであろう。となると、この事情を知っている者、いや菊名は知らない、知らないが、詮議がきびしくなれば、その口から洩れる……洩れることを恐れた奴だ」
「では……下手人と主馬助さまが誰かと談合しているところを菊名さまが見たのが」
「命とりになった」
あっと、真弓は小さく叫んだ。
「あたしが掛取りに伺ったので、菊名さまはしかたなく、お金を借りにゆきましたわ」
あれは、そうだ、確か聞いたはずだ、誰のところから借金してきたかを。そして、そのあと、主馬助も、その家から戻る途中だった。
その家……主馬助が、碁を打ちに来たことを証言した男。
「そうだ、そやつだ」
勢いこんで弾次郎が叫んだとき、ひゅッと矢羽が風をきって、障子をばりっと破った矢が飛び込んで来たのである。

「危ない！」

真弓を抱えるように身を伏せた。矢はするどい中りで、柱にぐさっと刺さった。

矢文だった。

「うぬ！　来たか」

矢文は、まだ墨の色が濡れていた。

――今夜子ノ刻、瓦焼場の原に待つ。弾。

同じ弾の名である。斬道の祖、日置弾正を崇敬してその流れを汲む者は弾の字をつける者が多い。弾次郎しかり、弾十郎しかり。この一字に、弓とりの運命が托されていた。

その夜――手馴れた強弓をかいこんで、瓦焼場のうらの原っぱに来た弾次郎が、殺気を闇に感じて提灯を投げ棄てたとき、挑戦者の羽矢は、提灯を貫ぬいて地に刺さった。

ぼうっと燃えあがる火から、弾次郎はたたたっと退った。八間の距離をとったのは、炎を彼我の中間に置いたのである。素早く矢をつがえて、叫んだ。

「まいれ、朝吹弾十郎」

それに答える声が、炎から八間の彼方にあった。

「今夜かぎりのいのちだぞ、結城。あきらめろ、真弓との楽しみも、終りだ」

久々に弾十郎の声を聞いて弾次郎は、腹の底から憤りがこみあげてきた。

「真弓はどうやら主馬助の臨終の言葉を聞き誤ったようだな、弾次に弾十か、ははは、きさまに運が無かったとあきらめろ。それに比べて、おれが女房は、真弓を呼んだきさまの茶壺から、ここを突き止めたわ。もっともおれが便りせざったゆえ、連絡が遅れたが」

「その間だけ、愉しませて貰ったと礼を言って置こうか」

お互いがその会話のうちに考えていたのは提灯の炎が絶えた一瞬である。

闇の中で弦が鳴り二本の矢が飛んだ。二人ははっきりと手応えを感じた。二本の矢尻は燃え尽きた提灯の上で、発止とぶつかり、小さな火花を散らして、落ちた。咄嗟に二人は二ノ矢をつがえる。刹那、朝吹弾十郎は、闇中に唸って飛来したものが、おのれの胸を貫ぬくのを憶えた。冷たく、熱く、生温い血のしぶきを感じて、よろめいた。

「そんな馬鹿な……」

二ノ矢をつがえるのが、弾次郎の方が早かったのか。そんなはずはない、と呟やきながら、疑惑を抱いて、闇の奈落に沈んでいった。

細腕に弓をかいこんだ真弓が近づいてくるのを見ないまま死んだのは、弓自慢のこの男にせめてもの安らぎだったかもしれない。

下手人が判明し、結城弾次郎は江戸屋敷に出頭した。疑いは霽れたが、福山家中はもうそれどころではない新たな事態に騒擾していた。襲封御礼に出府してきた二歳の主君松之丞勝峯が、道中で発病して重態に陥っていたのである。四月二十八日に出府した勝峯が、大名も武士も何もわからぬまま死んだのは五月五日。男の節句とは皮肉だった。

皮肉といえば、せっかく帰参がかなったと思ったのもつかの間、ふたたびの家督相続願いは、

もはや糊塗しようもない。江戸で死んだことが水野家の没落する宿命だったのであろう。福山十万石改易となって、結城弾次郎は、今度こそ本当の浪人となってしまった。

「いいんです、あたし、あなたさまが御浪人の方が」

真弓はこんどこそ、誰憚からぬ弾次郎の女房として仕えることが出来るのだと、喜びに溢れた笑顔でより添うのだった。半歳あまりの江戸暮しで、真弓は驚くほど垢ぬけし、初々しい若妻の美しさだった。

解　説

日本文芸家協会編による時代小説の年鑑アンソロジー『代表作時代小説』の昭和四十四年度版に、早乙女貢の剣豪小説「天流斃る」が収録されている。師の塚原卜伝からも恐れられた殺人剣を振るって、いわゆる〝剣禅一如の剣聖〟にはほど遠いところで終始した井手判官伝鬼の事蹟をたどった短篇作である。この作品には「作者のことば」が付されていて、執筆動機などがわかる仕組みになっているのだが、その前半部を紹介しておきたい。

「剣豪を書くのは好きではない。

剣豪というイメージには、あまりにも精神的要素が深く入りすぎている。剣と精神を結びつかせたのは、近世の儒教との関聯に於て、武士道の高揚に資するためだったものゝようである。

必然的に、精神の昇華の証左として、武士が剣豪あるいは剣聖と呼ばれるまでになったとき、そこには人間性の喪失を需められるようだ。

小説があくまでも人間を書く以上、人間性を失った〝聖人〟を書くことに意味を見出せない。それはすでに宗教の範疇だからである。宗教小説を書こうというのなら、むろん話は別だ。

同じ条件で剣の使い方――直截に言うなら人の斬り方――を考究したとき、その巧拙の差は、呼吸差、となり、その一弾指の差を精神の高低に需めるところに、嘗つての剣豪小説は成り立った」

長い引用になってしまったが、この一文には、早乙女貢の剣豪小説観がよく表れていて、まことに興味深いものがある。

戦前からの剣豪小説は一刀三拝式のものが多く、剣は精神と深く結びついていた。剣のあり方が一変するのは、昭和二十年代末から三十年代前半にかけて、五味康祐や柴田錬三郎らの作品を契機とする剣豪小説ブームが巻き起こってからのことである。吉川英治が『宮本武蔵』で描いた武蔵像、剣の修業を通して己れを磨くといった人生求道的な要素は、この剣豪小説ブームの中には見られない。人間の生の欲望、本能といったものを赤裸々に描くことで、戦後の時代小説は新しい方向を切り拓き、従来の時代小説にあき足りないものを感じていた読者の心をつかみとった。

剣豪ものを手がける作家は、剣による対決の一瞬の太刀捌きにアイデアを凝らしてさまざまな秘剣を編み出し、有名・無名、あるいは実在・仮空それぞれ入りまじった多くの剣豪を生み出していった。

早乙女貢も戦後のこうした系譜に属する作家である。「剣豪を書くのは好きではない」という彼の内には、悟りすました〝剣禅一如〟の剣豪や〝剣聖〟に対する強い反感が秘められており、それが表題作「秘剣鱗返し」以下七篇の諸作にも見受けられるような、一種独特の趣きを

持った剣豪小説を書かせる要因となっている。

早乙女貢はここで一つの工夫を凝らしている。「野ざらし鉄砲衆」を除く六篇の主人公として若い女性を設定していることだ。その意味では、女人剣士伝といった趣きもあるのだが、彼女たちは本格的な剣の道を歩むというわけではない。不幸な運命のもとで非情の剣、あるいはそれに代る武器をマスターするという展開になっている。

若い女性を主人公にしたことについて、早乙女貢は次のように述べたことがある。

「昔の女性がすべて男の玩弄物として存在していただけとは思われませんし、必ず女武芸者と称される遣い手もいたはずです。幕末の会津戦争のときにも、現に男顔負けの活躍ぶりを示した会津女性が沢山いましたからネ」

女性でも、剣技に優れていれば刀や薙刀を自在に振るうことができるはずだというわけなのだが、本巻に登場してくる女性たちは武芸で身を立てるためではなく、許婚者や恋人、父親や姉の仇討ちのために、剣などの武器をとるのである。そこには剣の道をきわめるといった求道の姿はない。ただひたすらに仇敵に立ち向かっていく姿が描かれている。

表題作の「秘剣鱗返し」の主人公・宇乃は、上意の仕手役で逆に斬られてしまった許婚者の仇討ちを果たそうと、居合抜刀術の修業に励む。彼女は溪流の濡れた岩上で、「鱗返し」の秘剣を会得する。

「弦月、雲を斬る」の主人公・お久は、信長の伊賀攻めで両親と姉を喪うが、姉の亭主田六が甲賀の忍びで、信長軍のスパイとして伊賀へ潜入して来たことが分かり、彼への復讐のため

に、紀州の山奥に住む南嶽坊円乗のもとで鎌を武器とする武芸を学ぶ。背にも刃がついた鎌で田六を倒すまでの彼女の修業の模様は、武器が鎌というありふれたものだけに、剣の場合よりも興味をひかれる。

「狂刃系図」の主人公・お葉は、自分を捨てた母とその情人を討つために十年もの間、剣の修業に励む。

「蟹眼の大事」の主人公・お留以は、牢人者に斬られた船頭の父親の仇討ちのために、松林蝙也斎の門に入って手裡剣を習う。修業五年目に、彼女は右手でも左手でも手裡剣を放つことができるようになり、蝙也斎から秘伝の必殺技を授かって仇討ちを果たす。

「怨み兜の八幡座」の主人公・さつきは、据物斬りに失敗して果てた父に代わって修業に励み、二年後に奥義を受けて、父を死に至らしめた者への復讐を遂げる。

「秘伝闇の蜘蛛」の主人公・真弓は、殺人の嫌疑を受けて出奔した恋人のために弓を習う情熱の女である。真犯人と恋人が対決する場面で、彼女の弓が恋人の窮地を救う。

この六篇のうち、最後の真弓だけが恋人と結ばれるといったハッピーエンドで終わっている。あとの五篇はいずれも、主人公の末路が明示されないままに終わる。女であることを忘れ、ひたすら修業に励んだ彼女たちも、結局のところ、女ゆえの弱さをさらけ出してしまう。彼女たちの剣は怨念の剣であるが、決して好戦の刃ではないところに、彼女たちのシンの強さと意外なモロさがある。

「野ざらし鉄砲衆」は、鉄砲足軽を主人公にした話で、他の六篇とは趣きを異にしたものだが、仲間割れをして同輩を殺めた半五郎に対する憎しみと、半五郎の娘お千への不憫の情に揺れる主人公・十内の心理描写で読ませる作品。最後のドンデン返しが哀れだ。

七篇ともに、主人公たちはひたすら仇を討つことに専念する。女たちは女であることを忘れてまで。早乙女貢の剣豪小説に哀しさが漂っているのは、こうした彼らのひたむきさにあるといえよう。

清原康正

時代小説文庫　101
秘剣鱗返し
昭和五十九年九月二十日　初版発行
著　者　早乙女貢
発行者　大洞國光
発行所　株式会社富士見書房
東京都千代田区富士見一―十二―十四
電話東京二六一―五三七五（代表）
〒一〇二　振替東京⑦八六〇四四
印刷所　暁印刷　製本所　大谷製本
装幀者　熊谷博人
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。
Printed in Japan
ISBN4-8291-1101-1

時代小説文庫　既刊目録

大菩薩峠 全二十冊	中里介山	
赤穂浪士 上巻・下巻	大佛次郎	
海と風と虹と 上巻・下巻	海音寺潮五郎	
銭形平次捕物控 全十冊	野村胡堂	
赦免花は散った 木枯し紋次郎	笹沢左保	
女人講の闇を裂く 木枯し紋次郎	笹沢左保	
六地蔵の影を斬る 木枯し紋次郎	笹沢左保	
無縁仏に明日をみた 木枯し紋次郎	笹沢左保	
夜泣石は霧に濡れた 木枯し紋次郎	笹沢左保	
上州新田郡三日月村 木枯し紋次郎	笹沢左保	
木枯しは三度吹く 木枯し紋次郎	笹沢左保	
命は一度捨てるもの 木枯し紋次郎	笹沢左保	
三途の川は独りで渡れ 木枯し紋次郎	笹沢左保	
虚空に散けた賽一つ 木枯し紋次郎	笹沢左保	
神州魔法陣 上巻・下巻	山田風太郎	
妖幻黄金鬼	山田風太郎	
遺臣伝	富士に立つ影 全七冊	
新選組始末期 決定版	大佛次郎	
神田総司忽唄	風雲将棋谷	
土方歳三散華	はだか大名 上巻・下巻	
適塾の維新 全二冊	わんぱく公子 上巻・下巻	
	素浪人日和 上巻・下巻	
	鉄火奉行	
	若殿ばんざい	
	剣と旗と城 全三冊	
	最後の勝利者 全二冊	
	日本男子物語 柴錬立川文庫	
	毒婦伝 奇 柴錬立川文庫	
	裏返し忠臣蔵 柴錬立川文庫	
	忍者からす 柴錬立川文庫	
	風魔鬼太郎 柴錬立川文庫	
	怪盗暗闇吉三 松平右近事件帳	
	はぐれ鳥の唄 松平右近事件帳	
子母沢寛	柳生一族の陰謀	
子母沢寛	毛利元就 全五冊	
広瀬仁紀	一本刀土俵入 長谷川伸名作選	
広瀬仁紀	大坂城物語 上巻・下巻	
広瀬仁紀	新選組 全三冊	

白井喬二	
角田喜久雄	
山手樹一郎	
山手樹一郎	
山手樹一郎	
山手樹一郎	
山手樹一郎	
柴田錬三郎	
柴田錬三郎	
柴田錬三郎	
柴田錬三郎	
柴田錬三郎	
柴田錬三郎	
柴田錬三郎	
柴田錬三郎	
柴田錬三郎	
郡順史	
松永義弘	
榊山潤	
長谷川伸	
村上元三	
村上元三	